岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第478集

中田（なかた）遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業大川目地区関連遺跡発掘調査

2006

久慈地方振興局農政部農村整備室
（財）岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第478集
中田遺跡発掘調査報告書　正誤表

頁	位　置	誤	正
P３	第2図の縮尺	２：１０００	１：２０００
P44	第28図　22		３号溝
P44	第28図　26		Ｐ３柱穴
抄録	主な遺物	鉄滓　７箱	鉄滓　10箱

中田遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業大川目地区関連遺跡発掘調査

序

岩手県には、旧石器時代から連綿と続く数多くの遺跡が残されております。先人達が創造してきたこれらの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に課せられた責務であるといえましょう。一方、広大な面積を有し、その大部分が山地である本県にあっては地域開発による社会資本の充実も県民の切実な願いであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和は今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業に関連して平成16年度に発掘調査を行った久慈市大川目町に所在する中田遺跡の調査結果をまとめたものであります。

発掘調査によって、本県では珍しい縄文時代早期の土器片が発見されるとともに、古代の竪穴住居跡が検出されました。竪穴住居跡からは久慈の特産ともいえる琥珀が出土しており、当時から琥珀の採掘・加工が中田遺跡の周辺で行われていたことが明らかとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財行政に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助・御協力を賜りました久慈地方振興局・久慈市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成18年1月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　合田　武

例　言

1　本報告書は、岩手県久慈市大川目町第23地割25番地１ほかに所在する中田遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2　本遺跡の調査は、経営体育成基盤整備事業大川目地区に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会生涯学習文化課と久慈地方振興局農政部農村整備室との協議を経て、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。

3　本遺跡の調査成果は、すでに『現地公開資料』（平成16年７月22日）・『平成16年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第469集）において発表しているが、内容については本書が優先する。

4　岩手県遺跡登録台帳に登録されている中田遺跡の遺跡番号と遺跡略号は次の通りである。

遺跡番号　ＪＦ28－2299　　遺跡略号　ＮＴ－04

5　野外調査の面積・期間・担当者、室内整理の期間・担当者は次の通りである。

野外調査　調査面積：17,000㎡

期間：平成16年４月14日～７月30日

担当者：澁澤二郎・石崎高臣

室内整理　期間：平成16年11月１日～平成17年３月31日

担当者：澁澤二郎

6　遺物の鑑定は次の機関に依頼した。

炭素14年代測定：株式会社加速器分析研究所（本社神奈川県川崎市）

火山灰分析：株式会社京都フィッション・トラック（本社京都府京都市）

石材鑑定：花崗岩協会

7　基準点測量は株式会社藤森測量設計（本社久慈市）に委託した。

8　野外調査・室内整理にあたって次の方々の御協力・御指導をいただいた（敬称略、所属は当時）。

千葉啓蔵（久慈市教育委員会）、八木光則（盛岡市中央公民館）

9　本報告書は澁澤二郎と石崎高臣が分担して執筆した。ただし、第１章は久慈地方振興局農政部農村整備室に原稿を依頼し、執筆していただいたものである。また、附編の自然科学分析については受託機関の原稿をそのまま転載したものである。

10　本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図などは岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

目　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の概要 …… 1
1　遺跡の位置 …… 1
2　遺跡周辺の地理的環境 …… 1
（1）地形と地質 …… 1
（2）琥珀 …… 4
3　基本土層 …… 7
4　遺跡周辺の歴史的環境 …… 8
（1）久慈市の遺跡 …… 8
（2）周辺の遺跡 …… 8
（3）周辺の歴史 …… 10
Ⅲ　調査の経過と方法 …… 12
1　野外調査の経緯 …… 12
2　野外調査の方法 …… 12
（1）調査区の設定 …… 12
（2）グリッドの設定 …… 12
（3）基準点の設定 …… 13
（4）表土除去と遺構の検出 …… 13
（5）遺構の精査と実測 …… 13
（6）写真撮影 …… 13
3　室内整理の手順と方法 …… 13
（1）遺物 …… 13
（2）遺構 …… 14
（3）原稿執筆 …… 14
（4）掲載図 …… 14
4　外部委託 …… 14
（1）火山灰分析 …… 14
（2）炭素14年代測定 …… 15
Ⅳ　検出した遺構と出土遺物 …… 15
1　検出した遺構 …… 15
（1）竪穴住居跡 …… 15
（2）竪穴状遺構 …… 23
（3）掘立柱建物跡 …… 24
（4）焼土遺構 …… 25
（5）陥し穴状遺構 …… 26
（6）土坑 …… 28
（7）溝跡 …… 35
（8）柱穴列・柱穴状土坑 …… 38
Ⅴ　遺構外出土遺物 …… 40
（1）縄文土器 …… 40
（2）石器 …… 41
（3）陶磁器 …… 41
（4）琥珀 …… 41
Ⅵ　まとめ …… 48
1　遺構 …… 48
2　遺物 …… 49
3　総括 …… 50
Ⅶ　考察 …… 51
附編1　中田遺跡出土の火山灰分析 …… 63
附編2　中田遺跡出土炭化物の年代測定 …… 71
報告書抄録 …… 99

表　目　次

第1表　遺構一覧 …… 5・6
第2表　周辺の遺跡一覧 …… 8
第3表　基準杭・補助杭一覧 …… 13
第4表　柱穴観察表（1号掘立柱建物跡）…… 24
第5表　1号柱穴列 …… 39
第6表　2号柱穴列 …… 39
第7表　3号柱穴列 …… 39
第8表　4号柱穴列 …… 39
第9表　柱穴観察表 …… 39
第10表　遺物観察表1（土師器・土製品・鉄製品・石器・陶磁器）…… 46
第11表　遺物観察表2（縄文土器）…… 47

図版目次

第１図　岩手県内における遺跡の位置 …… 2
第２図　遺跡周辺地形図 …… 3
第３図　遺跡周辺地質分類図 …… 4
第４図　遺構配置図 …… 5・6
第５図　基本土層断面図 …… 7
第６図　周辺の遺跡分布図 …… 9
第７図　グリッド配置図 …… 12
第８図　スクリーントーン・実測図凡例 …… 14
第９図　１号竪穴住居跡（１）…… 18
第10図　１号竪穴住居跡（２）…… 19
第11図　２号竪穴住居跡（１）…… 20
第12図　２号竪穴住居跡（２）…… 21
第13図　３号竪穴住居跡 …… 22
第14図　１号竪穴状遺構 …… 23
第15図　１号掘立柱建物跡 …… 24
第16図　１号焼土 …… 25
第17図　１号～５号陥し穴状遺構 …… 27
第18図　１号土坑 …… 31
第19図　２号～６号・９号土坑 …… 32
第20図　７号・８号・10号～13号土坑 …… 33
第21図　14号～19号土坑 …… 34
第22図　２号～４号溝 …… 36
第23図　１号溝 …… 37
第24図　１号～４号柱穴列・柱穴群 …… 38
第25図　１号～４号柱穴列断面図 …… 39
第26図　遺構内出土遺物（１）…… 42
第27図　遺構内出土遺物（２）…… 43
第28図　遺構内出土遺物（３）・遺構外出土遺物（１）…… 44
第29図　遺構外出土遺物（２）…… 45
第30図　住居跡模式図 …… 48
第31図　中田遺跡検出住居跡 …… 48
第32図　久慈周辺の土器と馬淵川下流域の土器 ……56・57

写真図版目次

写真図版１　空中写真（１）…… 77
写真図版２　基本土層、遺物出土状況 …… 78
写真図版３　空中写真（２）…… 79
写真図版４　１号竪穴住居跡（１）…… 80
写真図版５　１号竪穴住居跡（２）…… 81
写真図版６　２号竪穴住居跡（１）…… 82
写真図版７　２号竪穴住居跡（２）…… 83
写真図版８　３号竪穴住居跡（１）…… 84
写真図版９　３号竪穴住居跡（２）、１号焼土 …… 85
写真図版10　１号竪穴状遺構 …… 86
写真図版11　１号掘立柱建物跡、柱穴列 …… 87
写真図版12　１号～４号陥し穴状遺構 …… 88
写真図版13　５号陥し穴状遺構、１号～３号土坑 …89
写真図版14　４号～７号土坑 …… 90
写真図版15　８号～11号土坑 …… 91
写真図版16　12号～15号土坑 …… 92
写真図版17　16号～19号土坑、３号溝 …… 93
写真図版18　１号・２号・４号溝 …… 94
写真図版19　遺構内出土遺物（１）…… 95
写真図版20　遺構内出土遺物（２）…… 96
写真図版21　遺構外出土遺物（１）…… 97
写真図版22　遺構外出土遺物（２）…… 98

Ⅰ　調査に至る経過

中田遺跡は、経営体育成基盤事業大川目地区の施行に伴い、その事業区域内に位置することから発掘調査を実施することになったものである。

本事業は、久慈市大川目町地内の85haの地区で、現況の水田は昭和20～30年代に５ａ区画に整備されたものの、区画形状が小さいうえに農道が狭小なため、農地の流動化や農産物の輸送、農業機械の搬入に支障を来している状態であった。それらの阻害要因を除去し、高生産性農業の確立を図るために、ほ場の整備を実施することとして、平成13年度に新規採択されたものである。

本事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成11年５月18日付け久慈整第65号により久慈地方振興局久慈農村整備事務所より岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼をし、平成11年８月30日付け教文第560号の回答で、工事範囲内に中田遺跡が含まれていることが確認されたことに始まる。分布調査結果に基づき久慈地方振興局農政部農村整備室では、平成15年11月14日付け久地農整第377号で教育委員会に試掘調査を依頼した。依頼を受けた県教育委員会では、平成15年11月20～21日に試掘調査を実施し、その結果、発掘調査が必要なことが判明し、平成15年12月10日付け教生第1477号でその旨の回答があったものである。　　（久慈地方振興局農政部農村整備室）

Ⅱ　遺跡の概要

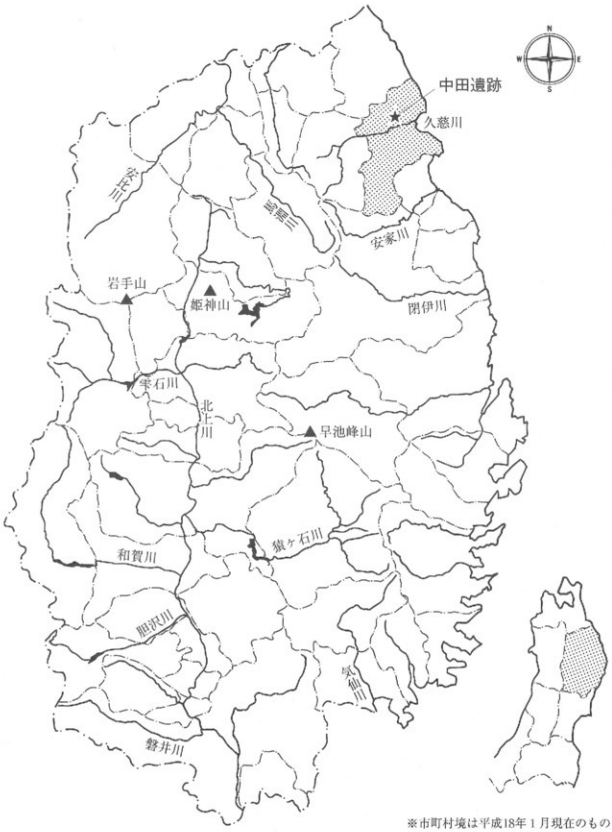
１　遺跡の位置（第１図）

本遺跡が所在する久慈市は北上山地の北東部縁辺にあたる。東は太平洋に臨み、西は久慈川を経て山形村、北は高家川を挟んで洋野町、南は野田村・岩泉町とそれぞれ接している。本遺跡はＪＲ八戸線・三陸鉄道北リアス線久慈駅から西へ５kmほど進んだ久慈市大川目町第23地割25番地１ほかに位置する。北上山地に源を発する久慈川は久慈市内中央部をほぼ東流して太平洋に達するが、本遺跡はその左岸の北緯40度11分19秒・東経141度42分48秒付近にある。

２　遺跡周辺の地理的環境（第２・３図）

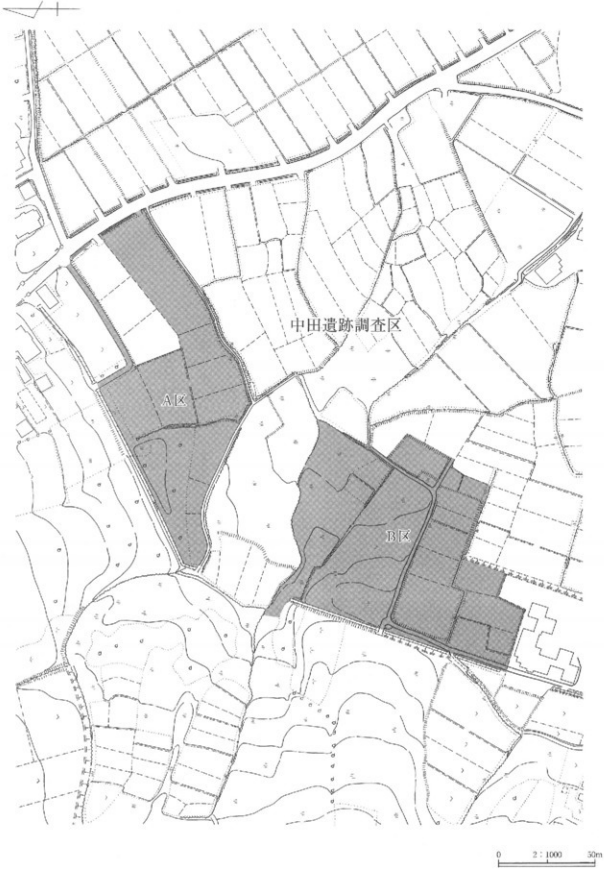
（１）地形と地質

久慈市の大部分は三陸海岸に沿って南北に連なる海岸段丘に載っている。これらの海岸段丘は、夏井川・久慈川・長内川・宇部川やその支流によって開析され、丘陵化している。段丘は照井一明によって９つに分類されており（照井一明1982）、久慈市内の遺跡はこれらのうち種市・有家・麦生の各段丘に載り、海を望める場所に立地しているものが多い（財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1989）。これに対して、本遺跡は標高24～25mと段丘より一段低い久慈川によって形成された沖積平野の面に載っている。遺跡の西側には久慈川の支流である田子内川が北西から南東方向に流れている。夏井川・久慈川・長内川の支流は、水源を持つ丘陵地から土砂を運搬し、小規模ながら扇状地を形成しており、田子内川も例外でない。微視的に見れば、本遺跡はこの扇状地上に位置する。したがって、調査区は北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。Ｂ区とした調査区ではそれが顕著で、最大で２mの比高がある。なお、縄文海進時には本遺跡周辺は海面下だったようである（久慈市史編纂委員会1984）。周辺には凝灰岩を中心とした古生代の層、礫岩・砂岩・凝灰岩などからなる中生代の層、礫岩・砂岩などからなる新生代の層が帯状に北西－南東方向に分布している（生出慶司ほか1989）。また、前述のように久慈川およびその支流による沖積層が見られる。



※市町村境は平成18年１月現在のもの

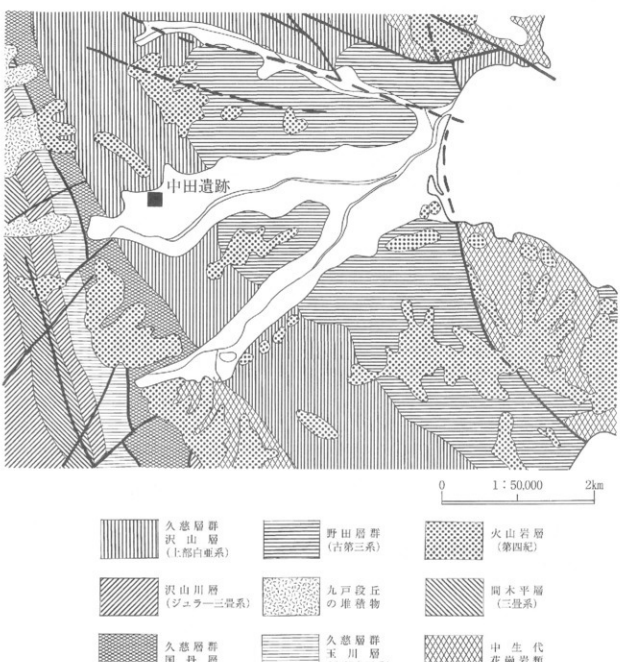
第1図　遺跡の位置



第2図　遺跡周辺地形図

（2）琥　　珀

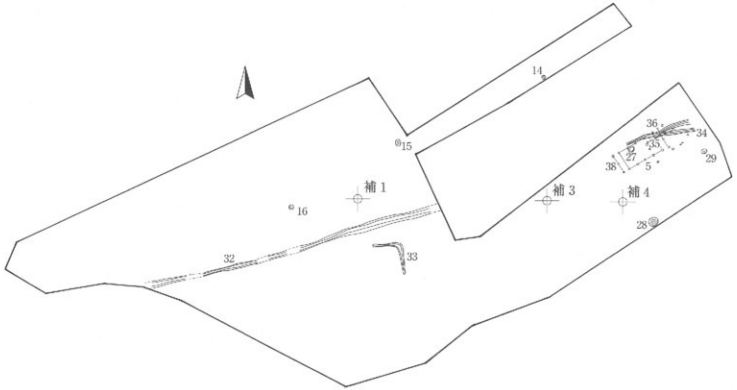
本遺跡が位置する久慈市周辺では古くから琥珀が採集されている。琥珀は樹木の樹脂が土砂などに埋もれ化石化したもので、久慈周辺で採集されるものは中生代白亜紀後期（8500～8700万年前）の南洋スギ（学名アラウカリア）を起源樹種とする（久慈琥珀博物館の展示による）。前述の中生代の地層である玉川層がこの時期にあたり、野田村玉川から久慈市大川目町田子内と同碁石を結んだ線に露出している。記録された琥珀の採掘場所を地図上に落とすと、玉川層の分布域と一致する。

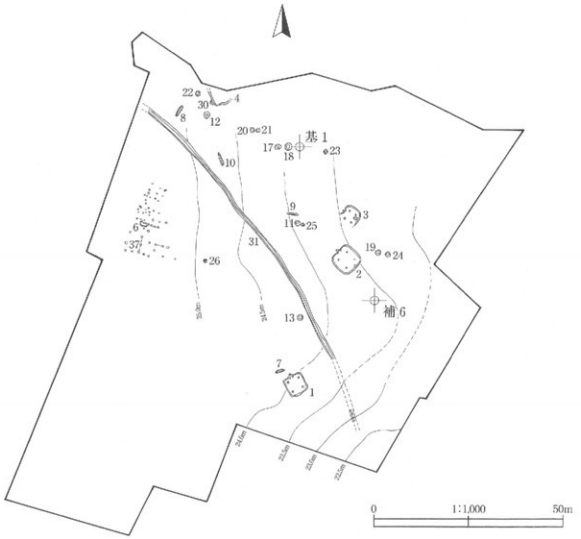


第3図　遺跡周辺地質分類図

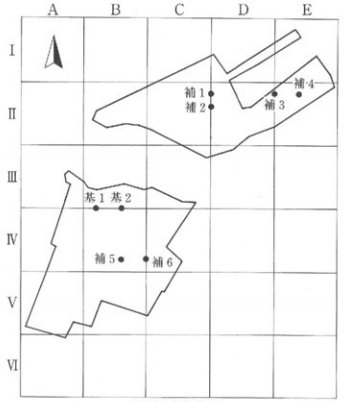
第1表　遺構一覧

NO	調査区	遺構名	NO	調査区	遺構名
1	B区	1号竪穴住居跡	20	B区	9号土坑
2	B区	2号竪穴住居跡	21	B区	10号土坑
3	B区	3号竪穴住居跡	22	B区	11号土坑
4	B区	1号竪穴状遺構	23	B区	12号土坑
5	A区	1号掘立柱建物跡	24	B区	13号土坑
6	B区	1号焼土	25	B区	14号土坑
7	B区	1号陥し穴状遺構	26	B区	15号土坑
8	B区	2号陥し穴状遺構	27	A区	16号土坑
9	B区	3号陥し穴状遺構	28	A区	17号土坑
10	B区	4号陥し穴状遺構	29	A区	18号土坑
11	B区	5号陥し穴状遺構	30	B区	19号土坑
12	B区	1号土坑	31	B区	1号溝
13	B区	2号土坑	32	A区	2号溝
14	A区	3号土坑	33	A区	3号溝
15	A区	4号土坑	34	A区	4号溝
16	A区	5号土坑	35	A区	1号柱穴列
17	B区	6号土坑	36	A区	2号柱穴列
18	B区	7号土坑	37	B区	3号柱穴列
19	B区	8号土坑	38	A区	4号柱穴列





第4図　遺構配置図



調査区全体図

3　基　本　土　層（第5図）

本遺跡の基本層序は、表土や盛土を除けば、大きく分けて古代以降の遺構検出面である黒色土層、縄文時代の遺構検出面である黒褐色土層あるいは暗褐色土層の2つに分けられる。遺跡の現状は水田あるいは休耕田だが、地元の方々の話によると、水田を造成する際に客土が盛んに行われたようである。それを証するように特にB区の南側では第Ⅱa～Ⅱd層まで4回ほど土が盛られていたことになる。一方、北側では盛土がなく、表土の直下が古代の遺構検出面（第Ⅲ層）となっている。第Ⅳ層では火山灰を含む。これは黄橙色ないしは褐色を呈しており、分析した結果、十和田南部テフラ（いわゆる南部浮石）と判明した（詳しい分析結果は附編1を参照されたい）。

B区北西壁面

第1層：10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりあり　黄橙色火山灰粒（10YR8/6）微量含む。近世・古代遺構検出面。南東壁面第Ⅲ層以降に相当。

第2層：10YR2/3　黒褐色土　粘性ややあり　しまりあり　層全体に上記火山灰粒多量含む。縄文早期遺物包含層。南東壁面第Ⅳ層に相当。

第3層：10YR5/6　黄褐色土　粘性ややあり　しまりあり　南東壁面第Ⅴ層に相当。

B区南東壁面（遺物取り上げ時の基準土層）

第Ⅰ層：10YR3/1　黒褐色土　粘性なし　しまりややあり　径1cm程の礫を多量に含む。現表土。

第Ⅱa層：10YR6/6　明黄褐色土60%、10YR2/2黒褐色土40%の混合土層。粘性なし　しまりあり　盛土。

第Ⅱb層：10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりあり　径1～3cmの礫を少量含む。盛土。

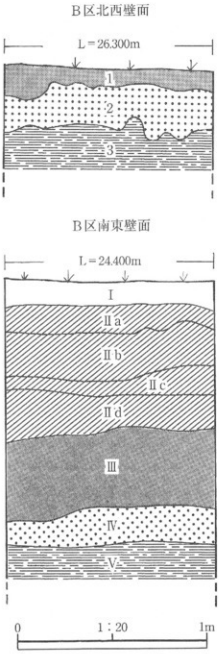
第Ⅱc層：10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりありにぶい黄褐色土（10YR5/3）まだら状に5～10%含む。径1～3cmの礫を少量含む。盛土。

第Ⅱd層：10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりあり　径1cm程の礫を少量含む。盛土か？

第Ⅲ層：10YR1.7/1　黒色土　粘性あり　しまりややあり　古代遺構検出面。

第Ⅳ層：10YR2/2　黒褐色土　粘性あり　固くしまる　径2～3cmの褐色火山灰粒（To-Nb）少量混入。縄文時代遺構検出面

第Ⅴ層：10YR3/3　暗褐色土　粘性あり　固くしまる



第5図　基本土層

4　遺跡周辺の歴史的環境

（1）久慈市の遺跡

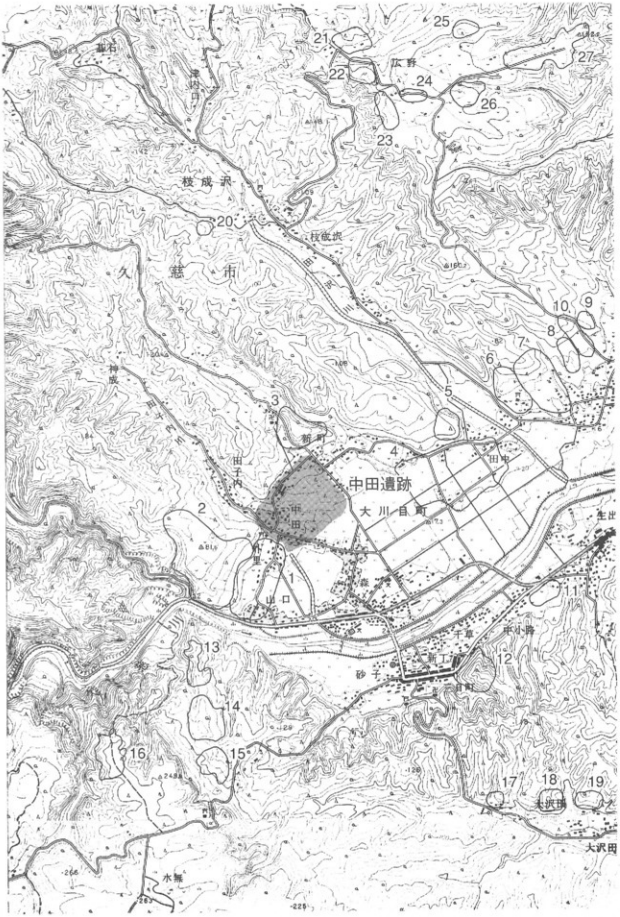
平成16年度版岩手県遺跡情報検索システムによれば、久慈市内では411箇所の遺跡が登録されている。そのうち古代のものは82遺跡を数えるが、なかには本遺跡のように縄文土器の散布地として登録されているものもあるので、今後調査が進むことによって増える可能性がある。遺跡の多くは海岸段丘上の平坦面や緩斜面に占地しており、本遺跡のように沖積平野に載っている遺跡は、本遺跡の他に同じ久慈川左岸の寺里Ⅱ・畑田Ⅱ・畑田Ⅲの各遺跡、田子内川をはさんで本遺跡と対峙する外里遺跡ぐらいである。沖積平野部分は市街地化しており、分布調査が及んでいないということもあるが、その傾向を加味しても沖積平野に占地する遺跡が段丘あるいは山地に位置する遺跡に比べて少ないことは変わりはないだろう。

（2）周辺の遺跡（第6図）

本遺跡の北側には市指定史跡となっている久慈城跡（3）がある。久慈川の支流である切金川と田子内川に挟まれた南東に延びる丘陵の突端に位置し、主郭・帯郭・空堀・堀が確認されている。本格的な発掘調査は行われていないが、分布調査に伴う試掘調査が久慈市教育委員会によって行われており、柱穴が検出されている。これらは重複していたり、近接していることから建物が数回建て替えられていることが指摘されている（久慈市教育委員会1992）。なお、久慈川を挟んで右岸には単郭式で空堀・土塁が残存する三日領館（12）が久慈城跡と対峙している。田子内川を挟んで本遺跡の反対側には外里遺跡（1）が位置している。発掘調査は行われていないが、以前から縄文土器の鉢・深鉢の破片や石器（石鏃・磨石・スクレイパー・石匙・石槍など）が採集されている（久慈市教育委員会

第2表　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種　別	時　代	特　記　事　項
1	外里	集落跡	縄文	縄文土器（前期・中期・晩期）
2	外里向上	散布地	縄文・弥生・古代	縄文土器（前期・後期・晩期）、弥生土器、土師器
3	久慈城	城館跡	中世	主郭・帯郭・馬場跡・空堀
4	新町	散布地	古代	土師器
5	枝成沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（後期）
6	畑田Ⅱ	集落跡	縄文・古代	縄文土器（後期）、土師器（奈良・平安）
7	畑田Ⅲ	集落跡	縄文・古代	縄文土器（前期・後期）、土師器
8	畑田Ⅳ	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器（奈良）
9	畑田Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器（後期）
10	畑田	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
11	仲小路	散布地	古代	土師器
12	三日領	城館跡	中世	空堀・土塁・単郭
13	荒津前平Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（後期・晩期）
14	荒津前平Ⅰ	集落跡	古代	土師器
15	荒津前	散布地	縄文・古代	縄文土器（前期）、土師器（平安）
16	水無	散布地	古代	土師器
17	大沢田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
18	大沢田Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器（中期）、土師器
19	大沢田Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
20	枝成沢	散布地	縄文	土器、石器
21	広野Ⅱ	散布地	縄文・弥生	錐型土製品、縄文土器（後期）、弥生土器（後期）
22	広野Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器（後期）
23	広野Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器
24	広野Ⅴ	散布地	縄文・古代	縄文土器（後期・晩期）、土版、土師器、石鏃
25	広野Ⅵ	集落跡	縄文	縄文土器（前期・中期・後期）
26	広野Ⅶ	散布地	縄文	縄文土器（後期）
27	広野	散布地	縄文・弥生・古代	縄文土器、弥生土器（後期）、土師器



第6図　周辺の遺跡分布図

1992)。古代の遺跡としては本遺跡の東約1kmに新町遺跡（4）が土師器の散布地として登録されている。また、久慈川を挟んだ高位段丘面や緩斜面に荒津前平Ⅰ遺跡（14）・荒津前遺跡（15）・水無遺跡（16）があるが、いずれも土師器が採集されているのみで発掘調査は行われていないため、詳細は不明である。なお、久慈川の左岸では本遺跡から東方にかけて遺跡の分布密度は比較的濃いが、右岸は稀薄である。右岸は丘陵の北面斜面で日照条件が悪く、加えて丘陵が小河川によって開析され険峻な地形であるためであろうと考えられている（久慈市教育委員会1992)。

（3）周辺の歴史

霊亀元年（715)、須賀君古麻比留という者が朝廷に対して次のような申請を行っている。すなわち、「先祖以来、昆布を貢献れり。常にこの地（＝閇村のこと）にて採りて、年時を闕かさず。今、国府郭ドは、あい去ること道遠し。往還旬を累ねて、甚だ辛苦多し。閇村において使りに郡家を建て、百姓に同じくして、ともに親族を率いて永く貢を謁かざらん」（『続日本紀』霊亀元年10月丁丑条）と。つまり、現在の上閇伊郡・ド閇伊郡域を指すと考えられている閇伊村（ここでは閇村とある）に住んでいた古麻比留は、先祖代々昆布を採集してそれを「国府」（仙台市郡山遺跡か）まで運んでいたが、道程は遠く苦労が多かった。そこで、それを解消するために閇伊村に郡家を建てたいと申請しているのである。この史料からは古麻比留の「先祖」、少なくとも彼から2・3代前の世代、おそらく7世紀中ごろより倭王権とつながりを持ち、特産物の昆布を貢納していたことが読みとれる。この倭王権と閇伊村との昆布を媒介とした交通は、史料上「貢獻」とあることから支配－被支配関係を想起させる。しかし、「郡家を建て」るとはいっているものの、古代末期になるまでこれ以後の史料に閇伊郡は見られないことから、古麻比留たち閇伊村の人々は律令国家の国－郡支配下に置かれたわけではなく、朝貢を媒介とした交通形態をとっていたと考えられる。こうした閇伊村と倭王権との交通形態は、久慈市に限ってみればさらにさかのぼると思われる。というのも、昆布ではないけれども、久慈で産出した琥珀の加工品が大和周辺の古墳の副葬品とされているからである。室賀照子は、天理市東大寺山古墳群12号墳・生駒市富雄丸山2号墳・広陵町於古墳といった奈良県の諸古墳から出土した琥珀製装飾品の赤外吸収スペクトル分析を行い、それが久慈産であることを指摘している（室賀1976)。久慈産の琥珀は他にも茨城県牛堀町（現、潮来市）観音寺山7号墳からも出土していることから（八木1996)、大和周辺の古墳から出土しているものは単なる収奪というよりも交易によるものであろう。これらの古墳には7世紀代だけではなく、6世紀までさかのぼるものもあり、また久慈産と判明しているわけではないが前期古墳からも琥珀が出土しているので、かなり古くから久慈周辺は他地域との交流が活発だったことが想定される。このように太平洋沿岸地域と倭王権・律令国家は安定した交易を行っていたが、8世紀の後半に至ると急に不安定な状態となる。宝亀元年（770）には、おそらく岩手県北部の首長で桃生城あるいは伊治城下に居住していた宇漢迷公宇屈波宇が、城柵の官人による引き留めにも関わらず「一・二の同族を率いて、必ず城柵を侵さん」と揚言して、一族を率いて自らの居地に帰ってしまっている（『続日本紀』宝亀元年8月癸亥条)。そして、この4年後の宝亀5年には海道の蝦夷が桃生城を襲撃する事件が発生する。この事件をきっかけに東北地方北部の太平洋側は、後に「宝亀五年より当年に至るまで惣て卅八歳。辺寇はしばしば動じ、聲□絶えることなし」（『日本後紀』弘仁2年閏12月辛丑条）と総括される三八年戦争に突入する。この桃生城襲撃事件について、樋口知志は先に引用した宇屈波宇の言葉から彼らの不満を読みとり、その原因を次のように推測する。すなわち、宇屈波宇らはもともと城柵の周辺で交易に従事していたが、城柵下の移民、坂東諸国や陸奥国中・南部の豪族、黒川以北十郡の豪族らが進出することによって、交易における宇屈波宇らの既

得権益が侵されるなどの事態が生じ、それが城柵の官人によって放置されていたからではないかとしている（樋口2003）。この桃生城襲撃に端を発した戦争状態は、同年律令国家側が遠山村（現在の宮城県登米市登米町付近と推定されている）を襲撃することで南部は鎮圧された（熊谷2003）。しかし、北部については収まらなかったようで、延暦８年（789）に多治比浜成が派遣され（『続日本紀』延暦８年７月丁巳条）、続いて延暦20年には「坂上大宿禰田村麻呂などを遣わして伐ち平しめ給ふに、遠閇伊村を極めて」（『日本後紀』弘仁２年12月甲戌条）とあるように、数度の遠征があったようである。しかし、それでも「ほぼ掃い除きてしかども、山谷に逃げ隠れて、頭を盡くして殄を究むることえずなりにたり」（同上）という状態であったため、弘仁２年（811）に文室綿麻呂により「征討」が行われ、「斬獲やや多く、帰降するもの少なからず」（『日本後紀』弘仁２年10月甲戌条）という戦果をおさめた。これにより閇伊村は爾薩体とともに陸奥国の所管となったようである（熊田2003）。とはいっても、未だ閇伊郡は成立していなかったようで、延久２年（1070）に陸奥守源頼俊が「征討」したのは、応徳３年（1086）正月23日付「前陸奥守源頼俊申文」（『平安遺文』4652）によれば「衣曾別島の荒夷ならびに閇伊七村の山徒」だった。この後いつ成立したのかは不明だが、元弘４年（＝建武元、1334）２月18日付「北畠顕家国宣」（岩手県立博物館編『岩手の古文書』所収）では、陸奥国府が南部又次郎（師行）に対して信濃前司入道（二階堂行珍）の代官を久慈郡に入部させるよう命じているから、少なくとも鎌倉時代末期には久慈郡が成立していたことは間違いない。ただ、藤原基衡が毛越寺の本尊とする仏像の製作の功として「糠部駿馬五十疋」を仏師雲慶に贈っており（『吾妻鏡』文治５年（1189）９月17日条）、この糠部はいうまでもなく糠部郡のことであろうから、基衡が生きたほぼ12世紀前半にはすでに糠部郡が成立していたと考えられる。そして、その南半を占める久慈郡も同時期に成立していた可能性は十分にある。なお、永正五年（1508）馬焼印図（『古今要覧稿』所収）には牧ごとの焼印の印文が載せられているが、「具し」（＝久慈）の部分には「北野」「おさな井」「なつい」とともに「山口」とある。この「山口」は本遺跡に隣接する山口に置かれていた牧のことと考えられており、古代末から中世初頭にかけて、すでに久慈は糠部とならぶ名馬の産地だったようである（入間田1988）。

〈参考・引用文献〉

生出慶司・中川久夫・蟹沢聰史編
　　1989『日本の地質』２　東北地方　共立出版
入間田宣夫1988「久慈・閇伊の駿馬」　中世東国史研究会編『中世東国史の研究』東京大学出版会
熊谷公男　2003「北と南のはざまで」　大石直正・難波信雄編『平泉と奥州道中』街道の日本史５　吉川弘文館
熊田亮介　2003「綿麻呂の『征夷』」『古代国家と東北』吉川弘文館
久慈市教育委員会
　　1990『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書』Ⅰ　久慈市埋蔵文化財調査報告書第12集
　　1991『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書』Ⅱ　久慈市埋蔵文化財調査報告書第13集
　　1992『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書』Ⅲ　久慈市埋蔵文化財調査報告書第14集
　　1993『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書』Ⅳ　久慈市埋蔵文化財調査報告書第15集
　　1994『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書』Ⅴ　久慈市埋蔵文化財調査報告書第17集
　　1995『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書』Ⅵ　久慈市埋蔵文化財調査報告書第19集
　　1996『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書』Ⅶ　久慈市埋蔵文化財調査報告書第20集
久慈市史編纂委員会
　　1984『久慈市史』第１巻通史（自然・原始古代・中世）
照井一明　1982「陸中海岸北部地域の海岸段丘と古流系」『岩手県高等学校教育研究会地理部会誌』
樋口知志　2003「奈良末・平安初期の気仙地方」法政大学国際日本学サテライトシンポジウム『海の蝦夷－小泉遺跡が語りかけるもの－』資料集（『法政大学国際日本学研究所研究報告』第４集に再録）
室賀照子　1976「赤外吸収スペクトルによる琥珀の産地分析」『考古学と自然科学』９
八木光則　1996「蝦夷社会の地域性と自立性」鈴木靖民編『古代蝦夷の世界と交流』古代王権と交流１　名著出版
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
　　1989『源道遺跡発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第138集

Ⅲ　調査の経緯と方法

1　野外調査の経緯

4月14日　現場設営・環境整備。
4月15日　調査開始。
5月10日　B区南側の部分終了確認。
6月15日　A区西側の部分終了確認。調査期間について、委託者及び岩手県教育委員会生涯学習文化課と協議した結果、当初予想より遺構密度が低いため、終了日を前倒しすることとなった。
7月21日　終了確認。空撮実施。
7月22日　現地公開実施。約50名の見学者を得る。
7月30日　調査終了。現場撤収。

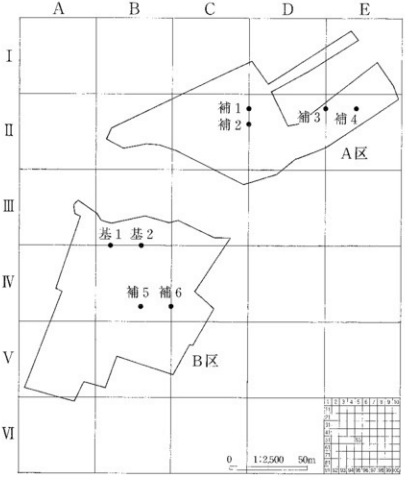
2　野外調査の方法

（1）調査区の設定

本遺跡は中央の低湿地部分を挟んで大きく2つの調査区に分かれる。そこで便宜的に北側の調査区をA区、南側をB区とした。

（2）グリッドの設定

本遺跡の調査座標は、平面直角座標第Ⅹ系のX＝21,350.000、Y＝74,700.000を原点として設定した。



第7図　グリッド配置図

この座標原点を基点とし、遺跡全体を50×50mの大区画に区割りを行った。この大区画は、基点から東方向にA～E、南方向にⅠ～Ⅴとアルファベットとローマ数字の組み合わせでひとつひとつ区別できるようにした。また、大区画を5×5mの小区画に細分している。この小区画には北西角から東に順に1～10まで番号を付し、続けて南東角の100まで固有番号を付けた。

（3）基準点の設定

遺構の実測に利用するため調査区内に合計8点の基準点打設を株式会社藤森測量設計に委託した。各基準点の成果値と杭高は第3表にまとめた。これらはいずれも世界測地系によるものである。

第3表　基準杭・補助杭一覧

点名	X	Y	H	点名	X	Y	H
基準点1	21,200.000	74,780.000	24.267	補助点3	21,290.000	74,900.000	24.000
基準点2	21,200.000	74,760.000	25.224	補助点4	21,290.000	74,920.000	23.815
補助点1	21,290.000	74,850.000	24.750	補助点5	21,160.000	74,780.000	24.814
補助点2	21,280.000	74,850.000	24.558	補助点6	21,160.000	74,800.000	24.126

＊単位はm。

（4）表土除去と遺構の検出

本遺跡では本調査に先立ち、岩手県教育委員会生涯学習文化課による試掘が実施されている。試掘トレンチは調査区全域に綿密にされていたので、表土掘削に先立ってこの試掘トレンチを再度掘り起こし、断面をクリーニングして堆積状況の把握に努めた。その後、古代の遺構検出面である黒色土層まで重機（0.7tのパワーショベル）を使用して表土や盛土を除去した。縄文時代面の検出は一部人力にて行い、古代面が厚く堆積している部分については重機によって行った。

（5）遺構の精査と実測

検出された遺構には随時セクションベルトを設定し、埋土の堆積状況の把握を行いながら掘り下げた。土坑は2分法、竪穴住居跡は4分法で行っている。カマドは、住居とは別にセクションベルトを設定して精査を行っている。また、カマド構造の把握のため袖部の断ち割りをした。平面実測は竪穴住居跡については簡易遣り方測量で行い、土坑・溝跡と掘立柱建物跡については光波トランシットによる測距をもとに実測図を作成した。縮尺は、竪穴住居跡・掘立柱竪物と土坑が1/20、溝跡と一部の柱穴状土坑は1/50あるいは1/100で行った。

（6）写　真　撮　影

35㎜モノクロームとカラースライド各1台、モノクローム6×7㎝版カメラを使用した。撮影にあたって、整理時の混乱を防ぐため撮影内容を記入した撮影カードを対象遺構撮影前に撮影している。

3　室内整理の手順と方法

（1）遺　　物

現場で洗浄した遺物の注記作業から開始し、続いて接合、復元を行った。その過程で本書に掲載するものを抽出し、それらの実測図を作成、トレースした。抽出にあたっては、今回の調査で出土した縄文上器が岩手県内では珍しい早期の資料なので、小破片でもなるべく掲載するようにし、文様など

特徴のあるものを選んだ。古代のものについては実測に堪えるものを抽出している。石器についても同様である。実測後、これらを撮影し、合わせて登録作業を行った。

（2）遺　　構

実測図を点検・合成しながら遺構の検討を行った。その後、第2原図を作成し、そのトレースを行った。また、野外調査で撮影した遺構の写真も整理し、台帳登録をしている。その後、掲載するものを抽出し、トリミングなどを行った後に写真図版とした。

（3）原 稿 執 筆

以上の作業と併行して、図版や写真の割付を行うとともに原稿を執筆した。住居跡の説明では便宜上カマドが構築されている北西壁面を北側とし、北東壁＝東、南西壁＝西、南東壁＝南と称したものもある。

（4）掲　載　図

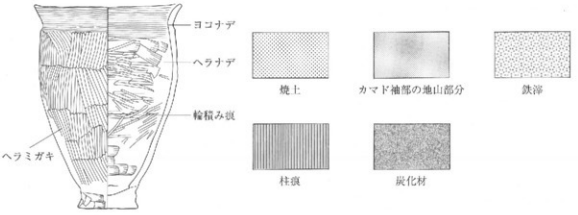
遺構はその主軸に関係なく、北が上になるように掲載した。この場合の北とは座標によるものである。ただ、溝跡は長大なため任意の配置をしている。縮尺は竪穴住居跡・竪穴状遺構・陥し穴状遺構1/50、土坑・焼土を1/40、掘立柱建物跡・柱穴状土坑を1/100とし、溝は長さによって任意の縮尺とした。また、遺物掲載は土器を1/3、剥片石器を1/2、礫石器1/3･1/4、土製品・鉄製品を1/2、陶磁器1/3を基本とした。なお、遺構図の凡例および土器調整の表現方法については第8図のとおりである。

4　外 部 委 託

調査で得られた遺物を客観的に評価するために理化学的な分析を行った。その業務は外部機関に委託している。この結果はいずれも附編として掲載している。

（1）火 山 灰 分 析

株式会社京都フィッション・トラックに依頼した。分析したのは2点ある。ひとつは2号竪穴住居跡の埋土中位から採集したものである。もうひとつは縄文時代の遺構検出面で土砂ごと採集したものである。鑑定にあたっては、より厳密を期すため、①全鉱物組成分析・②重鉱物分析・③火山ガラス形態分類・④火山ガラス屈折率測定・⑤鉱物屈折率測定の5つの観点から分析を行った。



第8図　スクリーントーン・実測図凡例

（2）炭素14年代測定

株式会社加速器分析研究所に依頼した。分析をしたのは2点でいずれも2号竪穴住居跡に属するものである。1点は床面から採集した炭化材で、1点はカマド燃焼部から出土した土師器甕の体部外面に付着していた炭化物である。後者は、土器を現場で水による洗浄を行い、日陰で乾燥させた後、外面に付着していた炭化物を脱脂綿でこすって削ぎ落として採取したものである。

Ⅳ　検出した遺構と出土した遺物

1　検出した遺構

今回の調査で検出した遺構は竪穴住居跡3棟、竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡1軒、焼土遺構1基、陥し穴状遺構5基、土坑19基、柱穴列を含む柱穴状土坑が77基である。時期は竪穴住居跡が古代、陥し穴状遺構が縄文時代、竪穴状遺構・掘立柱建物跡・焼土遺構・柱穴状土坑が中世～近世に属し、土坑についてはA区で検出されたものは近世、B区のものは縄文時代に大別できる。また、前章で述べたように、本遺跡は低湿地を挟んで大きく2つの区域に分け、北側をA区、南側をB区としているが、上記の遺構のほとんどはB区に位置する。特にA区では竪穴住居跡が1棟も検出されなかった。A区とB区とではそれほど標高差はなく、A区西半で一程度削平の痕跡が確認されたものの、遺構検出面の状況はB区と変わらなかった。このことから、A区は後世の削平によって遺構が失われたわけではなく、もともと遺構密度が低かったものと推測され、遺跡の縁辺部に相当すると考えられる。

（1）竪穴住居跡

すべてB区で検出された。いずれも主軸は北西方向を向き、カマドは北西壁面中央に設けられている。カマドの袖部は地山の削り出しで、これに大型の礫を芯材として置き、さらに褐色～暗褐色土で覆ってカマドが構築されている。柱穴は4基配置され、東－西・南－北間の柱穴間距離はそれぞれほぼ同じ値を測る。住居内土坑は3号竪穴住居に1基みられ、東側に位置する柱穴の南東側に設けられている。

1号竪穴住居跡

遺構（第9・10図、写真図版4・5）

＜位置・重複関係＞B区ⅤB26・27グリッドに跨って位置する。南東壁面は撹乱を受けているため、残存状況が悪い。重複する遺構はない。

＜規模・平面形・方向＞東西5.20m、南北5.56mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。主軸方向はN－33°－Wである。

＜埋土＞自然堆積で8層に分けられる。堆積状況から8層の貼り床土以外は自然に埋没したものと考えられる。

＜壁＞壁は外傾して立ちあがり、壁面残存値は東壁6cm、西壁14cm、北壁22cm、南壁2cmである。カマド部分と南壁以外の壁沿いに周溝が巡る。

＜床面＞ほぼ平坦である。貼り床は床面全面にみられ、径2～3cmほどの礫を多量含む黒色土で施されている。厚さは2～14cmである。床面には幅6～12cm、深さ4～8cmほどの溝が南壁とカマド周辺以外に設けられている。

＜焼土＞Ｐ２の南東側で約62×52cmの範囲に明褐色の焼土粒の広がりを確認した。検出状況から二次堆積と考えられる。
＜土坑＞Ｐ１の１基を北東隅付近の床面で検出した。平面形は0.52×0.45ｍの楕円形を呈し、深さは26cmである。土坑内からは遺物は出土していない。
＜柱穴＞Ｐ２～Ｐ５の４基が検出された。柱穴の配置は住居の主軸に対称で、柱穴間の距離はＰ２－Ｐ３間が2.65m、Ｐ３－Ｐ４間が2.42m、Ｐ４－Ｐ５間が2.66m、Ｐ４－Ｐ１間が2.48mとなっている。柱痕は径10～20cmと細い材を使用している。
＜カマド＞北西壁の中央に構築されている。カマドの袖は地山を削り出した後、暗褐色土を貼り付ける形で構築されていたようである。Ｓ１は角柱状の形状を呈し、燃焼部のやや左袖部に近い位置で、床面に刺さった状態で出土した。支脚として使用されていたと考えられる。Ｓ１の石質は北上山地産中生代のホルンフェルスとの鑑定結果を得ている。燃焼部は径２～３mmのにぶい黄橙色焼土粒を微量含んだ黒褐色土が径0.52×0.32ｍの範囲で厚さ約５cmほど堆積している。煙道部は掘り込み式の構造で燃焼部より約0.84ｍほどである。燃焼部から約11°の傾斜で上がり、煙出し部へと延びる。
遺物（第25図、写真図版19）
遺物は甕が３点、甑１点、土製紡錘車２点、鉄製品３点、砥石１点が出土している。１～３はカマドからの出土した甕で器面調整は口縁部内外ヨコナデ、胴部内外はナデが施される。４は北東隅の壁面付近で一括出土した甑で、器形は甕と似るが無底である。器面調整は口縁部外面にナデ、口縁部内面および、胴部内外面にミガキが施される。土製紡錘車（５・６）はＰ３埋土上位と床面からの出土でミガキ調整が施されている。７の砥石はＰ５のやや北西部からの出土で床面から出土した。鉄製品は鏃（９）以外は用途不明でカマド崩落土（８）、床面から出土した（粉砕状態により不掲載）。他ではカマドおよび焼土を篩にかけ微細遺物の検出を試み、種不明の骨片１点を得た。他に北東壁と焼土付近を中心に炭化物が多く出土した。
時期　出土した遺物から６世紀後半頃の遺構と考えられる。（溜）

２号竪穴住居跡
遺構（第11・12図、写真図版６・７）
＜位置・重複関係＞Ｂ区Ⅳ B59・69グリッドに跨って位置する。重複している遺構はない。
＜規模・平面形・方向＞東西6.50ｍ、南北6.30ｍを測り、平面形は隅丸方形を呈する。主軸方向はＮ－48°－Ｗである。
＜埋土＞13層に分けられ、堆積状況から貼り床土以外は自然堆積と考えられる。埋土１層より検出した浅黄橙色土は白頭山苫小牧テフラが少量混入した十和田ａテフラであるとの鑑定結果を得た。
＜壁＞壁は外傾して立ちあがり、壁面残存値は東壁11cm、西壁21cm、北壁26cm、南壁18cmである。
＜床面＞ほぼ平坦である。貼床は黒褐色土と褐色土の混合土で床面全面に施されている。厚さは２～10cmである。床面には幅８～16cm、深さ３～７cmほどの溝がカマドを除く壁面沿いに巡る。
＜土坑＞Ｐ１を南壁面付近の床面で検出した。平面形は径約0.60ｍの楕円形を呈し、深さは16cmである。土坑内からは遺物は出土していない。
＜柱穴＞Ｐ２～Ｐ５の４基が検出された。柱穴は住居の主軸にほぼ対象で、方形状に配置されている。柱穴間の距離はＰ２－Ｐ３間が2.78m、Ｐ３－Ｐ４間が2.50m、Ｐ４－Ｐ５間が2.92m、Ｐ４－Ｐ１間が2.62mとなっている。
＜カマド＞北西壁の中央に構築されている。カマドの袖は地山を削り出した後、黒色土・黒褐色土で

覆う形で構築されていたようである。その際袖部～天井部にかけては礫を組んでいたと考えられる。燃焼部には暗赤褐色焼土が径0.45×0.30mの範囲に厚さ約３cmほど堆積している。煙道部は掘り込み式の構造で燃焼部より約0.97mほどである。燃焼部から約13°の傾斜で上がり、連出し部へと延びる。
＜焼土＞南壁面中央部付近で検出し、約0.40×0.25mの範囲で明褐色焼土粒を含む黒色土の広がりを確認した。焼土の周辺からは甕や大きさ約12～22cmほどの礫が多く出土していることから、何らかの用途に使用した施設と考えられる。

遺物（第26図、写真図版19・20）

出土遺物の内訳は甕３点、坏１点、鉄製品１点、礫石器２点である。甕はカマド燃焼部や焼土の脇、などから出土している。甕（11～13）の器面調整は口縁部にヨコナデ、胴部にナデ、ミガキが施される。10はカマド右袖部脇から出土した丸底をした坏で器体の内外面に段がある。器面調整は外面の段上がミガキ、下がケズリ、内面はミガキおよび黒色処理が施されている。カマド左袖部付近からは刀子、他にＰ３～北東壁面間で炭化材を検出したが、溶けたような状態であった。

時期　出土した遺物から６世紀後半頃の遺構と考えられる。（溜）

３号竪穴住居跡

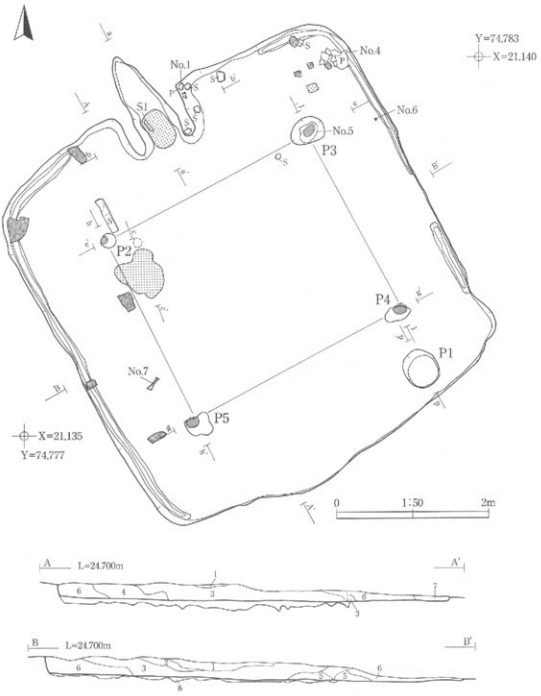
遺構（第13図、写真図版８・９）

＜位置・重複関係＞Ｂ区ⅣＢ39・40グリッドに跨って位置する。Ⅲ層上位で検出したが、その時点では特に南西部分が攪乱されており、その部分を除去してはじめて住居の全形を把握することができた。重複する遺構はない。
＜規模・平面形・方向＞東西4.75mを測り、南北は上記の攪乱のため不明だが4.0mが残存する。平面形は隅丸方形と推定される。軸方向はＮ－57°－Ｗである。
＜埋土＞４つの層に分けられ、堆積状況から自然に埋没したものと考えられる。
＜壁＞外傾して立ちあがり、東壁で５～７cm、西壁で８～10cm、北壁で４～11cmが残存している。周溝は構築されていない。
＜床面＞ほぼ平坦である。貼床は東側にだけみられ、やや多量の褐色土と少量の暗褐色土・黄褐色土を含む黒褐色土によって施されている。厚さは４～18cmである。
＜土坑＞Ｐ１の１基が検出された。床面に達した時点で確認している。カマドと正反対の東壁際に掘り込まれ、平面形は0.9×1.05mの楕円形を呈し、深さは26cmである。
＜柱穴＞４基が検出された。全形が不明なため、住居における位置は不明であるが、ほぼ対角線上にのっていると推測される。各柱穴の規模はＰ２は0.2×0.25m、深さ37cm。Ｐ３は0.25×0.3m、深さ49cm。Ｐ４は0.3×0.35m、深さ40cm。Ｐ５は0.2×0.35m、深さ34cmである。これらの柱穴の深さはまちまちで、底面の標高も23.4m、23.5、23.6mと同様である。柱穴間の距離は、Ｐ２－Ｐ３間が2.3m、Ｐ３－Ｐ４間が2.0m、Ｐ４－Ｐ５間が2.3m、Ｐ５－Ｐ２間が2.0mとなっている。
＜カマド＞北西壁に構築されている。Ｐ２・Ｐ３とカマドとを結んだ線が二等辺三角形になることから、カマドは北西壁の中央に構築されていたものと推測される。カマドの袖は地山を削り出した後、暗褐色土を貼り付ける形で構築されていたようである。Ｓ１・２は芯材、Ｓ３は天井部の芯材として利用されたものと推測される。なお、芯材１と３を鑑定に依頼し、いずれも北上山地産の凝灰岩とひん岩との結果を得ている。燃焼部は0.3×0.4mを測り、厚さ約10cmの焼土が堆積している。煙道は掘り込み式で、壁外に長く延びず、燃焼部より0.3mほどである。ただし、住居の上面が削平されていることを考慮すれば、もう少し延びていた可能性が考えられる。

遺物（第26図、写真図版２）

紡錘車１点（17）と琥珀の小塊がＰ１から出土した。紡錘車は破損品で1/2が残存しており、１号竪穴住居跡出土のものと同じ形態をしている。琥珀は幅約1.3×1.1㎝、厚さ0.7㎝の大きさで、加工された痕跡はみられない。

時期　特定できる遺物の出土がないため不明であるが、１・２号竪穴住居跡と同じような形態・構造をしていることから６世紀後半のものと推測される。（石崎）

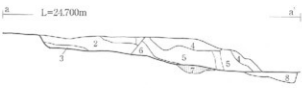


第9図　1号竪穴住居跡（1）

1号竪穴住居跡

A－A′、B－B′

1．10YR1.7/1　黒色土　粘性あり　しまりあり　黒色土（10YR2/1）5％含む。
2．10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりあり
3．10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりあり　黒褐色土（10YR3/1）2～3％、浅黄色火山灰（2.5Y7/4）ブロックで含む。
4．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりあり　明黄褐色土粒（10YR6/6）径2～3㎜の格状で微量含む。
5．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりあり
6．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりあり　5層より混色で、層中に　径3～5㎜の縞紋多く含む。
7．10YR3/1　黒褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　黒色土（10YR2/1）5％含む。径5～10㎜の縞紋多く含む。
8．10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりあり　径2～3㎜の縞多量含む。



a－a′

1．10YR3/1　黒褐色土　粘性なし　しまりなし　径2～10㎜の縞多く含む。
2．10YR3/1　黒褐色土　粘性なし　しまりなし　にぶい黄褐色土（10YR5/4）微量含む。
3．10YR3/3　暗褐色土　粘性なし　しまりあり　径2～3㎜の縞多量含む。
4．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりなし
5．10YR3/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　径5㎜の炭化物、橙色焼土粒（7.5YR6/6）微量含む。
6．10YR3/3　黒褐色土　粘性なし　しまりあり
7．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　にぶい黄橙色焼土粒（10YR7/4）径2～3㎜の縞状で1～2％含む。
8．10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりあり　明褐色土粒（10YR7/6）1～2％含む（住居貼り床）

b－b′

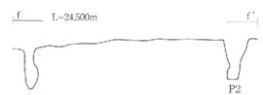
1．10YR4/1　褐灰色土　粘性なし　しまりなし　明黄褐色土粒（10YR7/6径2～3㎜）微量含む。
2．10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりなし
3．10YR3/1　黒色土　粘性なし　しまりなし　2層より濃色で径5～8㎜の縞多く含む。
4．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりなし　径2～5㎜の縞少量含む。
5．10YR2/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまりなし　明褐色土粒（7.5YR5/6径3㎜）少量含む。
6．10YR2/1　黒色土　70％、2.5Y4/3　オリーブ褐色土　30％の混合土層。カマド廃棄土の可能性大。
7．10YR3/1　黒色土　粘性ややあり　しまりなし
8．10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりあり　にぶい黄褐色土（10YR5/4）5％含む。
9．10YR3/1　黒褐色土　粘性なし　しまりあり
10．10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　炭化物片微量含む。
11．10YR7/6　明黄褐色土　粘性なし　しまりあり　径1～3㎝の縞多量含む。（遺構）
12．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　にぶい黄橙色焼土粒（10YR7/4径2～3㎜）1～2％含む。

c－c′

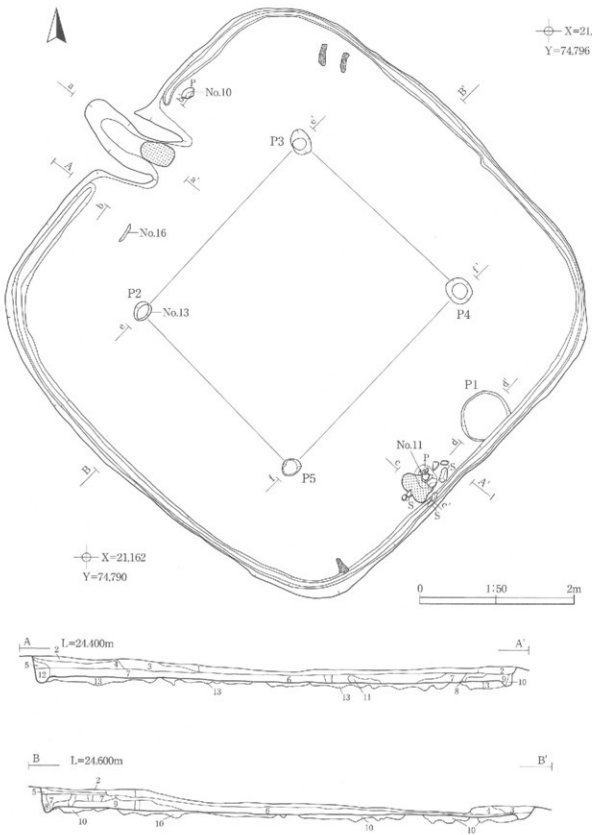
1．10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりなし　橙色透土（10YR6/6）1～2％含む。径3～7㎜の炭化物粒微量含む。住居貼床土。
2．7.5YR5/6　明褐色透土　炭化物粒微量含む。住居貼床土。
3．10YR2/3　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　明褐色透土（7.5YR5/6）10～20％含む。
4．10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりあり　明褐色焼土（7.5YR5/6径1～2㎜）微量含む。

d－d′

1．10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　にぶい黄褐色土（10YR4/3）10％含む。住居跡床土。
2．10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり
3．10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　明黄褐色土（10YR6/6）2％含む。
4．10YR2/1　黒色土　50％、10YR7/6　明黄褐色土　50％の混合土層。粘性なし　しまりあり
5．10YR3/2　黒褐色土　50％、10YR6/6　明黄褐色土　50％の混合土層。粘性なし　しまりあり



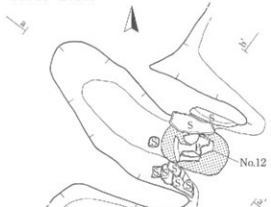
第10図　1号竪穴住居跡（2）



第11図　2号竪穴住居跡（1）

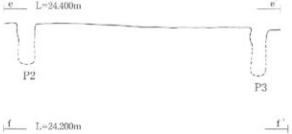
A–A′
1. 10YR1.7/1　黒色土　粘性ややあり　しまりなし　明黄褐色土（10YR7/6）2％ブロックで混入。
2. 10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりややあり　黄褐色土（10YR5/6）10%混合。
3. 10YR1.7/1　黒色土　粘性ややあり　しまりなし
4. 10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりややあり　黄褐色土（10YR5/6）30%混合。
5. 10YR1.7/1　黒色土　粘性ややあり　しまりなし　にぶい黄褐色土（10YR5/3）4％含む。
6. 10YR1.7/1　黒色土　粘性あり　しまりややあり　明黄褐色土（10YR6/6）1％含む。
7. 10YR3/2　黒褐色土　粘性あり　しまりあり　明黄褐色土（10YR6/6）10%含む。
8. 10YR1.7/1　黒色土　粘性ややあり　しまりややあり
9. 10YR2/1～10YR3/1　黒色～黒褐色土　粘性なし　しまりややあり　明黄褐色土粒（10YR7/6　径2㎜）縞状含む。
10. 10YR3/2　黒褐色土　60%、10YR7/6　40%の混合土層。粘性あり　しまりやあり
11. 7.5YR5/6　明褐色粘土　粘性なし　しまりややあり
12. 10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりあり
13. 10YR3/2　黒褐色土　70%、10YR4/4　30%の混合土層。粘性なし　しまりあり　詰り床土。

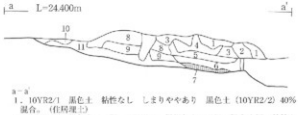
B–B′
1. 10YR1.7/1　黒色土　粘性ややあり　しまりなし　明黄褐色土（10YR7/6）2％ブロックで混入。
2. 10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりややあり　黄褐色土（10YR5/6）10%混合。
3. 10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりややあり　明褐色土（7.5YR5/6）ブロックで2％含む。
4. 10YR2/3　黒褐色土　粘性なし　しまりあり
5. 10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりなし　明黄褐色土（10YR5/6）30%含む。
6. 10YR1.7/1　黒色土　粘性あり　しまりややあり　黄褐色土（10YR5/6）1％含む。
7. 10YR3/2　黒褐色土　粘性あり　しまりあり　明黄褐色土（10YR6/6）10%含む。
8. 10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりなし　明黄褐色土（10YR6/6）1％未満含む。
9. 10YR3/1　黒褐色土　粘性あり　しまりあり　明黄褐色土（10YR6/6）ブロック状で3％含む。
10. 10YR3/2　黒褐色土　70%、10YR4/4　褐色土　30%の混合土層。粘性なし　しまりあり　詰り床土。



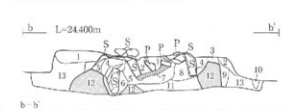
c–c′
1. 10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりなし　明褐色土（7.5YR5/6）10%混入。

d–d′
1. 10YR2/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまりあり
2. 10YR2/1　明黄褐色土（10YR7/6）20%含む。
3. 10YR5/4　にぶい黄褐色土　粘性あり　しまりあり
4. 10YR2/1　黒色土　50%、10YR7/6　明黄褐色土　50%の混合土層。粘性あり　しまりなし





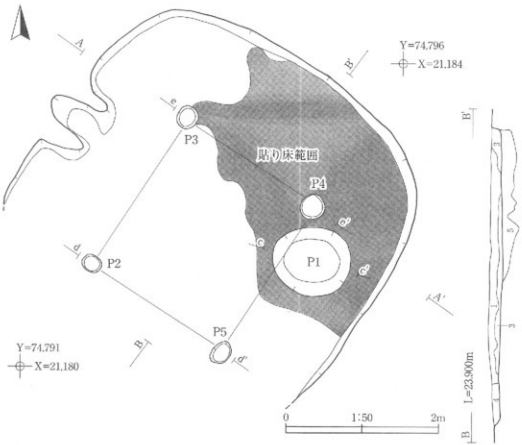
a–a′
1. 10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりややあり　黒色土（10YR2/2）40%混合。（住居埋土）
2. 10YR2/1　黒色土　50%、10YR2/2　黒褐色土　50%の混合土層。粘性ややあり　しまりややあり
3. 10YR2/2　粘性なし　しまりなし　明黄褐色土粒（10YR6/6）縞降り状に20%含む。
4. 10YR4/4　明褐色焼土粒　粘性なし　しまりあり　カマド構成土の（天井部？）崩落土。明褐色焼土粒（7.5YR5/6　径2～3㎜）縞状含む。
5. 10YR3/3　暗褐色土　粘性なし　しまりややあり　明褐色焼土粒（7.5YR5/6　径2㎜）3～5％含む。黒色土（10YR2/1）2％含む。
6. 10YR1/4　褐色土　粘性なし　しまりあり　明褐色焼土粒（7.5YR5/6　径2～3㎜）微量含む。
7. 5YR3/4　暗赤褐色焼土　粘性なし　しまりあり　燃焼面。
8. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし　しまりあり
9. 10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり
10. 10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりなし　にぶい黄褐色土（10YR6/3）5％含む。
11. 10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりなし



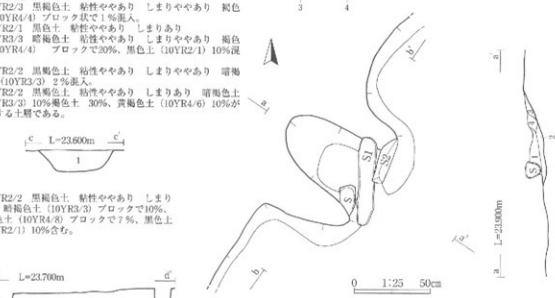
b–b′
1. 10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりややあり　黒色土（10YR2/2）40%混合。（住居埋土）
2. 10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりなし　明黄褐色土粒（10YR6/6）縞降り状に20%含む。
3. 10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりあり　にぶい黄褐色土（10YR6/3）5％含む。
4. 10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりややあり　黄褐色土粒（10YR5/6　径2～3㎜）微量含む。
5. 10YR3/3　暗褐色土　50%、10YR5/6　黄褐色土　50%の混合土層。粘性なし　しまりあり
6. 10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりなし
7. 10YR5/3　にぶい黄褐色土　粘性ややあり　しまりあり　明褐色焼土（7.5YR5/6）ブロックで多量含む。
8. 10YR4/1　褐灰色土　粘性なし　しまりあり　黒色土（10YR2/1）ブロック状で10%含む。
9. 10YR2/1　黒色土　50%、10YR4/4　褐色土　50%の混合土層。粘性なし　しまりなし　礫凡土。
10. 10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりあり
11. 10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　黄褐色土（10YR5/6）3％含む。
12. 10YR3/6　黄褐色土　粘性なし　しまりあり　地山土。
13. 10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　黄褐色土（10YR5/6）3％含む。

0　1:50　2m

第12図　2号竪穴住居跡（2）



A－A'、B－B'
1．10YR2/3　黒褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　褐色土（10YR4/4）ブロック状で1％混入。
2．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりあり
3．10YR3/3　暗褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　褐色土（10YR4/4）　ブロックで20%、黒色土（10YR2/1）10%混入。
4．10YR2/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　暗褐色土（10YR3/3）2％混入。
5．10YR2/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまりあり　暗褐色土（10YR3/3）10%褐色土　30%、黄褐色土（10YR4/6）10%が混合する土層である。



c－c'
1．10YR2/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまりあり　暗褐色土（10YR3/3）ブロックで10%、黄褐色土（10YR4/8）ブロックで7％、黒色土（10YR2/1）10%含む。

a－a'、b－b'
1．10YR2/3　黒褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　明黄褐色土（10YR6/6）20%混入。
2．10YR4/4　赤褐色焼土　粘性なし　しまりなし
3．10YR2/3　褐色土　粘性ややあり　しまりあり
4．10YR6/6　明黄褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　黒褐色土（10YR2/2）5％、暗褐色土（10YR3/3）5％混入。カマド構築土。
5．10YR4/4　褐色土　粘性ややあり　しまりあり　地山土。掘り出しの補修。

第13図　3号竪穴住居跡

（2）竪穴状遺構

1号竪穴状遺構

遺構（第14図、写真図版10）

＜位置・重複関係＞B区ⅢA80グリッドに位置する。表土下第Ⅲ層で検出した。19号土坑と重複し、これを切る。

＜規模・平面形＞北壁と東壁が調査区外であるため、全体の規模は不明であるが、形状は隅丸方形状を呈するものと推測される。

＜埋土＞自然堆積で黒色～黒褐色土の3層に分けられる。

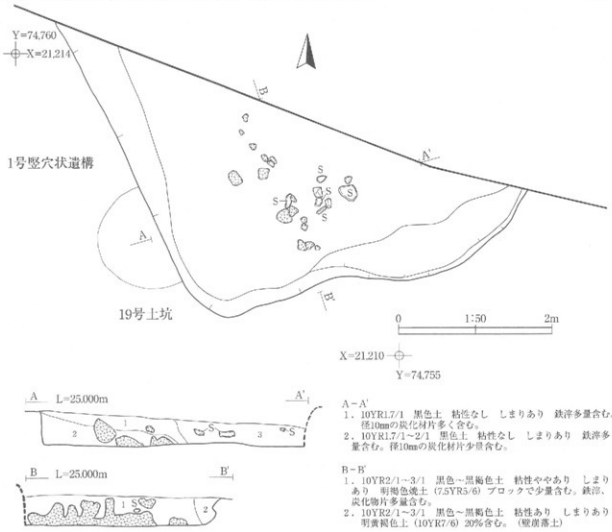
＜壁＞外傾して立ちあがるが、南壁東側は緩い立ち上がりとなっている。壁面残存値は西壁44cm、南壁36cmである。

＜床面＞床面まで掘り下げたが、堰からしみ出てくる湧水の影響で、しまり具合や貼り床の有無などは確認できなかった。

遺物（写真図版20）

埋土1層から瀬戸・美濃産陶器皿の破片が1点（18）出土した。また埋土中位～下位より大コンテナ10箱分の鉄滓が出土した。

時期　出土遺物・遺構の検出状況から中世後半と推測される。（溜）



第14図　1号竪穴状遺構

（3）掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第15図、写真図版11）

＜位置・重複関係＞A区東側ⅠE85・86・94～96、ⅡE4・5グリッドに位置する。

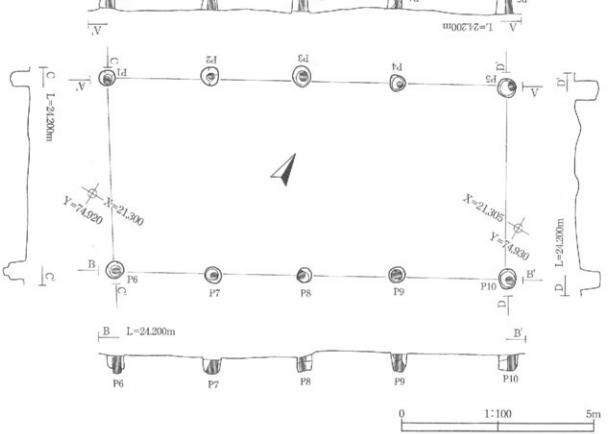
＜規模・平面形式・方向＞規模桁行4間・梁間1間の掘立柱建物跡である。梁間の軸方向は、N－32°－Wである。なお2号および4号柱穴列を梁間として、桁行6間・梁間2間に復元する案もあるが、これらの柱穴は検出状況から1号掘立柱建物跡との関係が不明瞭であったため、別の遺構として扱った。ただし、この2つの柱穴列は廂となる可能性がある（第22図参照）。桁行は10.3m、梁間は5.0m、面積は51.5㎡（約15.6坪）である。

＜柱間寸法＞柱間寸法は、桁行が250cm（7.5尺）と280cm（8.5尺）で、梁間が500cm（15尺）である。梁間の15尺は7.5尺の倍数であり、桁行の8.5尺を7.5尺を1尺分広げたと考えれば、本建物の基準寸法は7.5尺となる。

時期　遺物の出土はなく、時期の比定は不能である。近世の可能性が高いものの、すぐ近くに久慈城があり中世まで遡ることも考えられる。（石崎）

第4表　柱穴観察表

NO	径	深さ	柱痕径	埋土	NO	径	深さ	柱痕径	埋土
1	42×40	43	17	にぶい黄橙色1:90%、黒褐色土10%の混合土層。柱痕は黒色土ににぶい黄橙色が3%混入。	6	48×36	46	20	黒～黒褐色土90%、明黄褐色土10%の混合土層。柱痕は黒色土に明黄褐色土が2～3%混入。
2	49×48	50	18	黒色土50%、にぶい黄橙色土50%の混合土層。柱痕は黒色土ににぶい黄橙色土が1～2%混入。	7	46×40	38	22	黒～黒褐色土90%、明黄褐色土10%の混合土層。柱痕は黒色土に明黄褐色土が2～3%混入。
3	54×43	52	16	黒色土50%、にぶい黄橙色土50%の混合土層。柱痕は黒色土ににぶい黄橙色が1～2%混入。	8	40×36	38	17	黒色土主体ににぶい黄橙色ブロックで土層に混入。柱痕は黒色土50%、黒褐色土50%の混合土層。
4	42×38	38	22	黒色土60%、明黄褐色土40%の混合土層。柱痕は黒色土に明黄褐色土が1%混入。	9	44×38	46	22	黒色土、柱痕は黒色土ににぶい黄橙色土粒が1～2%混入。
5	48×46	42	17	黒色土60%、明黄褐色土40%の混合土層。柱痕は黒色土に明黄褐色土が1%混入。	10	52×44	44	20	上位は黒色土、下位はにぶい黄橙色土主体。柱痕は黒色土ににぶい黄橙色土が10%混入。



第15図　1号掘立柱建物跡

（4）焼　土　遺　構

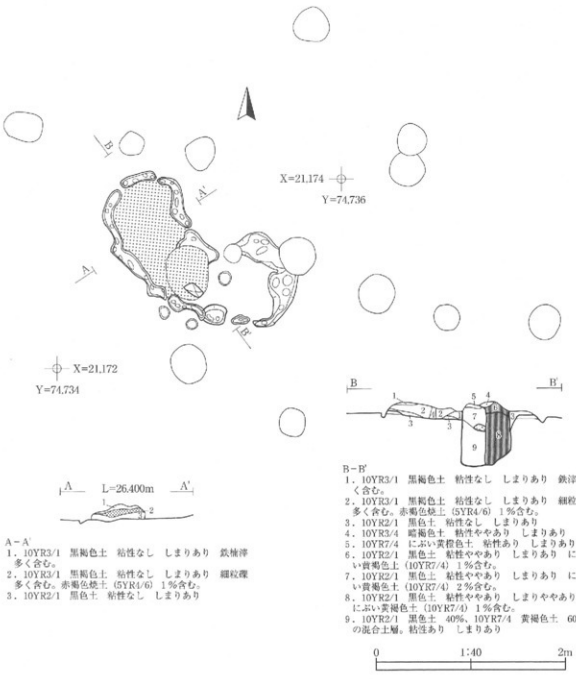
鉄滓を伴う焼土で、鉄滓は焼土～柱穴群周辺から散布して出土するためこれら柱穴群と関連した施設の一部である可能性が考えられる。鉄滓は他に竪穴状遺構からも出土しており、鍛冶関連遺構が存在したと考えられる。

1号焼土

遺構（第16図、写真図版９）

＜位置・検出＞Ｂ区ⅣＡ57・58グリッドに跨って位置する。表土下第Ⅲ層で検出した。鉄滓を含む焼土堆積層の下面から柱穴が検出された。

＜規模・平面形＞焼土分布範囲は約136×60㎝であるが、これを囲むように幅６～35㎝の溝が約220×



第16図　1号焼土

80cmの範囲に巡る。溝の底面には小穴が多くある。
＜埋土＞1層は黒褐色土で鉄滓を多く含む。2層も黒褐色土で層中に赤褐色焼土粒1％他、細粒礫を多量含む。
遺物　19は1層～2層から出土した16世紀の瀬戸・美濃産陶器皿の破片である。遺構とその周辺からは土嚢袋で約1袋ほどの鉄滓が出土した。他に周辺の柱穴からも陶器片が出土している。
時期　出土遺物・遺構を検出した面から中世後半に属すると考えられる。　（溜）

（5）陥し穴状遺構

B区で5基が検出された。重複している遺構はなく、3号と5号が並んでいる以外は単独で位置している。長軸方向は特に傾斜に沿っているというわけではないようである。遺物の出土はなく、逆茂木などの痕跡は5号以外では確認されなかった。平面形は5号が円形である以外は細長い溝状を呈している。なお、5号陥し穴状遺構は、当初、土坑として精査したが、完掘した時点で底面に逆茂木が据えられたと考えられる小ピットが検出されたため、名称を変更して5号陥し穴状遺構とした。

1号陥し穴状遺構（第17図、写真図版12）
＜位置・検出＞B区ⅤB16グリッドに位置し、第Ⅳ層で検出した。
＜平面形・規模＞平面形は細長く溝状を呈しており、長軸方向はN－75°－Eである。規模は、開口部で長さ2.3m・幅0.45m、底面で長さ2.3m・幅0.1～0.2mを測る。深さは0.7mで、横の断面形はV字状である。
＜埋土＞埋土は5層からなり、最上層の1層には十和田南部テフラが極少量含まれていた。堆積状況から見て、自然に埋没したものと推測される。
時期　検出された面から縄文時代に属すると考えられる。　（石崎）

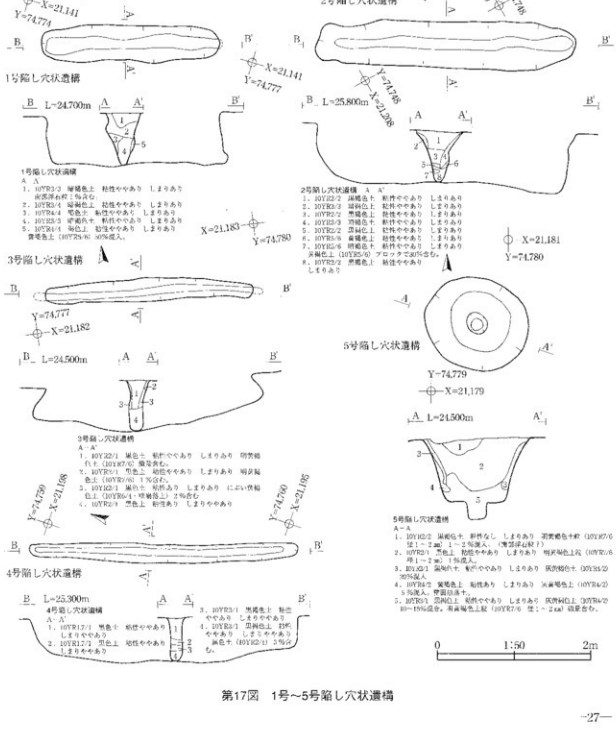
2号陥し穴状遺構（第17図、写真図版12）
＜位置・検出＞B区ⅢA90グリッドに位置し、第Ⅳ層で検出した。
＜平面形・規模＞平面形は細長く溝状を呈し、長軸方向はN－30°－Eである。規模は、開口部で長さ3.4m・幅0.6m、底面で長さ3.1m・幅0.15mを測る。深さは0.7mで、横の断面形はV字状である。
＜埋土＞埋土は8層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　検出された面から縄文時代に属すると考えられる。　（石崎）

3号陥し穴状遺構（第17図、写真図版12）
＜位置・検出＞B区ⅣB36グリッドに位置し、第Ⅳ層で検出した。
＜平面形・規模＞平面形は細長く溝状を呈し、長軸方向はN－80°－Wである。規模は、開口部で長さ2.3m・幅0.3m、底面で長さ3.0m・幅0.1mを測る。深さは0.65mで、横の断面形はU字状である。
＜埋土＞埋土は4層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　検出された面から縄文時代に属すると考えられる。　（石崎）

4号陥し穴状遺構（第17図、写真図版12）
＜位置・検出＞B区ⅣB02グリッドに位置し、第Ⅳ層で検出した。
＜平面形・規模＞平面形は細長く溝状を呈し、長軸方向はN－15°－Wである。規模は、開口部で長さ3.50m・幅0.25m、底面で長さ3.25m・幅0.1mを測る。深さは0.55mで、横の断面形はU字状である。

＜埋土＞埋土は４層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　検出された面から縄文時代に属すると考えられる。　（石崎）

５号陥し穴状遺構（第17図、写真図版13）
＜位置・検出＞Ｂ区Ⅳ B36グリッドに位置し、第Ⅳ層で検出した。
＜平面形・規模＞平面形は円形を呈しており、開口部で直径1.35m、底面で0.8mを測る。深さは0.9mで、断面形はやや開いたＵ字状である。底面で上端が0.4×0.25m、下端が直径0.15mの小ピットが検出された。逆茂木を据えた痕跡と考えられるが、断面観察のために設定したベルトではその痕跡が



第17図　1号～5号陥し穴状遺構

確認されなかったため、引き抜かれた後に埋没したものと考えられる。
＜埋土＞堤土は５層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　検出された面から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

（６）土　　坑

A区で６基、B区で13基が検出された。19号土坑が１号竪穴状遺構に切られている以外は他の遺構と重複しているものはない。平面形は円形ないし楕円形である。６号と７号、９号と10号とが並ぶ以外は単独で位置する。２号土坑以外は出土遺物がなく詳細な時期は不明である。

１号土坑（第18図、写真図版13）
＜位置・検出＞B区Ⅲ B82グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は円形で、規模は、開口部で直径1.5m、底面で0.6×0.9m、深さは0.55mを測る。
＜埋土＞埋土は５層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

２号土坑（第19図、写真図版13）
＜位置・検出＞B区Ⅳ B88グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は円形で、規模は、開口部で直径1.4m、底面で0.85m、深さは0.5mを測る。
＜埋土＞一部攪乱が見られるが、埋土は２層からなる。埋土の大部分が１層であり、一挙に土砂が堆積したようである。ただ、それが自然に埋没したのか人為的に埋め戻されたのかについては判断できなかった。
遺物　埋土中位～下位から縄文時代早期の深鉢胴部破片が数点出土している。いずれも小片で器面にはミガキが施されている。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代早期に属すると考えられる。（石崎）

３号土坑（第19図、写真図版13）
＜位置・検出＞A区ⅠD60グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形はほぼ円形を呈するが、南西部分に凹んでいる部分が見られる。規模は、開口部が直径1.15m、底面が直径0.65m、深さは0.6mを測る。
＜埋土＞埋土は４層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　出土した遺物から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

４号土坑（第19図、写真図版14）
＜位置・検出＞A区ⅠD83グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形で、規模は、開口部で1.2×1.75m、底面で0.55×1.2mを測る。深さは0.4mで、壁は緩やかに外傾している。
＜埋土＞一部攪乱が見られるが、埋土は２層からなる。埋土の大部分が１層であり、一挙に土砂が堆積したようである。ただ、それが自然に埋没したのか人為的に埋め戻されたのかについては判断できなかった。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

5号土坑（第19図、写真図版14）
＜位置・検出＞A区ⅡC27グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形で、規模は、開口部で1.05×1.3m、底面で0.55×0.7m、深さは0.55mを測る。
＜埋土＞埋土は5層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

6号土坑（第19図、写真図版14）
＜位置・検出＞B区ⅢB95グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形で、規模は、開口部で1.55×1.1m、底面で1.65×1.1mを測る。深さは0.4mで、断面はフラスコ状を呈する。ただし、壁面全体がオーバーハングしているわけではなく、北壁と西壁だけである。
＜埋土＞埋土は3層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

7号土坑（第20図、真図版14）
＜位置・検出＞B区ⅢB96グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形で、規模は、開口部で1.55×1.8m、底面で0.7×0.5mを測る。深さは0.7mで、すり鉢状を呈している。
＜埋土＞埋土は5層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

8号土坑（第20図、写真図版15）
＜位置・検出＞B区ⅣC51グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は円形で、規模は、開口部で直径1.4m、底面で0.8m、深さは0.45mを測る。
＜埋土＞埋土は5層からなり、1層がイレギュラーな堆積状況を示しているが、他の4つの層はほぼレンズ状に堆積しており、自然に埋没したものと推測される。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

9号土坑（第19図、写真図版15）
＜位置・検出＞B区ⅢB94グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は円形であるが、一部ゆがんでいる。規模は、開口部で1.4m、底面で1.1m、深さは0.2mを測る。底面は平らではなく、波打っている。
＜埋土＞埋土は単層で一部攪乱が見られる。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

10号土坑（第20図、写真図版15）
＜位置・検出＞B区ⅢB94グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形で、規模は、開口部で1.1×0.85m、底面で0.65×0.55、深さは0.2mを測る。

＜埋土＞埋土は4層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

11号土坑（第20図、写真図版15）
＜位置・検出＞B区Ⅲ B71グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は円形で、規模は、開口部で直径1.2m、底面で0.6m、深さは0.4mを測る。
＜埋土＞埋土は4層からなる。1層がイレギュラーな堆積状況を示すが、攪乱である可能性もあり、それ以外はほぼレンズ状に堆積していることから、自然に埋没したものと推測される。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

12号土坑（第20図、写真図版16）
＜位置・検出＞B区Ⅳ B 8 グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は円形で、規模は、開口部で直径1.1m、底面で0.55m、深さ0.55mを測る。
＜埋土＞埋土は3層からなる。1層は攪乱を多く受けているが、全体の堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

13号土坑（第20図、写真図版16）
＜位置・検出＞B区Ⅳ C51グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は円形で、規模は、開口部で直径1.3m、底面で0.75m、深さ0.8mを測る。
＜埋土＞埋土は4層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

14号土坑（第21図、写真図版16）
＜位置・検出＞B区Ⅳ B47グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は隅丸正方形を呈しており、規模は一辺0.7m、深さは0.15mを測る。
＜埋土＞埋土は2層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

15号土坑（第21図、写真図版16）
＜位置・検出＞B区Ⅳ B62グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅳ層で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は円形で、規模は、開口部で直径0.7m、深さ0.15mを測る。
＜埋土＞埋土は3層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。（石崎）

16号土坑（第21図、写真図版17）
＜位置・検出＞A区Ⅰ E95グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅲ層で検出され、1号掘立柱建物跡の2号柱穴に切られている。
＜平面形・規模＞平面形は円形で、規模は、開口部で1.7m、底面で1.1m、深さ0.8mを測る。
＜埋土＞埋土は4層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。底面の中央と南東壁

際で礫が出土した。大きさは、それぞれ30×15cmと45×20cmである。前者はほぼ底面に接していたが、後者はやや浮いていた。土坑に本来的に伴うものか、それとも埋没の過程で混入したのかは不明である。

時期　遺構を検出した層位、および切り合い関係から近世以降に属すると考えられる。　（石崎）

17号土坑（第21図、写真図版17）

＜位置・検出＞Ａ区ⅡＥ36グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅲ層で検出された。

＜平面形・規模＞平面形は円形で、規模は、開口部で直径2.3m、深さは約2.0mを測る。断面観察のためのベルトを除去した後、さらに掘り下げられることが判明し、半裁しながら掘り下げたが、湧水が著しく、断面の付け足し及び写真撮影は不可能だった。ただ、底面までには達することができたため、レベリングのみを行った。深さはそれによる値である。

＜埋土＞断面実測ができた面までは３層が確認され、それによる限りでは自然に埋没したものと推測される。また、掘り下げの過程で湧水が著しかったことと規模から井戸跡の可能性があるが、井戸枠などの施設は確認できなかった。

時期　遺構を検出した層位から近世以降に属すると考えられる。　（石崎）

18号土坑（第21図、写真図版17）

＜位置・検出＞Ａ区ⅠＥ99グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅲ層で検出された。

＜平面形・規模＞平面形は円形で、規模は、開口部で直径1.4m、底面で直径0.3m、深さ0.3mを測る。

＜埋土＞埋土は２層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。

時期　遺構を検出した層位から近世以降に属すると考えられる。　（石崎）

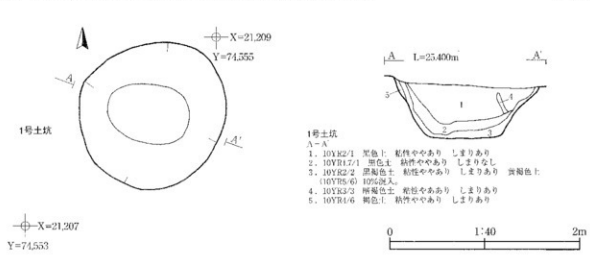
19号土坑（第21図、写真図版17）

＜位置・検出＞Ｂ区ⅢＢ72グリッドに位置する。第Ⅳ層で検出された。１号竪穴状遺構と重複し、これに切られている。

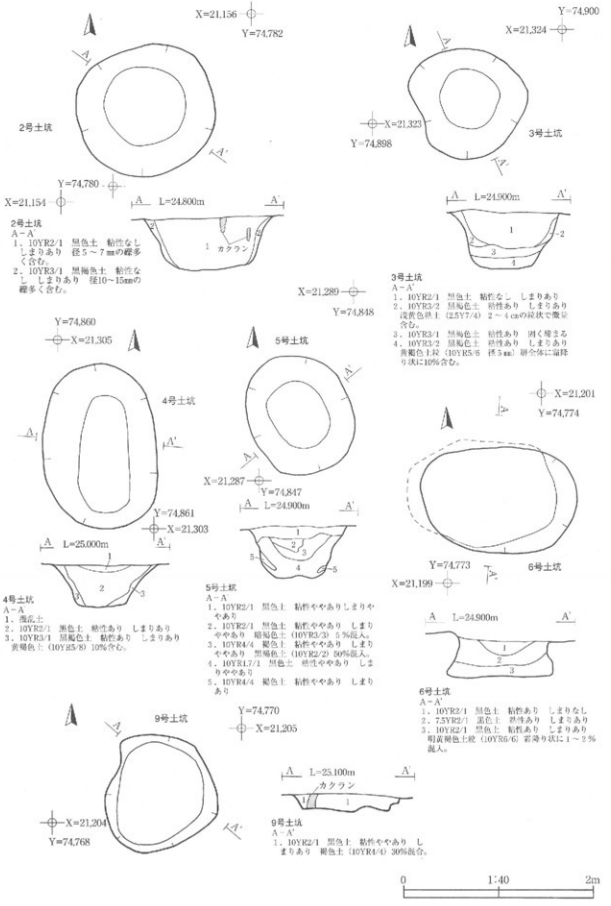
＜平面形・規模＞全形は確認できないが、残存する底部の形状から平面形は円形を呈していたものと思われる。

＜埋土＞現況で観察し得た埋土は３層に分けられ、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。

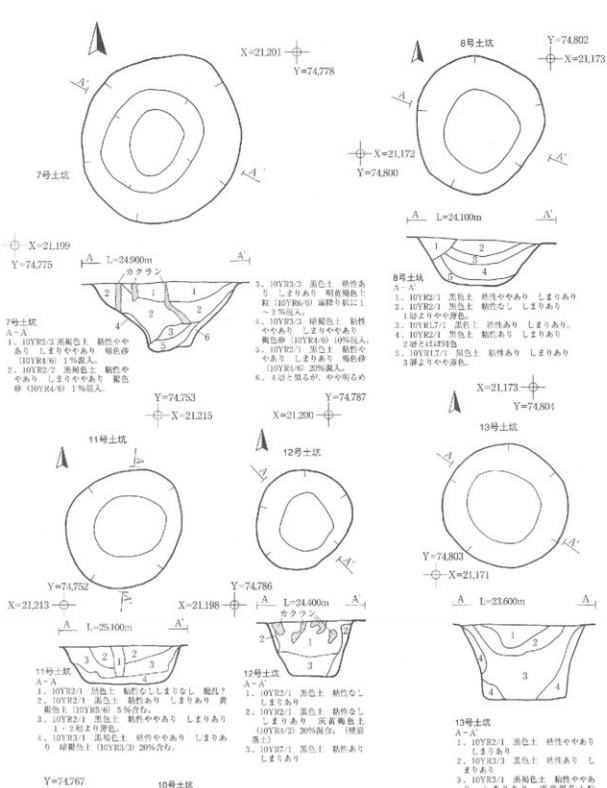
時期　遺構を検出した層位から縄文時代に属すると考えられる。　（石崎）



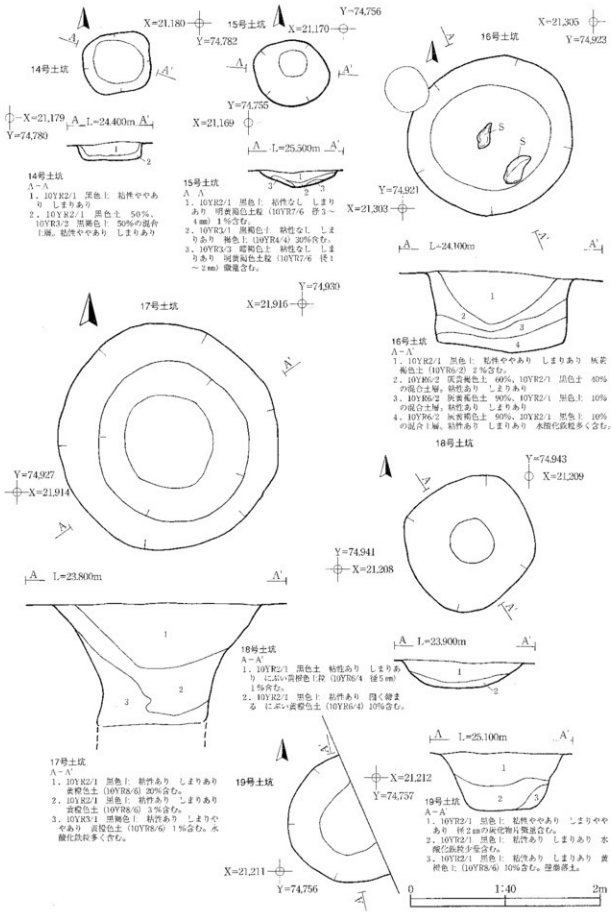
第18図　1号土坑



第19図　2号～6号・9号土坑



第20図　7号・8号・10号～13号土坑



14号土坑
A－A'
1．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりあり
2．10YR2/1　黒色土　50%、10YR3/2　黒褐色土　50%の混合土層。粘性ややあり　しまりあり

15号土坑
A－A'
1．10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりあり　明黄褐色土粒（10YR7/6　径3～4mm）1%含む。
2．10YR3/1　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　褐色土（10YR4/4）30%含む。
3．10YR3/3　暗褐色土　粘性なし　しまりあり　明黄褐色土粒（10YR7/6　径1～2mm）微量含む。

16号土坑
A－A'
1．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりあり　灰黄褐色土（10YR6/2）2%含む。
2．10YR6/2　灰黄褐色土　60%、10YR2/1　黒色土　40%の混合土層。粘性あり　しまりあり
3．10YR6/2　灰黄褐色土　90%、10YR2/1　黒色土　10%の混合土層。粘性あり　しまりあり
4．10YR6/2　灰黄褐色土　90%、10YR2/1　黒色土　10%の混合土層。粘性あり　しまりあり　水酸化鉄粒多く含む。

17号土坑
A－A'
1．10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりあり　黄橙色土（10YR8/6）20%含む。
2．10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりあり　黄橙色土（10YR8/6）3%含む。
3．10YR3/1　黒褐色土　粘性あり　しまりややあり　黄橙色土（10YR8/6）1%含む。水酸化鉄粒多く含む。

18号土坑
A－A'
1．10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりあり　にぶい黄橙色土粒（10YR6/4　径5mm）1%含む。
2．10YR2/1　黒色土　粘性あり　固く締まる　にぶい黄橙色土（10YR6/4）10%含む。

19号土坑
A－A'
1．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりややあり　径2mm内炭化物片微量含む。
2．10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりあり　水酸化鉄粒少量含む。
3．10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりあり　黄橙色土（10YR8/6）10%含む。埋没床土。

第21図　14号～19号土坑

（7）溝　　跡

1号溝

遺構（第23図、写真図版18）

＜位置・検出・重複関係＞B区の中央部分を北西－南東方向に走っている。北西端はⅢA89グリッド、南東端はⅤB50グリッドに位置する。北西方向が調査区外へと続くのは確実だが、南東方向については検出状況が悪い。重複する遺構はなく、南東部分ⅤB19・29・39グリッド付近の遺構検出面が削平されている。おおむね一直線に延びているが、蛇行している部分が所々でみられる。

＜規模＞長さは約100m、幅は開口部が0.6～1.2m、底面で0.4～0.7mと一定していない。深さは10～60cmである。

＜埋土＞埋土は2～3層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。壁は外傾しながら立ちあがり、底面は平らな部分もみられるが、ほとんどは波打っている。

遺物　検出面から陶磁器片が2点出土した。20は大堀相馬産の陶器碗破片で時期は18世紀、21は磁器皿の破片で産地・時期ともに不明である。他に埋土中から縄文時代早期の土器片が出土している。

時期　古代の検出面から掘り込んでいるので、おおむね古代のものと考えられるが、年代を確定できる資料がなく細かい時期までは比定できない。ただ、近くに古代の竪穴住居跡が検出されており、おおむね同時期のものだとすれば、平安時代まで降ることはないと思われる。（石崎）

2号溝

遺構（第22図、写真図版18）

＜位置・検出・重複関係＞A区の中央部分を北東－南西方向に走っている。北東端は1E78グリッド、南西端はⅡB70グリッドに位置する。両端とも調査区外へと延びていると思われる。4号溝と重複しており、4号溝は本遺構に切られている。

＜規模＞途中、未調査部分を含むが、長さ約148mを測る。幅は、開口部が1.0～2.0m、底面で0.4～1.0mと一定していない。深さは6.5～33.6cmである。ただ、底面の標高が北東端で23.8m、南西端で24.5mと、東から西に向かうにしたがって高くなっていることから、もとの深さは一定だったと推測される。

＜埋土＞埋土は7層からなり、堆積状況から自然埋没したものと思われる。1層には明黄褐色サンドが混入している。火山灰と考えられ、色調から白頭山苫小牧テフラ（B－Tm）と推定される。壁は外傾しながら緩やかに立ちあがる。

遺物　埋土からの出土はないが、ⅡD31グリッド付近の検出面より琥珀の破片が採集されている。

時期　時期については、1層に混入していた火山灰がB－Tmならば、その降下年代がおよそ10世紀前半と考えられているから、それ以前には埋没していたことになる。ただし、分析した結果ではなく、あくまで従来の発掘調査によって得られた情報、特に色調から判断したものであることを断っておく（なお、白頭山が9世紀にも噴火していることが明らかにされているが＜中川光弘ほか2004＞、本遺跡周辺に限らず日本で検出されているB－Tmが9世紀と10世紀とに明瞭に区別されていない現状ではどちらとも判断できないため、暫定的にB－Tmを10世紀前半のものとしておく）。（石崎）

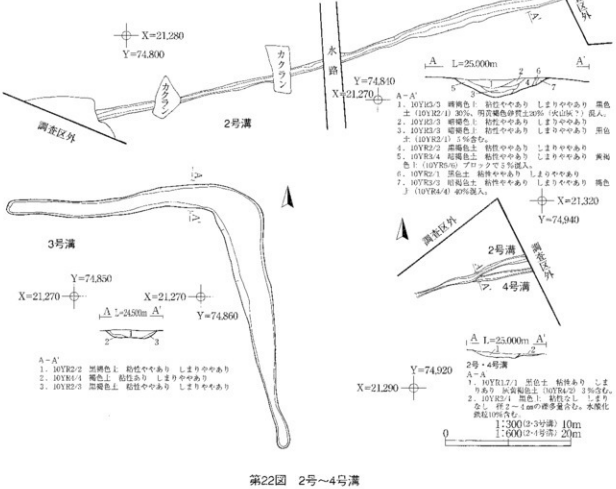
3号溝

遺構（第22図、写真図版17）

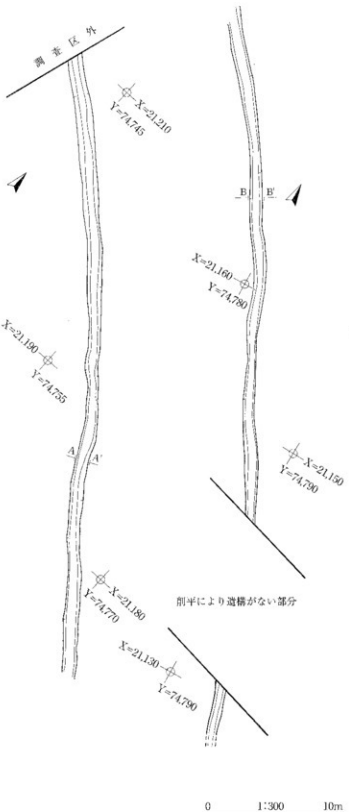
＜位置・検出・重複関係＞A区中央ⅡD42・43・53グリッドに位置する。

＜規模＞平面形はＬ字状を呈しており、全長約18.5mを測る。幅は両端が狭く、屈曲部が広い。両端の開口部が0.65m、底面が0.4m、屈曲部の開口部が3.5m、底面が2.9mである。深さは10cm前後で、底面は平らである。壁は緩やかに外傾して立ちあがっている。
＜埋土＞埋土は３層からなり、堆積状況から自然に埋没したものと推測される。
遺物（第28図、写真図版20）
　埋土上位から17世紀末～18世紀の肥前産磁器皿の破片が１点出土している。
時期　検出面や出土した遺物から近世前～中葉頃に属すると考えられる。　（石崎）

４号溝
遺構（第22図、写真図版18）
＜位置・検出・重複関係＞Ａ区東側ＩＥ87・88グリッドに位置する。西端で２号溝跡と重複し、それに切られている。
＜規模＞東側は調査区外へと続いており、調査区内の全長は9.2mである。幅は、開口部で0.6～1.1m、底面で0.4～0.9mを測り、深さは10cm前後である。底面は平らで、壁は外傾しながら立ちあがっている。
＜埋土＞削平により染み状に浮き出る程度の検出であったため埋土は暗褐色土の単層が観察できたのみである。
時期　10世紀前半には埋没していた２号溝に切られており、それより遡るのは確実だが、遺物の出土がないため、正確な年代は不明である。　（石崎）



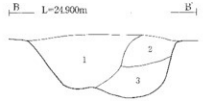
第22図　2号～4号溝



S=1/20

A－A'
1．10YR1.7/1　黒色土　粘性ややあり　しまりあり　明黄褐色土（10YR6/6）ブロックで3％含む。
2．10YR2/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　明黄褐色土（10YR6/6）ブロックで2％含む。

S=1/20

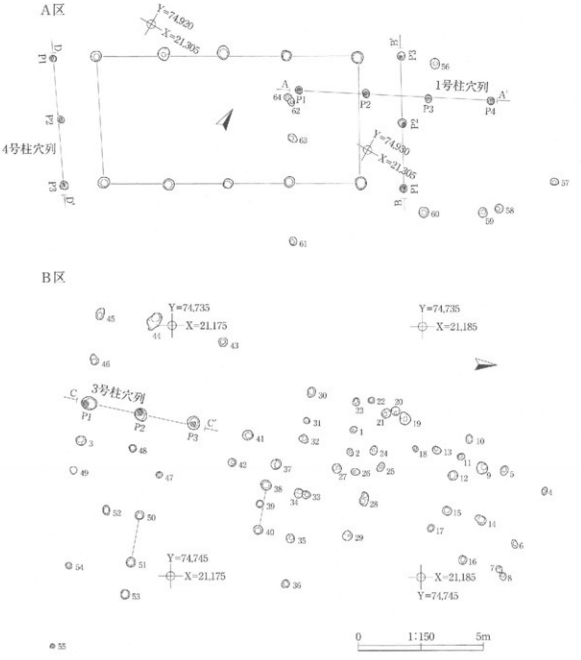


B－B'
1．10YR1.7/1　黒色土　粘性ややあり　しまりややあり　明黄褐色土（10YR6/6）ブロックで3％含む。
2．10YR2/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまりややあり　暗褐色土（10YR3/3）10％含む。
3．10YR3/3　暗褐色土　粘性ややあり　しまりややあり

第23図　1号溝

（8）柱穴列・柱穴状土坑（第24・25図、写真図版11）

A区東側1号掘立柱建物跡周辺とB区西側ⅣAグリッド周辺に偏在する。66基を登録した。建物を構成するものは1号掘立柱建物跡としたが、そのほかのものは柱穴状土坑として登録した。遺物が出土しているのはB区のP2・P3柱穴のみで、瀬戸・美濃産陶器の小破片が埋土から出土している。他のものについてもほぼ同じ時期のものと推測される。（石崎）



第24図　1号～4号柱穴列・柱穴群

1号柱穴列

P1
1．10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりややあり にぶい黄褐色土（10YR6/4）3％含む。
2．10YR2/1 黒色土 80%、10YR6/4 にぶい黄橙色土 20%の混合土層。粘性やあり しまりあり

P2
1．10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりややあり にぶい黄褐色土（10YR6/4）2％含む。
2．10YR2/1 黒色土 粘性やあり しまりややあり にぶい黄褐色土（10YR6/4）3％含む。
3．10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりあり
4．10YR5/4 にぶい黄褐色土 粘性あり しまりあり 黒色土（10YR2/1）10%含む。

P3
1．10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりややあり 明黄褐色土（10YR6/6）2％含む。
2．10YR2/1 黒色土 粘性あり しまりあり 明黄褐色土（10YR6/6）10%含む。

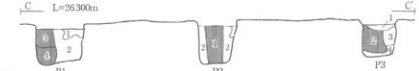
P4
1．10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりややあり 明黄褐色土（10YR6/6）1％含む。
2．10YR2/1 黒色土 粘性あり しまりあり 明黄褐色土（10YR6/6）10%含む。

2号柱穴列

P1
1．10YR2/1 黒色土 粘性なし しまりややあり 明黄褐色土（10YR6/6）3～5％含む。
2．10YR3/1 黒褐色土 粘性あり しまりあり 明黄褐色土（10YR6/6）3～5％含む。
3．地山。

P2・P3
1．10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりややあり 明黄褐色土（10YR6/6）2％含む。
2．10YR2/1 黒色土 50%、10YR6/6 明黄褐色土 50%の混合土層。粘性あり しまりあり

3号柱穴列



P1
1．10YR2/1 黒色土 粘性なし しまりややあり 明黄褐色土（10YR7/6）1～2％含む。
2．10YR2/1 黒色土 50%、10YR7/6 明黄褐色土 50%の混合土層。粘性なし しまりあり
3．10YR2/1 黒色土 粘性なし しまりなし 明黄褐色土（10YR7/6）5％含む。明赤褐色土粒（5YR5/6）微量含む。
4．10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりあり 明黄褐色土（10YR7/6）5％含む。

P2
1．10YR2/1 黒色土 粘性なし しまりあり 明黄褐色土（10YR7/6）2～3％。赤褐色焼土粒（5YR5/6）微量含む。
2．10YR2/1 黒色土 40%、10YR7/6 明黄褐色土 50%の混合土層。粘性なし しまりあり

P3
1．10YR2/1 黒色土 粘性なし しまりあり
2．10YR2/1 黒色土 粘性なし しまりあり 明黄褐色土（10YR7/6）1％、明赤褐色土粒（5YE5/6）微量含む。
3．10YR3/1 黒褐色土 50%、10YR7/6 明黄褐色土 50%の混合土層。粘性なし しまりあり
4．10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりやあり 明黄褐色土（10YR7/6）1％含む。

4号柱穴列

P1
1．10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりやあり 明黄褐色土（10YR6/6）1％含む。
2．10YR2/1 黒色土 粘性あり しまりあり 明黄褐色土（10YR6/6）2～3％含む。

P2
1．10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりややあり 明黄褐色土（10YR6/6）1％含む。
2．10YR2/1 黒色土 粘性あり しまりあり 明黄褐色土（10YR6/6）2～3％含む。
3．10YR2/1 黒色土20%、10YR6/6 明黄褐色土 50%の混合土層。

P3
1．10Y R2/1 黒色土 粘性ややあり しまりややあり 明黄褐色土（10YR6/6）1％含む。
2．10YR2/1 黒色土 粘性あり しまりあり 明黄褐色土 50%、10YR6/6 明黄褐色土 50%の混合土層。

第5～8表 柱穴列一覧

1号柱穴列

PNO	径	深さ	柱痕径
1	30×26	27	18
2	30×23	30	18
3	30×24	32	14
4	28×26	34	14

2号柱穴列

PNO	径	深さ	柱痕径
1	30×29	20	18
2	32×27	18	16
3	30×26	26	14

4号柱穴列

PNO	径	深さ	柱痕径
1	28×26	10	14
2	29×26	19	14
3	34×29	8	16

3号柱穴列

PNO	径	深さ	柱痕径
1	63×48	46	52
2	50×48	48	28
3	50×48	42	20

第9表 柱穴観察表

NO	径	深さ	NO	径	深さ	NO	径	深さ
1	24×30	30.5	23	23×30	55.1	45	29×47	21.9
2	23×34	24.7	24	24×38	37.6	46	31×43	22.1
3	37×37	21.7	25	23×40	32.8	47	27×27	21.0
4	22×30	22.6	26	23×35	15.3	48	30×30	30.1
5	30×38	43.5	27	36×36	39.4	49	28×28	13.7
6	24×36	24.2	28	30×54	24.9	50	33×33	30.3
7	28×28	22.5	29	40×40	28.1	51	35×35	33.2
8	28×28	38.3	30	30×40	21.0	52	28×40	15.4
9	49×49	40.3	31	26×26	8.8	53	39×39	6.1
10	26×35	21.6	32	32×32	12.1	54	24×24	34.4
11	26×26	15.7	33	34×34	20.9	55	20×20	—
12	35×35	41.0	34	39×39	17.8	56	40×40	—
13	27×37	33.7	35	34×34	23.0	57	25×25	12.3
14	32×47	34.2	36	37×37	12.7	58	32×32	32.7
15	39×39	37.2	37	44×44	29.6	59	34×34	46.9
16	27×27	32.0	38	41×41	42.1	60	41×41	34.8
17	24×33	14.1	39	29×29	12.0	61	28×37	39.5
18	24×24	28.0	40	28×28	46.5	62	25×31	58.2
19	45×49	25.1	41	43×43	4.2	63	32×40	56.9
20	37×37	47.6	42	29×29	21.0	64	28×28	57.6
21	36×36	24.5	43	35×35	11.8			
22	27×27	19.7	44	50×60	41.5			

※P1～P3からは陶器片が出土している。測定値の単位はcm。

第25図 1号～4号柱穴列断面図

V　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は縄文時代の土器・石器、中世以降の陶磁器などで古代の遺物は少ない。

（1）縄　文　土　器

本遺跡から出土している土器群の大半は縄文時代早期前葉に位置づけられるいわゆる白浜式土器で、貝殻文、爪形文、沈線文などの文様と底部の尖った深鉢形土器を特徴とする。本土器群は標式となっている白浜遺跡をはじめ青森県八戸市の遺跡で多く出土している。他には白浜式以前の沈線文土器1点、縄文時代中期の土器1点、後期の土器2点が出土している。

第Ⅰ群土器

縄文時代早期の土器を第Ⅰ群土器とし、文様や形態、形式の違いからさらに細分した。

a類（36）

縄文時代早期中葉の白浜式土器以前に属すると考えられる土器片で、口縁部に横位の平行沈線文が3条施され、地文は単節縄文で口唇部には工具による刺突文が斜方向から施され、小波状の口縁を呈する。

b類（37～76）

器形や文様の特徴が縄文時代早期前葉の白浜式・小舟渡平式土器群と類似するものである。文様の特徴としては口唇部に刺突文、口縁部に爪形刺突文、貝殻腹縁圧痕文、沈線文、胴部～底部にかけては条痕文やミガキ調整が施されるものが多い。本報告書に掲載したものは器形や文様など特徴のある口唇部～口縁部破片が中心に40点で、条痕文やミガキが施された胴部破片は出土数・出土割合は高いが少数の掲載とした。以下、部位ごとに文様組成を述べる。

口唇部：口唇部の残る破片は24点で口唇頂部に文様が施されるものは少なく、44・67の2点であり、施状工具による刻みが施されている。口唇部外面直下に施される文様は爪形刺突文が15点で62.5%、他には貝殻腹縁圧痕文（62・63）が8.3%、沈線文（58・61・67）、無文（50・73・76）がそれぞれ12.5%であるが、いずれも口唇部単独ではなく口縁部と連動した文様帯の一部としての要素が強い。

口縁部：口縁部の文様帯を観察できた破片は32点で、構成は爪形刺突文・貝殻腹縁圧痕文・沈線文が単独ないし複数列で装飾的文様を展開し、これに地文的な条痕文の組み合わせとなる。装飾的な文様の出現率は爪形刺突文が34.3%、貝殻腹縁圧痕文が21.8%、沈線文が25.0%、無文が6%で、地文的な条痕文が40.6%となっている。爪形刺突文の文様構成は縦横斜位のいずれかに重列展開されている（39～46・48・49・52・53・55）。沈線文の構成は（刺線状含む）連続山形（54・55・59）や斜格子目（52）、更に縦位と斜位を組み合わせたもの（57・58）があるが、文様帯を上下に区画するものとしないものがあり、前者では爪形刺突文を区画列としている。貝殻腹縁圧痕文は複数列で口唇部外面から派生し、直下するもの（62）、斜方向に施されるもの（63）、他の文様と合わせて口縁部文様帯を構成するものがあり、60は爪形刺突文、61は沈線文・円形刺突文と合わせて口縁部文様の構成要素となっている。

胴部～底部：装飾的な文様は口縁部に集中するため、地文的文様の条痕文（67～72）やミガキが施される。また貝殻腹縁圧痕文もあるが、装飾的な要素ではなく、地文的な使用である。

底部：先の尖ったいわゆる尖底土器の形態であるものが3点ある。66の胴部下半～底部外面付近には貝殻背圧痕文と思われる角状の重層文様の上から貝殻腹縁文が重複して施されている。胴部下半～

底部にかけてはミガキが施されるものもある（74～76）。

c類（77～80）

胴部に撚糸文が施された土器で4点出土した。胴部破片が3点で、1点のみ口縁部が残る。口縁部には爪形刺突文がV字形に2列横位に並び、口唇部は絡条体圧痕文が施され、やや肥厚する。胴部の単軸絡条体は横位に施文後、さらに重複して斜位に施されている。

第Ⅱ群土器

縄文時代中期前葉の土器片で1点（81）出土した。

第Ⅲ群土器

縄文時代後期に属する土器片で2点出土した。83は平縁の鉢形土器の口縁部破片で沈線間に連続の刺突文を縦位・横位・斜位に展開し、内面にミガキが施されている。（溜）

（2）石　　器

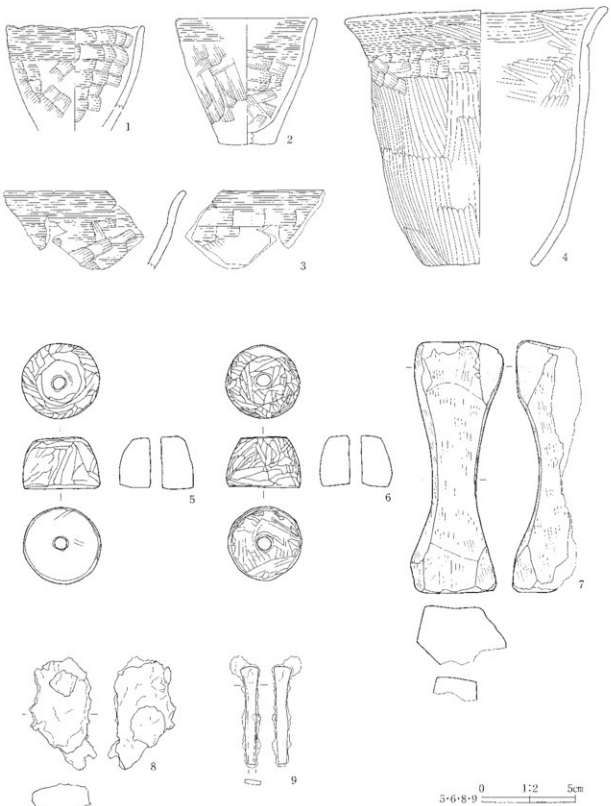
出土した石器は石鏃1点、掻器1点、磨製石斧1点、台石1点で他に剥片が散布的に出土した。出土地点や層位は縄文土器と同じで南部浮石が混入する第Ⅳ層からの出土である。89は調査前試掘跡から出土した無茎鏃で石質は頁岩である。91は磨製石斧で刃部は薄手で石質は頁岩が使用されている。縄文早期の土器が出土した地点で出土した。92は台石で扁平な形状を呈する。器面の両面に擦り痕が認められ、上面の一部に風化と思われる窪みがある。石材には斑糲岩を使用している。（溜）

（3）陶　磁　器

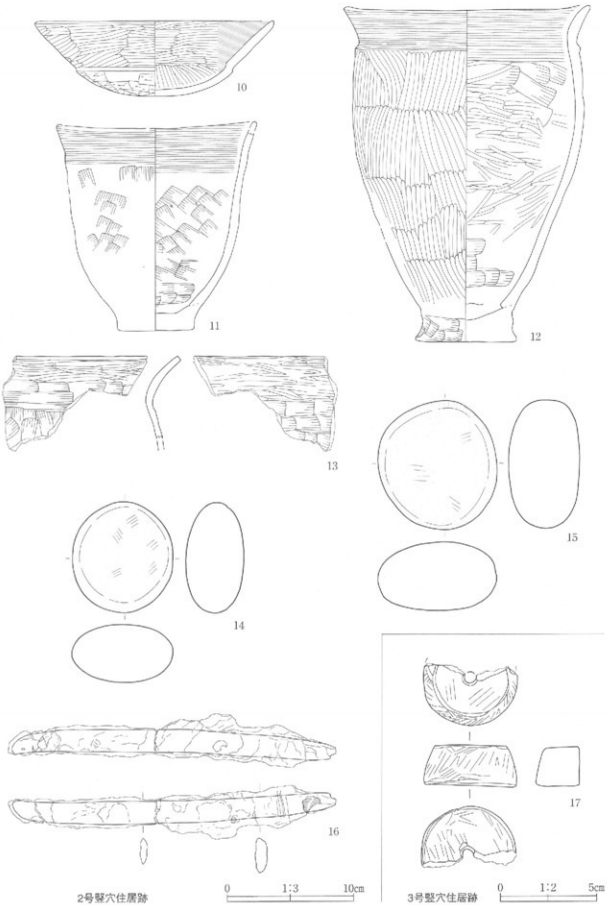
出土した陶磁器は18点で産地は中国産・瀬戸美濃・肥前産などである。時期は16世紀以降に属する。遺構外から出土したものは9点で8点がB区からの出土で1点は調査区外からの表採である。いずれも遺構と関連するものではなく散布的に出土した。27・28は中国産の磁器で器種は27が碗、28が皿である。時期は明代の16世紀のものである。31は瀬戸・美濃陶器皿で、32は瀬戸産の摺り鉢破片、33・34は地元の小久慈産陶器の碗で19世紀以降のものである。（溜）

（4）琥　　珀

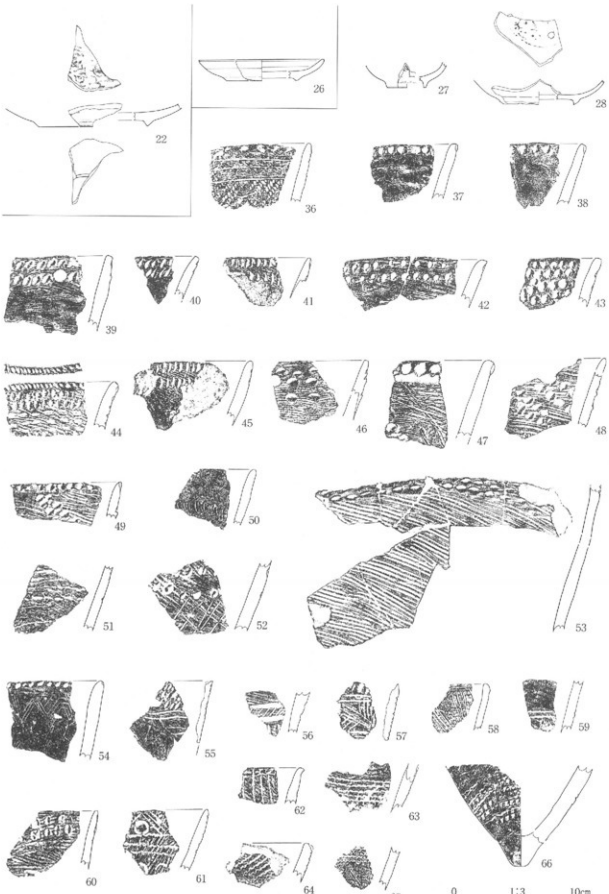
A区ⅡD23グリッドの2号溝検出面から琥珀を検出した。検出した琥珀は長さ0.2～0.5cmほどの小片で、総重量は0.3～0.1gである。（溜）



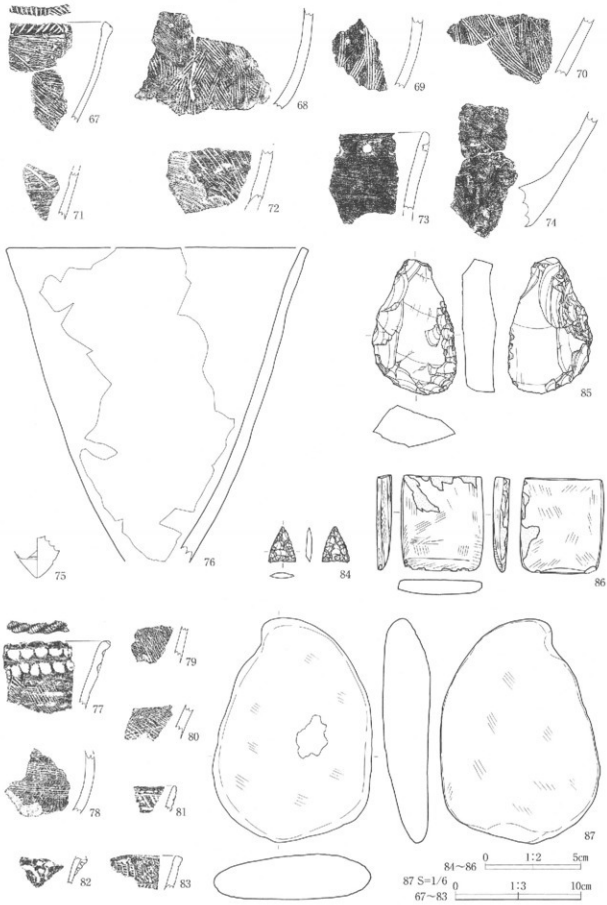
第26図　遺構内出土遺物（1）（1号竪穴住居跡）



第27図　遺構内出土遺物（2）（2号・3号竪穴住居跡）



第28図　遺構内出土遺物（3）（3号溝・P3柱穴）・遺構外出土遺物（1）



第29図　遺構外出土遺物（2）

第10表　遺物観察表1

土師器

No	出土地点・層位	器面調整			口径	底部	高さ	備　考	図版	写図
		器種	内面	底面						
1	1号竪穴住居跡－カマド右袖部上面	ヘラナデ	ヘラナデ		11.0				25	19
2	1号竪穴住居跡－カマド燃焼部	ヘラナデ	ヘラナデ						25	19
3	1号竪穴住居跡－カマド付近	ヘラナデ	ヘラナデ		11.2	4.5	10.1		25	19
4	1号竪穴住居跡－床面	ミガキ	ナデ・ミガキ		20.8		20.4	底底	25	19
10	2号竪穴住居跡－カマド脇床面	ミガキ	ミガキ	ケズリ	19.0		6.1		26	20
11	2号竪穴住居跡－焼土内	ヘラナデ	ヘラナデ		15.8	6.0	16.2		26	20
12	2号竪穴住居跡－カマド燃焼部内	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ		19.5	8.0	36.6	外面付着炭化物鑑定済み	26	20
13	2号竪穴住居跡－P2埋土中	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ						26	20

土製品

No	出土地点・層位	器　種	上面幅	下面幅	厚　さ	重　量	備　考	図版	写図
5	1号竪穴住居跡－P3埋土1層	紡錘車	2.5	4.0	2.7	48.7	器面ミガキ調整	25	19
6	1号竪穴住居跡－床面	紡錘車	2.4	3.8	2.6	41.8	〃	25	19
17	3号竪穴住居跡－P1埋土位	紡錘車	4.0	4.9	2.1	37.1	残存1/2	26	20

鉄製品

No	出土地点・層位	器種	長さ	幅	厚さ	備　考	図版	写図
8	1号竪穴住居跡－カマド崩落土	不明	6.0	3.2	1.6		25	19
9	1号竪穴住居跡－カマド崩落土	鎌	5.3	0.8	0.2		25	19
16	2号竪穴住居跡－床面	刀子	25.7	1.9	0.5		26	20

石器

No	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	産　地	備　考	図版	写図
7	1号竪穴住居跡	床面	敲石	20.0	7.0	5.2	695.4	デイサイト・最前山麓・新生代新第三紀		26	19
14	2号竪穴住居跡	床面	磨石	8.9	8.0	4.7	462.3	砂岩・北上山地・中生代		26	20
15	2号竪穴住居跡	床面	磨石	10.3	9.5	5.5	760.0	アプライト・北上山地・中生代白亜紀		26	20
84	IV A64	－	石鏃	1.9	1.4	0.3	0.6	貫岩・奥羽産脈・新生代新第三紀	生文課トレンチ廃土中	28	22
85	V B47	II層	磨製	7.2	4.4	2.2	62.0	頁岩・奥羽産脈・新生代新第三紀		28	22
86	V B49	II層	石斧	(5.0)	4.4	0.8	36.3	頁岩・北上山地・中生代		28	22
87	IV B74	IV層	台石	33.9	25.5	7.5	10800	斑糲岩・北上山地・中生代白亜紀		28	22

陶磁器

No	出土地点・層位	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	産　地	時　期	時　間	図版	写図
18	1号竪穴状遺構－掘土1層	陶器	鉢				浅黄橙色	瀬戸・美濃	16C			20
19	1号焼土－1・2層	陶器	皿				灰白	瀬戸・美濃	16C			20
20	1号溝－検出面	陶器	碗				灰白	大堀相馬	18C			20
21	1号溝－検出面	磁器	皿				白色					20
22	3号溝－検出面	磁器	皿		(8.6)		灰白	肥前	17末～18C	染付	27	20
23	3号柱穴列－P1埋土	陶器	皿				灰白	瀬戸・美濃？				20
24	3号柱穴列－P1埋土	陶器	皿				灰白	瀬戸・美濃	16C			20
25	P2柱穴　埋土	陶器	皿				灰白	瀬戸・美濃	16C			20
26	P3柱穴　埋土	陶器	皿	(10.0)	(3.7)	1.7	灰白	瀬戸・美濃	16C		27	20
27	IV D60	磁器	碗		(3.0)		灰白	中国産(明)	16C		27	21
28	IV B60	磁器	皿		(5.6)		灰白	中国産(明)	16C	染付	27	21
29	V A41	磁器	瓶				白色	肥前？	18C			21
30	V A66	磁器	皿				白色	肥前？	近世？			21
31	IV C35	陶器	皿				灰白	瀬戸・美濃	16C			21
32	IV B40　II層検出面	陶器	擂り鉢				灰白	瀬戸	18C			21
33	IV B50	陶器	碗				褐灰色	小久慈	19C以降			21
34	V B25	陶器	碗				褐灰色	小久慈？	19C以降			21
35	調査区外　表採	陶器	？				灰白					21

第11表　遺物観察表2

縄文土器

No.	出土地点	層　位	器種	部　位	文　様	備　考	分類	図版	写図
36	V B47	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇部：刻目文 口縁部：沈線文、LR縄文		I a	27	21
37	IV B65	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇部：爪形刺突文		I b	27	21
38	IV B72	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇部：爪形刺突文		I b	27	21
39	IV B74	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇～口縁部：爪形刺突文	口縁部に穿孔あり	I b	27	21
40	IV B84	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇～口縁部：爪形刺突文		I b	27	21
41	V B16	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇～口縁部：爪形刺突文		I b	27	21
42	IV B75	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇～口縁部：爪形刺突文		I b	27	21
43	V B47	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇～口縁部：爪形刺突文		I b	27	21
44	IV B73	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇部：刺突文 口縁部：爪形刺突文、条痕文		I b	27	21
45	V B16	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇～口縁部：爪形刺突文、条痕文		I b	27	21
46	IV B71	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口縁部：爪形刺突文、条痕文	口縁部に穿孔あり	I b	27	21
47	V B16	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇部：爪形刺突文 口縁部：条痕文		I b	27	21
48	IV B62	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口縁部：爪形刺突文、条痕文		I b	27	21
49	IV B62	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇部：爪形刺突文 口縁部：爪形刺突文、条痕文		I b	27	21
50	IV B84	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口縁部：爪形刺突文		I b	27	21
51	1号溝－検出面	耀土	深鉢	口縁部	爪形刺突文、貝殻腹縁押圧文		I b	27	21
52	IV B85	縄文面	深鉢	口縁部	爪形刺突文、沈線文、条痕文		I b	27	21
53	V B65	縄文面	深鉢	口縁～胴部	爪形刺突文、条痕文		I b	27	21
54	IV B84	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇部：刻目文 口縁部：沈線文		I b	27	21
55	IV B63	縄文面	深鉢	口縁部	爪形刺突文、沈線文		I b	27	21
56	IV B63	縄文面	深鉢	口縁部	爪形刺突文、沈線文、条痕文		I b	27	21
57	IV B76	縄文面	深鉢	口縁部	爪形刺突文、沈線文		I b	27	21
58	IV B75	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口縁部：沈線文		I b	27	21
59	1号溝－検出面	埋土上位	深鉢	口縁部	沈線文		I b	27	21
60	IV B74	縄文面	深鉢	口唇～胴部	口縁部：爪形刺突文、貝殻腹縁圧痕文、条痕文		I b	27	22
61	IV B85	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口縁部：円形刺突文、沈線文、貝殻腹縁文、条痕文		I b	27	22
62	IV B74	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	貝殻腹縁圧痕文、条痕文	裏面に条痕文？	I b	27	22
63	IV C91	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口縁部：貝殻腹縁圧痕文		I b	27	22
64	IV B72	縄文面	深鉢	口縁部	貝殻腹縁圧痕文、沈線文		I b	27	22
65	IV B74	縄文面	深鉢	口縁部	貝殻腹縁圧痕文、条痕文		I b	27	22
66	IV B84	縄文面	深鉢	胴部～底部	胴部：貝殻腹縁圧痕文、貝殻背圧痕文		I b	27	22
67	V B72	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口唇部：刻目文 口縁部：条痕文		I b	28	22
68	IV B84	縄文面	深鉢	胴部	条痕文		I b	28	22
69	IV B74	縄文面	深鉢	胴部	条痕文		I b	28	22
70	V B16	縄文面	深鉢	胴部	条痕文		I b	28	22
71	1号溝－検出面	埋土上位	深鉢	胴部	条痕文		I b	28	22
72	IV B74	縄文面	深鉢	胴部	条痕文	口縁部に穿孔あり	I b	28	22
73	IV B84	縄文面	深鉢	口縁～胴部	器面ミガキ		I b	28	22
74	IV B65	縄文面	深鉢	胴部～底部	器面ミガキ		I b	28	22
75	IV B75	縄文面	深鉢	胴部～底部	胴部：沈線文		I b	28	22
76	IV B62	縄文面	深鉢	口縁～胴部	条痕文？→ミガキ		I b	28	22
77	IV B85	縄文面	深鉢	口唇～胴部	口唇部：結条体圧痕文 口縁部：爪形刺突文 体部：撚糸文		I c	28	22
78	IV B65	縄文面	深鉢	胴部	撚糸文		I c	28	22
79	IV B75	縄文面	深鉢	胴部	撚糸文		I c	28	22
80	IV B85	縄文面	深鉢	胴部	撚糸文		I c	28	22
81	IV B64	縄文面	深鉢	口縁部	刺突文、沈線文	中期前葉	II	28	22
82	IV C26	縄文面	鉢	口縁部	刺突文、沈線文	後期？	III	28	22
83	IV B74	縄文面	深鉢	口唇～口縁部	口縁部：沈線文、刺突文	後期？	III	28	22

Ⅵ ま と め

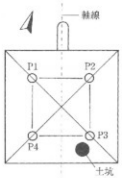
1 遺　　構

今回の調査で検出された遺構の時期は竪穴住居跡が古代、掘立柱建物跡・竪穴状遺構・焼土遺構・柱穴群が中世以降に属するもので、他に縄文時代の陥し穴状遺構や縄文・近世に属する土坑がある。いずれも比較検討できるほどの遺構数ではないが、各遺構ごとに本文中の記述の補足も含めて検討したい。

竪穴住居跡

検出された遺構数は３棟でいずれも第Ⅲ層の検出である。各遺構の詳細は本文で述べたとおりであるが各住居跡の形態や構造には以下のような共通項が認められる。

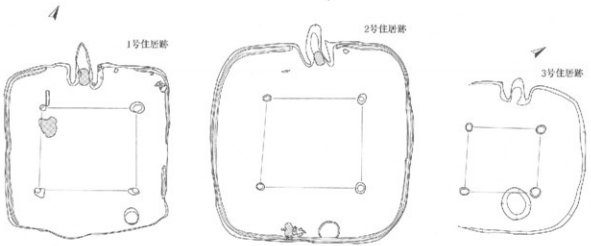
①床面に４基柱穴が配置されている。
②P３柱穴南側に土坑をもつ。
③カマドの煙道部は掘り込み式の構造で燃焼部側が低く、煙出し部に向かって傾斜して上がっている。
④カマドは北西側の壁面中央部に設けられている。
⑤カマド袖部は切り出した地山土に礫を加え、これをシルトで覆った構造である。
⑥１号・２号住居跡の壁際に溝が巡らされている。



第30図　住居跡模式図

このうち①については柱穴は住居（カマド）の軸方向に対しほぼ左右対象に配置され、壁隅を結んだ対角線上に載る。②については１号・２号住居跡の土坑は掘り込みが浅く、２号住居跡の土坑は壁溝に切られている。⑤については２号・３号住居跡では天井部に組まれていたと思われる礫が燃焼部～焚き口付近で検出されている。

これらの形態や構造の共通項から判断して、１号～３号住居跡はいずれも近い時期に存在した可能性が高く、これらにあてられる年代は２号住居跡の土器付着炭化物の分析・鑑定結果から６世紀後半頃と判断する。



第31図　中田遺跡検出住居跡

周辺の遺跡で類似した形態をもつ住居は本遺跡と同じ久慈市の源道遺跡のM10住居跡・J９住居跡・Q11住居跡、八戸市中野平遺跡の第14号住居跡、見立山（２）遺跡の第８号～10号住居跡、見立山（２）遺跡Ⅱの第18号・第19号住居跡などがある。いずれも４本の柱穴が住居壁面から等間隔の位置に配置され、軸方向に対し、左右対称である。カマドは北（西）壁側の中央部に設けられ、袖部は削り出した地山に礫を加え、シルトで覆った構造である。出土遺物から６世紀後半～７世紀後半頃の住居の一形態であったと考えられる。（溜）

掘立柱建物跡

Ａ区で１棟検出された。柱穴P64は掘立柱建物跡Ｐ４－Ｐ９とを結んだ線上に載るため間仕切りの柱と考えられる。なお、Ｐ４とＰ９の柱間寸法は1.65m（５尺）と、梁間を３等分した長さに等しい。P64の南側に柱穴があった可能性があるが、明確な痕跡は検出されていない。なお、この間仕切りより東側が土間と推測されるが、この東側１間分の柱間寸法が他より１尺長いのは入り口を設定するためだった可能性がある。柱穴Ｐ64を切る形で柱穴P62があり、これとP61とを結ぶ線は梁間と平行するが、この線は先に述べた掘立柱建物跡Ｐ４－Ｐ９と柱穴Ｐ11とを結ぶ線より東に若干ずれており、１号掘立柱建物跡を構成する要素とは認定しなかった。（石崎）

竪穴状遺構・焼土遺構・Ｂ区柱穴群

遺構内やその周辺から鉄滓が出土することから鍛冶に関連した遺構（施設）であると考えられる。焼土遺構については本文でもふれたが、周辺で検出された柱穴で構成される施設（建物）内に存在した可能性がある。出土した陶器からいずれも近い時期に存在した遺構と考えられる。（溜）

陥し穴状遺構・土坑

陥し穴状遺構は溝状の形態をしたもの４基、円形のもの１基である。いずれも単独で検出され、軸方向なども不定である。時期は陥し穴状遺構が検出された層から縄文時代、土坑は２号土坑から縄文時代早期の土器片が出土した以外は時期を判断できる遺物はなく、検出面から縄文時代早期以降のものと近世以降のものとに分けられる。縄文時代の土坑は形状から円形の陥し穴状遺構の可能性が考えられるが、逆茂木を設置した痕跡である小ピットを確認できた土坑は１基（→５号陥し穴状遺構に変更）のみである。近世の土坑では16号土坑の底面から大きな礫と木材片が出土した。また17号土坑は規模や形状などから判断して井戸跡であった可能性が考えられる。（溜）

２　遺　　物

今回の調査では縄文土器、土師器、土製品、石器、鉄製品が出土したが、主に遺構外の縄文土器と遺構内の土師器に分けられる。

縄文土器

縄文土器は大半が早期前葉の白浜式といわれる土器である。第１群土器とした沈線文土器は青森県八戸市鴨平（１）遺跡・同見立山（１）遺跡などで出土しているもので、縄文地文で口縁部には数条の沈線文、口唇部には刺突文が斜方向から施され、小波状の口縁を呈するのを特徴とする。見立山（１）遺跡では縄文地文の沈線文土器を第Ⅱ群土器とし、さらに口縁部の形態によって４つに細分しており、当遺跡出土の土器片はａ２類に含まれるものである。

第Ⅰ群土器ｂ類とした土器は白浜式・小舟渡平式とされるものである。爪形刺突文・貝殻腹縁圧痕文・沈線文などの文様が条痕文を地文として施されている。中野平遺跡、水月沢遺跡、熊ノ沢遺跡など青森県八戸市の遺跡で出土が多い。

また、第Ⅰ群土器ｃ類とした撚糸文土器は他に見立山（１）遺跡や中野平遺跡でも数点出土してお

り、前者は早期の土器と同じ層位、後者は主に遺構外からの出土である。いずれも胴部の小破片がほとんどであり、口唇部～口縁部文様との関連は不明で、時期的な位置付けが明確でないものである。本遺跡から出土した撚糸文土器は4点中3点が胴部破片であったが、1点は口唇部～口縁部を含む破片である。口唇頂部には絡条体圧痕文、口縁部には∨字状の爪形刺突文を横位に2段配列し、胴部の単軸絡条体は横位に施した後、斜位に重複して施されている。口唇部の絡条体圧痕文は後続する根井沼式の土器に多くみられるものであるが、∨字状の爪形刺突文や撚糸文との関連性は不明である。白浜式・小舟渡平式の土器が多く出土している中野平遺跡で口唇部に絡条体圧痕文を施している土器は出土していないことから、白浜式・小舟渡平式土器とは時期的な相違がある可能性が考えられるが、現時点では明確な時期を特定するのは難しく、今後の調査で良好な資料が出るのを待ちたい。

土師器

今回の調査では竪穴住居内から出土し、遺構外からは殆ど見つかっていない。掲載した土師器は1号・2号竪穴住居跡内出土の8点で器種は甕6点、甑1点、坏1点である。不掲載としたものはいずれも甕の破片である。坏は内外面に段をもつ丸底のもので甑は無底である。遺物の年代的位置付けについての詳細は次章の考察で述べるが、2号住居跡のカマド燃焼部から出土した甕に付着した炭化物と同住居床面から出土した炭化物を年代測定したことによって、久慈市を含む東北北部太平洋沿岸地域の土器形態の年代観を再考する手がかりとなった。（溜）

3　総　　括

今回の調査で中田遺跡が大きく分けて3つの性格をもつ遺跡であることが確認された。すなわち縄文時代には土器散布地および狩猟場、古代には集落跡、中世後半には鍛冶関連などの作業を行った場であるということである。古代の住居跡は3棟と数は少ないものの、住居の形態が似ていることに加え、土器に付着した炭化物の^{14}C年代測定により、東北北部太平洋沿岸地域の土器編年観を再考する一助となった。中世については本遺跡の北側に久慈城があり、久慈市教育委員会の試掘によって土郭・帯郭・馬場跡・空掘などが確認されている。久慈城の築城年代は根本資料を欠くため不明な点が多いが、文明年中（1469～1486年）に久慈備前守信実が入城して以来、久慈氏累代の居館とされ、天正19年（1591年）の九戸政実の乱に際し、18代直治が九戸側に味方し、敗れて処刑された後、破却された。本遺跡で検出された鉄滓を含む竪穴状遺構や焼土、およびその周辺の柱穴状土坑などから出土した陶磁器は16世紀のもので、久慈氏が久慈城に居を構えていた時代にあたり、これと何らかの関連性をもつ可能性が考えられる。

最後に、今回調査を行なった中田遺跡の所在する大川目地区には、分布調査によって多くの遺跡が存在することが確認されているが、本格的な調査は今回の中田遺跡が初めてであり、本遺跡の調査成果が今後、周辺遺跡の発掘調査を行なう際の一助となれば幸いである。

〈参考・引用文献〉

青森県教育委員会　1990　『中野平遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第134集
青森県教育委員会　1998　『見立山（1）遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第238集
久慈市教育委員会　1992　『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』　久慈市埋蔵文化財調査報告書第14集
八戸市教育委員会　1989　『見立山（2）遺跡』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第38集
中川光弘ほか　2004　「白頭山９世紀噴火の発見とその意義」（谷口宏充編『中国東北部白頭山の10世紀巨大噴火とその歴史効果』東北アジア研究センター叢書第16号）
八戸市教育委員会　1999　『見立山（2）遺跡Ⅱ』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第79集
三沢市教育委員会　1991　『小川内沼（1）・（4）遺跡』　三沢市青森県埋蔵文化財調査報告書第10集

Ⅶ 考　　察

久慈市中田遺跡２号竪穴住居跡出土土器とその意義

石崎　高臣

はじめに

ここでは２号竪穴住居跡（以下、2号住居と略す）から出土した土器について年代的位置づけをし、それによって生じる様々な事柄についてふれることにする。

まず、２号住居および出土遺物を概観する。ついで、出土遺物、特に上師器坏が従来の久慈周辺における編年体系のどこに位置づけられるかについて検討する。その際、年代観について若干の修正を行う。そして、修正された年代観によって生じる久慈周辺あるいは東北北部太平洋沿岸の歴史について検討を加えることにする。

1　２号住居および出土遺物の概要

（1）２号住居

平面形は隅丸方形を呈し、軸長は6.50×6.30mを測る。主軸方向はN－48°－Wである。カマドは北西壁の中央に構築されている。地山を削りだし、礫を芯材としてその周りに黒色土や黒褐色土を貼り付けて構築されていたと推測される。燃焼部の規模は0.45×0.30mで、そこから掘り込み式による煙道部が0.97m延びている。燃焼部からは甕が出土している（第26図12。炭素14年代測定に供したたサンプルはこの甕の体部外面に付着していたお焦げと思われる炭化物を採取したものである）。柱穴は４個確認された。主軸を中心軸としてほぼ左右対称に配置されている。カマドと反対側の南東壁では焼土が0.40×0.25mの規模で広がっているのが検出され、周辺からは甕や礫が出土している。煙道が検出されていないためカマドとは考えにくいが、どのように使用されていたのかについては現段階では不明とせざるを得ない。壁際には幅８～16cm、深さ３～７cmの溝が廻っている。

なお、事実記載でもふれられているが、２号住居の埋土上層からは白頭山苫小牧テフラが混入する十和田ａテフラが検出されていることをつけ加えておく。

（2）出土遺物

土師器の坏が１点（第26図10）、甕が３点（第26図11～13）、鉄製品が１点（第26図16）出土している。これらは13が埋土中位から出土した以外は床面もしくは床面よりやや浮いた状態で出土していることから一括遺物と捉えられる。10は丸底の坏である。口径19.0cm、器高は6.1cmと比較的大型である。体部の内外両面に段がみられ、それより上は外反しながら立ちあがっている。内面は全面にヘラミガキが施され、黒色処理されている。外面は段より上がヘラミガキで、下はヘラケズリである。ヘラケズリの部分は粗く仕上がっており、器面を平滑にするために調整を行ったというよりも器形をある程度整えるためになされたという印象を受ける。11は小型甕である。口縁部はヨコナデによって調整されているが、段は形成されておらず体部から連続し、そのままやや外傾しながら丸みを帯びた端部に至る。底部は突出して台状を呈している。体部の器面調整は外面・内面ともにヘラナデである。現状では外面の調整痕はまばらだが、器面が摩滅していることからすれば、もう少し密に施されていたものと思われる。12は長胴甕である。口縁部は外反しながら立ちあがるとともに明瞭な段が形成されている。端部は11と同じように丸みを帯びている。底部は、やはり11と同じように突出して台状を呈しているが、その内面は丸みを帯び半球状となっている。体部の調整は、外面はヘラミガキが綿密

に縦方向に施されている。内面はヘラミガキとともにヘラナデが見られる。いずれもほとんどが横方向で、体部の下半ではヘラナデのみだが、上半では混在する。ヘラナデがヘラミガキによって切られている部分が観察されるので、ヘラナデによって整形された後、器面を平滑にするためにヘラミガキが施されたのではないかと推測される。このことからすれば、外面も同じようなことが行われた可能性が高い。最大径は口径にあり、19.5cmである。それに対して底径は8.0cmであり、口径と底径の比が2.5：1と底部がすぼまった形態を呈している。13は甕の口縁部の破片である。段を持ち、現状から推測する限り外反しているようである。端部は11・12と違い平坦である。16は刀子である。現状では錆に覆われており、刀子自体の法量は直接測れないが、X線写真による観察によれば全長は25.5cm、最大幅1.7cmである。切先は残存しているが、X線写真から判断する限り柄部は破損していると考えられる。現状では身はやや反っていたと考えられる。錆をある程度除去した時点で柄部には木質が残存していた。

12の体部外面に付着していた吹きこぼれが炭化したものと推測されるものを採取し、それを試料として炭素14年代測定を試みた。詳細は附編2を参照して欲しいが、分析の結果、炭化物の年代は西暦570±40年との報告を得ている。炭化物が何に由来しているのは不明であるが、δ^{13}が−26.47±0.95で、一応海洋リザーバー効果の影響はないと考えられるから、西暦570±40年は土器の年代に近いものと考えられる。

2　久慈周辺の土器編年（第32図）

（1）研究史

久慈周辺の土器を編年したものは後述の羽柴のものしかない（羽柴1995）。そこで、ここでは地域を少し広げて馬淵川流域を対象としたものについて簡単にふれておく。

この地域の土器をまとめたものの嚆矢としては宇部則保のものがあげられる（宇部1989）。宇部は馬淵川下流域の集落遺跡から出土した土器群について検討を加えている。そのうち、特に住居から出土した一括資料で7・8世紀に比定される土師器をⅠ群からⅣ群まで分類し、Ⅰ群→Ⅱ群→Ⅲ群→Ⅳ群と変遷したことを提示している。これらの年代観については、隣接する北上川上・中流域や馬淵川上流域や北大式土器（特に北大Ⅲ式）との比較から導き出し、Ⅰ群を7世紀前葉～中葉、Ⅱ群を7世紀後葉～8世紀前葉、Ⅲ群を8世紀中葉、Ⅳ群を8世紀後葉～末葉としている。後述の羽柴による久慈周辺の土器編年で参考にされた馬淵川下流域の編年はこれである。ただ、後述のように宇部は2002年にこの編年を修正しており（宇部2002）、これと区別する意味で本稿ではこの編年を宇部1989編年とする。

八木光則は、岩手県北部を斯波郡（現在の盛岡市を中心とした地域）と閉伊郡（現在の二戸市を中心とした地域）の2つに地域に分け、出土した土器を器形や器面調整をもとに分類した（八木1993）。それによれば斯波郡ではA～Kの12群、閉伊郡ではA～Jの11群に分かれ、それらは7～12世紀（後者では11世紀）という長い時間軸に位置づけられている。本稿が対象とする閉伊郡の8世紀までに関しては、A～E類に相当する。実年代についてはあくまで目安であると断ったうえで、Aを7世紀中葉、Bを7世紀後葉、Cを8世紀前半、Dを8世紀後半、Eを8世紀末としている。

利部修は、秋田県半鹿町下藤根遺跡から出土した土器群の位置づけを検討する中で馬淵川下流域の土器の年代観について若干ふれている（利部1993）。利部は下藤根遺跡から出土した土師器坏のうちa類としたものの特徴として体部内面に稜がある事をあげる。そして、この稜が丸底の底部と稜から大きく内湾する口縁部という器形を規制するもので、東北地方北部に独特にみられるものだとしてこ

れらの土器群を「東北北部型坏」と称している（p35）。この「東北北部型坏」について利部は器形の似た須恵器や併出した須恵器から年代観を求めている。その中に宇部1989編年でⅡ群と設定された田面木平（1）遺跡39号住居から出土した坏が含まれており、それを7世紀中葉としている。

羽柴直人は、久慈市周辺にみられる段のない土師器坏・甕について検討を加える中で、土器の分類・編年を行っている（羽柴1995）。これについては項を改めて詳述する。

仲田茂司は、東北地方および北海道における古墳時代中・後期の土器を編年する中で馬淵川流域の土器について触れている（仲田1997）。まず、東北地方南部の土器群を主に形態から分類し、その上で関東地方以西の土器との併行関係から年代観を求めている。そしてそれをもとにして、さらに東北北部の土器群の年代観を引き出している。それによれば、宇部1989編年がⅠ群とした根城跡SⅠ110出土土器を6世紀中葉に比定している。そして、これ以前までは東北北部では続縄文文化が維持されていたが、6世紀中葉以降に古墳時代土器様式が受容されるに至ったとしている。

宇部は「馬淵川流域の七世紀代の地域性について」検討するにあたって、土器の変遷をみている（宇部2002）。まず、土師器の坏と長胴甕を器形によって坏A～Cと甕A～Bに分け、その変遷を一段階から三段階に区切り、それぞれの変遷を検討している。各段階の年代については、一段階を6紀後葉～7紀前葉、二段階を7世紀中葉、三段階については明言されていないが二段階に後続するものととらえられていることから、おおむね7世紀後葉としてよいだろう。ここに見られる各段階が宇部1989編年で提示されたⅠ群以下のどの群と対応するか明確にされているわけではない。ただ、宇部1989編年の1群の指標とされていたものが一段階の基準資料に、同じくⅡ群の指標とされていたものが二段階の基準資料とされていることから、おおむね一段階はⅠ群に、二段階はⅡ群に相当すると考えてよいだろう（三段階の基準資料は宇部1989編年で使用しているものではないのでⅢ群に相当するかどうかは不明とせざるを得ない）。事実、宇部自身、根城跡SⅠ110（第31図3～5）や同SⅠ122（第31図1・2）を7世紀前半に位置づけていたが両者には年代差があると考えるようになり、後者を6世紀後半と比定している。

以上、馬淵川流域で出土した土器について検討を加えた研究を概観した。それによれば、馬淵川流域の土器、なかでも土師器坏は「東北北部型坏」とされているように、非常に個性の強いものであることが認識されるようになってきた。また、古墳時代後期の土器様式が受容されるのは6世紀中ごろであって、それ以前は続縄文文化が維持されていたということは重要な指摘だと考える。さらに、年代観については研究が深まるにしたがって徐々に遡る傾向にあり、例えば宇部1989編年のⅠ群は約30年ほど遡っていることになる。

（2）羽柴編年の概要

前述の羽柴1995によって示された久慈周辺（羽柴は現在の行政区分でいう「九戸郡」とし、九戸地方とも称する）の土師器編年を本稿では羽柴編年と称する。

羽柴編年は、久慈周辺でよく見られる類部に段がない長胴甕と体部に段を持たない坏が「九戸地方の土師器の「地域性」」ではないかと考え、その特徴と相対的変遷過程を検討する中で構築されたものである。羽柴は、九戸村丸木橋遺跡と久慈市源道遺跡から出土した土器を基本に久慈周辺の土器を5つに分類している（1群～5群）。また、それらの年代については、馬淵川流域の土師器との併行関係をもって決定しているが、参考にした馬淵川流域出土土器の編年は宇部1989編年と八木のものである。

ここでは羽柴が設定した5つの土器群の概要について見る。ただ、その前提には丸木橋遺跡と源道遺跡から出土した土器に関する羽柴の分析があるので、まずそれらの紹介をしておく。

羽柴は丸木橋遺跡出土土器を長胴甕を基本に１群と２群とに分けた。その特徴は次の通りである。まず１群については、器高が非常に高く（40cmに達するものもある）、最大径が頸部にあり、底部は突出し、その経は口径の半分以下で非常に小さい。頸部に段を持つものはない。一方、２群については、器高は１群に比べると低く、体部の中央付近に最大径を持つものが多い。頸部に段があるものとないものが混在するが、個体数は後者の方が多い。坏については、１群器形の特徴をまとめられる点が少なく、共通する特徴を抽出することは難しい。ただ、ほとんどの土器は体部に段を有していない。２群の坏は丸底と平底のものがあり、いずれも体部に段は見られない。これら１群土器と２群土器の前後関係は、外面の調整によって決定される。すなわち、１群土器はハケメもしくはヘラナデを下地にヘラミガキが綿密に体部だけでなく口縁部までおよんでいるのに対し、２群土器では外面の調整がハケメもしくはヘラナデですまされてるものが多く、１群と同じようにヘラミガキが施されていてもまばらでかつ口縁部までにおよぶものはない。隣接する馬淵川上流域では時代が降ることにつれてヘラミガキがあまり用いられなくなる傾向があることから、これについては１群→２群の変遷を想定する。

源道遺跡についてもやはり出土土器を１群とⅡ群とに分けている。まず、Ⅰ群土器は坏・甕ともに段を有している。坏は丸底で内外両面に段が見られ、口縁部は内湾して立ちあがるものが多い。甕は器高が高く口縁部が外反しながら立ちあがり、最大径は口縁部にある。次にⅡ群土器は坏・甕ともに段が見られない。坏は丸底でを主体とする。甕はⅠ群や丸木橋１群ほど器高は高くない。口縁部は内湾しながら立ちあがるものが主体となる。最大径は体部にあるものがほとんどであり、また口縁部にあったとしても体部がかなりふくらんでいるのが特徴である。これらの前後関係については、丸木橋遺跡出土土器との比較で次のように考えられる。すなわち、Ⅱ群の甕が丸木橋２群の甕と同系統とみなせることから同時期だとし、Ⅰ群の坏が内外両面に段を持ち、外面のみに段が見られる丸木橋１群の坏より古い要素を持っていることからⅠ群→Ⅱ群としている。ただし、両群の作り手には断絶があると想定しているようである。

以上の丸木橋遺跡・源道遺跡出土土器の変遷は源道Ⅰ群→丸木橋１群→源道Ⅱ群・丸木橋２群となり、源道Ⅰ群を１群土器に、丸木橋１群を２群土器に、源道Ⅱ群・丸木橋２群を３群土器としている。

４群土器は、３群の長胴甕の形態変化から設定したものである。その特徴として、口縁部が内湾気味に立ちあがり、底部の突出は３群のものに比して弱く、また底径も大きくなっている。頸部には段のないものが多いけれども、段を有するものも一定数見られる。坏も丸底で体部に段がないものがほとんどである。また、大きさが３群のものに比べるとやや小振りになっている。

５群土器は、４群の坏の形態変化から設定したものである。４群段階まで坏は丸底だったが、この段階になると平底化する。また、多くのものの体部に段が確認される。長胴甕は、口縁部がやや内湾し、頸部には段が見られる。最大径は体部にあり、底部の突出は非常に小さくなっている。器面調整でヘラミガキが施されたものはない。

以上のように、羽柴は久慈周辺の土器を５つの群に分類している。これらの年代については、すでに編年が組み立てられている馬淵川流域の土師器との併行関係から次のように考えている。１群土器は、宇部1989編年ではⅠ群とⅡ群との間に位置づけられ、八木編年ではA分類に相当する。２群土器は、宇部1989編年のⅡ群、八木編年のB分類のそれぞれ古い段階に相当する。３群土器は、宇部1989編年のⅡ群、八木編年のB分類のそれぞれ新しい段階にあてはめられる。４群土器は宇部1989編年のⅢ群・八木編年のC分類に、５群土器は宇部1989編年のⅣ群・八木編年のD分類にそれぞれ併行させている。そして、各群の実年代については宇部編年を参考にし、１群を７世紀中葉、２群を７世紀後

半、3群を7世紀末～8世紀初頭、4群を8世紀前半、5群を8世紀後半としている。4群および5群の設定期間が若干長く設けられているが、これは5群の指標となっている土器が久慈市中長内遺跡以外見られず、また器種組成が完全でないためで、羽柴自身も述べているように「ほかの遺跡の事例によって補強する必要がある」からである（p38）。

以上のように羽柴編年は資料不足により若干変更される余地はあるものの、その編年体系は妥当なものと考えられる。

（3）2号住居出土土器の羽柴編年における位置づけ

前項では羽柴編年の概要を述べた。ここでは2号住居から出土した坏が羽柴編年のどこに位置づけられるか検討する。

2号住居から出土した坏は前項で述べたように、丸底で内外面に強い段を持ち、口縁部は外反しながら立ちあがる器形である。丸底で内外面に段を有することから、一見して1群土器との類似性に気付く。しかし、1群上器の口縁部が内湾しながら立ちあがっているのに対して、2号住居出土のものは外反しながら立ちあがる点で異なっている。両者の前後関係については、2群土器のうち外面に段を持つ坏の口縁部が内湾していることから、1群以降、坏の口縁部は内湾傾向にあるとみられ、2号住居出土坏が1群（や2群）に後続することは考えにくい。したがって、羽柴編年では1群に先行するものと位置づけておきたい。また、1群土器は馬淵川下流域の宇部1989編年のⅠ群とⅡ群の間に位置づけられているが、宇部1989編年Ⅰ群上器の坏を見ると、例えば根城跡ＳⅠ110から出土した坏（第32図1）の口縁部が外反しながら立ちあがっていることが確認される。この点で2号住居出土坏は根城跡ＳⅠ110出土坏と類似するものといえ、同時期に位置づけることができよう。

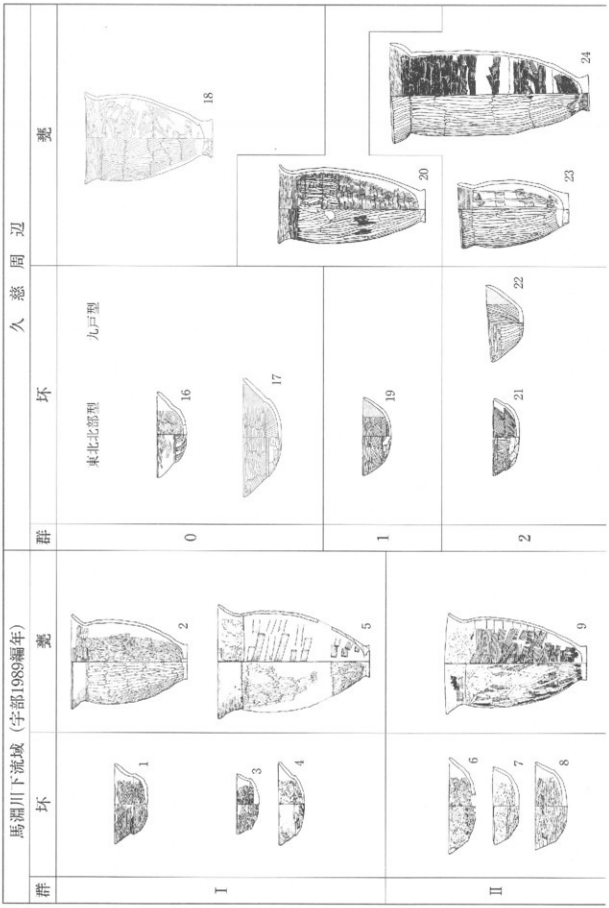
以上のことから、2号住居出土坏は羽柴編年においては1群の前段階に位置づけられ、馬淵川下流域の宇部1989編年のⅠ群に併行するものとすることができよう。

（4）羽柴編年の若干の修正

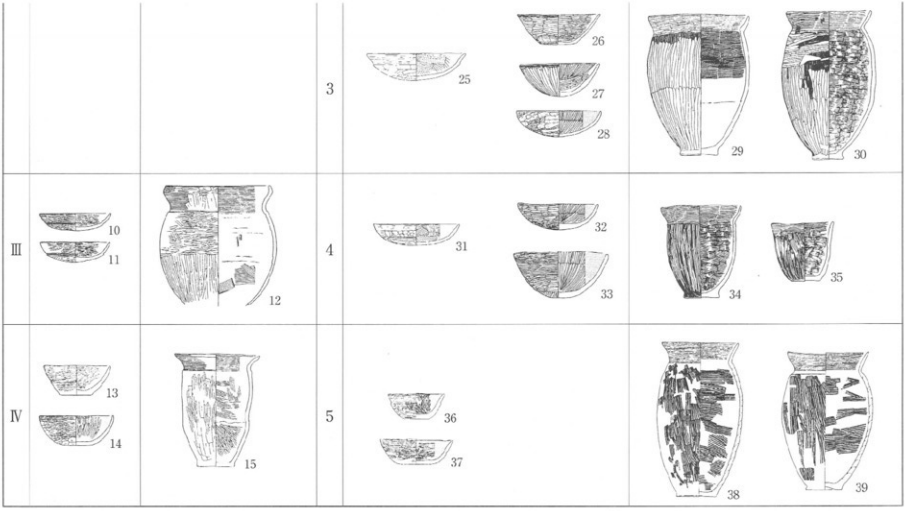
0群土器の設定　先に2号住居から出土した坏を羽柴編年1群より先行するものとした。これと同じような土器はこれまで久慈周辺から出土したものから見出されたことはなかった。けれども、源道遺跡Ｌ25住居跡から出土した土師器坏（第32図16）は、丸底で内外両面に明瞭な段が確認され、口縁部が外反しながら立ちあがっている点で、2号住居から出土した坏に類似している。ただ、丸底の底部は中田遺跡のものよりも若干深く、それよりもやや古相を呈する（ただし、源道遺跡Ｌ25住居跡から出土した他の土器、特に坏類を見ると、16と同じく床面から出土したものでも体部に段がないものや5群に相当する平底のものが混在していることをつけ加えておく）。このように、2号住居出土坏のような形態のものが、他にも存在したことを重視したい。これは、1群土器よりさかのぼる土器が久慈周辺に存在していたことを示しているのではないだろうか。そこで、これらの土器群を1群土器よりも先行するという意味で、羽柴編年0群と称しておきたい。

今のところ0群土器は2点が知られるのみである。これについては、久慈周辺での本格的な調査が海岸段丘上に載っている遺跡を対象としていたことと関連するかもしれない。中田遺跡のように沖積地に載る遺跡まで調査が及べば今後0群土器の類例が増えることが予想される。

東北北部型坏の存続時期　羽柴は1群段階に坏の体部や甕の頸部に段が見られるのは「馬淵川流域など他地域の作り手の影響によるもの」（p33）としている。その後、1群土器と2群上器の作り手に断絶を考え、4群段階まで体部や頸部に段を持たない久慈周辺独特の形態を保っていたが、5群段階になって再び周辺地域（羽柴は明言しないがおそらく馬淵川流域と思われる）の影響を受け、「段を有する方向に変化し始めている」（p38）。つまり、久慈周辺の土器は、有段→無段→有段という変遷



第32図　久慈周辺の土器と馬淵川下流域の土器（1）



1・2　板城跡ＳＩ122（宇部1989１図）　3～5　板城跡ＳＩ110（宇部1989１図）　6～9　板城跡ＳＩ111（宇部1989２図）
10～12　板城跡根城跡ＳＩ58（宇部1989６図）　13～15　根城跡ＳＩ221（宇部1989７図）　16源道遺跡Ｌ25住居跡　17・18　中山遺跡２号住居跡
19・20　源道遺跡M10住居跡（羽柴1995第５図）　21・23　丸木橋遺跡２号住居跡（羽柴1995第２図）　22・24　丸木橋遺跡10号住居跡（羽柴1995第３図）
25　源道遺跡Ｉ19住居跡　26・29　源道遺跡M13住居跡（羽柴1995第６図）　27・28・30　丸木橋遺跡８号住居跡（羽柴1995第４図）　31　源道遺跡Ｋ22住居跡
32～35　駒板坂遺跡ⅣＤ34住居（羽柴1995第10図）　36　中長内遺跡ＲＡ532竪穴住居跡（久慈市教委1988第205図）
37～39　中長内遺跡ＲＡ507竪穴住居跡（久慈市教委1988第98・99図）
※（　）内は図版の出典。16・25・31については再実測したものを掲載した。

第32図　久慈周辺の土器と馬淵川下流域の土器（2）

をたどるという。しかし、羽柴自身指摘するように、2群段階においても例えば丸木橋遺跡第2号住居出土土師器坏（第32図21）のように段を有するものがある。また、羽柴が取り上げていない資料だけれども、源道遺跡K22住居跡出土土師器坏（第32図31）は宇部1989がⅢ群の典型資料群とした根城跡SⅠ58出土土器と形態的に非常に類似している（第32図10・11）。すなわち、体部外面の中位に段を持ち（沈線のもの、段を持たないものもあるという）、口縁部が内湾して立ちあがるという形態である。また、器面調整も共通する。10はヨコナデ→ヘラミガキで、31がヨコナデのみでヘラミガキが省略されているという点が相違するが、口縁部にヨコナデを施すという点では同じだし、体部から底部にかけてヘラケズリが施されるという点も共通する。このことから、源道遺跡K22住居跡出土土器を宇部1989編年Ⅱ群に並行する4群に比定したい。また、源道遺跡Ⅰ19住居跡出土土師器坏(1)（第32図25）も注意される。この土器は、丸底で体部の内外両面に段が観察される。段は体部の中位よりやや上にあり、段より上はやや外反して立ちあがっている。内面は全面にヘラミガキが施され、黒色処理されている。外面は口縁部がヨコナデ、段より下がヘラケズリである。全体的な器形は4群とした31と類似し、また器面調整も共通する。しかし、内外両面に段を持ち、口縁部が外反しながら立ちあがるという点では2群土器に近い。つまり、25は2群と4群の間に位置づけられることから、源道遺跡Ⅰ19住居跡出土土器を3群に比定しておく。以上のことが妥当ならば、馬淵川流域で出土する段を有する坏（利部がいう東北北部型坏）が0群から5群まで一貫して久慈周辺に存続していたことになる。すなわち、久慈周辺における2～4群段階では、羽柴のいう「九戸型土師器」（p40）のみが存在していたのではなく、東北北部型坏と並存していたことになる。

年代観の修正　羽柴は自らの年代観について、「馬淵川流域の土師器の年代観が修正されればそれに従って修正される必要がある」としている（p42）。

これは、利部修が馬淵川流域で出土する坏を東北北部型坏とし、その年代を須恵器や須恵器に類似する土師器、東北地方南部や北上川流域の土師器との比較した上で設定しており、八木編年や宇部1989編年の実年代をそれぞれやや遡らせていることと関わるものである（利部1993）。例えば、八木編年A類に分類される二戸市堀野遺跡1号住居出土坏は7世紀第1四半期に、宇部1989編年Ⅱ群に含まれるHI面本平（1）遺跡第39号竪穴住居跡出土坏は7世紀前葉～中葉というように、それぞれ年代が約四半世紀ずつ上げられている。

羽柴が上述のように自らの年代観が変更される余地があることを表明しているのは、依拠している馬淵川流域の土器編年がなお流動的だったからである。久慈周辺で年代の指標となる遺物の出土がない限り、久慈周辺の土器の年代観は馬淵川流域の土器編年に連動せざるを得ない。一方、馬淵川流域の土器の年代観については前項で見たように、近年では宇部が自らの年代観を修正し、例えば7世紀前半から中ごろとしていた1群土器を6世紀後半～7世紀前半と改めるなど、年代観は30年前後遡る傾向にある（宇部2002）。

したがって、こうした馬淵川流域の土器の新しい年代観によれば、羽柴編年もそれにともなって30年前後遡らせる必要がある。すなわち、1群は7世紀前半、2群は7世紀中ごろ、3群は7世紀後半、4群は7世紀末～8世紀初頭、5群は8世紀前半に位置づけられる。とすれば、0群は6世紀後半ということになる。この年代観は、0群に設定した坏と同じ住居から出土した土師器長胴甕の炭素14年代測定結果（体部外面に付着した炭化物を測定したもの）、西暦570±40年とよく符合する。

3　羽柴編年の修正が与える影響

（1）古墳時代後期における久慈琥珀の流通

玉類は古墳の副葬品としては一般的なものである。その材質は多岐にわたるが、その中には琥珀製

のものも含まれる。これらの中には分析が行われ、その産地が同定されているものもある。室賀照子は近畿地方の古墳から出土した琥珀製玉類について、赤外線吸収スペクトルによる産地同定を行っている（室賀1976・1979）。それによれば、京都府城陽市長池古墳・奈良県天理市東大寺山古墳群12号墳（以上室賀1976）、奈良県奈良市富雄丸山２号墳・同広陵町於古墳・同桜井市外鎌山北麓古墳群慈恩寺１号墳（以上室賀1979）から出土した琥珀製玉類が久慈産琥珀を加工したものであるとしている。慈恩寺１号墳が６世紀初頭である以外は６世紀中ごろのものとされており、ここから６世紀にはすでに久慈周辺と近畿地方（おそらく倭王権）とが琥珀を介して交流していたことが窺われる。この交流については、寺村光晴が後の東山道を通して久慈から近畿地方に琥珀が運ばれたとする見解を提示しているが（寺村1982）、その具体相についてはなお不明な点が多い。そもそもこれまで久慈周辺では６世紀に遡る土器がほぼ皆無であったことから、どのような体制で琥珀が採掘されていたのかすら判明していないのである。このような消費地での遺物から活動は推測されるものの、生産地ではそれを示すものがないという状況が長く続いていた。

こうした状況を受けてであろうか、これらの古墳から出土する久慈産とされる琥珀について、池上悟のように７世紀後半以前の久慈周辺における琥珀採取に否定的な見解が出されるようになった（池上1993）。池上は、久慈周辺の古墳時代の様相が不明であること、岩手県下の集落出土の琥珀が奈良時代を遡らないこと、琥珀製玉類が副葬された末期古墳は岩手県下の末期古墳の２％であり、またその時期は大半が７世紀後半以降のものであることから、「本邦最大の産地である久慈の琥珀の利用は、縄文時代にあっては中期以降に周辺地域に流通しているものの、古墳時代にあっては７世紀代に遡るものではない」（p22）としている。また、分析の結果、奈良県曽我遺跡出土の琥珀は久慈・銚子・瑞浪産と判明し、これが最古の例で、以後、６世紀後半の古墳を経て７世紀後半の御坊山３号墳に至る。しかし、久慈周辺の様相から７世紀後半以前の「畿内および他地域への流通は疑問とせざるを得ない」（p23）として、間接的に室賀の見解を否定している。

この池上の見解については、６世紀後半に遡る土器群が久慈周辺で確認された以上、再検討されなければならないだろう。今回の調査では未加工の琥珀塊や加工途中の琥珀玉が検出されたわけではない。ただ、同時期と思われる３号住居の柱穴から琥珀小塊が出土していること、２号住居から鉄製の刀子が出土していることから、当該期において琥珀を採取し加工をおこなっていたことは十分に考えられるのである[2]。したがって、近畿地方の古墳に副葬された琥珀製玉類の産地として久慈を挙げることは不当なことではなかろう。なお、赤外吸収スペクトルなど理化学的分析によって久慈産と判定されたものは少ない。けれども、特に後期古墳に副葬されたものの多くは、現在の産出量からすれば久慈産だった可能性が高いのではないだろうか[3]。

（２）「九戸型土師器」の出現と消滅の意義

羽柴は「九戸型土師器」を幣伊村の「蝦夷」と関わらせて理解している。すなわち、２群～４群において主体を占める頸部や体部に段がない土師器長胴甕・坏を「九戸型土器」とし、現行行政区分の九戸郡に相当する地域に分布することを示した。そして、「九戸型土器」が馬淵川流域の土器とは異なることから、当地域とは「異なった蝦夷集団」が存在していたと推測し、この土器が分布する範囲を幣伊村なのではないかとしている[4]。このことについては異論はない。問題はなぜ突如２群段階で「九戸型土器」が出現したのかということである。

この「九戸型土器」の出現について羽柴は特に触れていないが、２群土器とされている久慈市半沢Ⅰ遺跡ＧⅡ－１住居出土土器や野田村古館山遺跡５号住居出土土器は遺跡内でもっとも遡る土器群で、丸木橋遺跡第１群土器（２群土器に相当）も同様である。このように０・１群土器が出土する源

道遺跡以外で「九戸型土器」が出土する遺跡では、古代においては「九戸型土器」の作り手（あるいは消費者）がその地を初めて占地したと解釈できる。このことは東北北部型竪穴を使用していた人々がある日突然「九戸型土器」を使用するようになったというよりも、どこか別の場所から移ってきたと考えた方が理解しやすい。すなわち、「九戸型土器」が出現した背景には小規模ながらヒトの移動があったのではなかろうか。現段階では「九戸型土器」の系譜がどこにあるのかは不明であるため、「九戸型土器」の出現がヒトの移動に伴うものだとしても、その担い手がどこからやって来たのか明らかにすることはできない。けれども、2群土器の時期、すなわち7世紀中ごろの東北地方南部は関東系土師器や東北地方北部の土器が多く見られ、ヒトの動きが活発だったことが判明している。久慈市周辺のヒトの移動もこのような動きに連動するものだったと考えられよう。

また、「九戸型土器」が周辺地域の土器と融合したのは5群段階＝8世紀前半である。すなわち、「九戸型土器」は7世紀中ごろに出現し、8世紀前半に消滅するのだが、その背景を探る上で参考になるのが次の史料である（『続日本紀』霊亀元年10月丁丑条）。

> また、蝦夷須賀君古麻比留ら言さく、「先祖より以来、昆布を貢献れり。常にこの地にて採りて、年時を闕かさず。今、国府郭下は、あい去ること遠遠く、往還旬を累ねて、甚だ辛苦多し。閇村において便りに郡家を建て、百姓に同じくして、ともに親族を率いて永く貢を闕かざらんことを」とまうす。並びにこれを許す。
>
> 又蝦夷須賀君古麻比留等言、先祖以来、貢献昆布。常採此地、年時不闕。今国府郭下、相去遠遠、往還累旬、甚多辛苦。請、於閇村、便建郡家、同於百姓、共率親族、永不闕貢。並許之。

ここでは「蝦夷」とされる須賀君古麻比留らの願いとして次のようなことが伝えられている。すなわち、古麻比留らは先祖以来閇村で昆布を採取し、欠かすことなく「国府」（仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衙か）に納めてきた。しかし、そこまでの道程は遠く、往還するのに苦労が絶えなかった。そこで、閇村に郡家を建てて、（ほかの地域の）公民と同じようにそこに昆布を納めたい、というものである。

古麻比留らの「先祖」とは斉明朝ごろと考えられているから（例えば伊藤1996：p173）、おおむね7世紀中ごろである。また、古麻比留が建郡を申請したのは霊亀元年（715）であるから8世紀初頭となる。とすれば、羽柴が幣伊村の土器とした「九戸型土器」の存続期間が、古麻比留らの先祖が倭王権に貢献し始めたときから古麻比留らが建郡を申請したときの期間と重なることになる。このことをふまえれば、上の史料を次のように解せないだろうか。

従来、「先祖以来、昆布を貢献れり」とあることから、これまで東北地方太平洋沿岸地域も（日本海沿岸については『日本書紀』に阿倍比羅夫の「北征」記事がある）に「遠征軍が何度か派遣され、（中略）各地の蝦夷集団と接触をはかり、貢納制支配に組み込む施策が推進された」と考えられてきた（熊谷1986：p92）。7世紀代に東北北部の太平洋沿岸地域の諸集団と倭王権との間に貢納関係があったのはおそらく確かだろうが[5]、それが熊谷のいうような「遠征軍」が派遣された結果によるものかどうかは不明である。むしろ、次のように考えれば、「九戸型土器」出現と消滅のあり方を理解しやすいのではないか。すなわち、元来倭王権を貢納関係になかった古麻比留らの「先祖」が、琥珀を媒介とする交通を介していた久慈周辺に移住したことにより、（おそらく最初は）在地集団を介在させて倭王権と接触を図り、以前からの生業である昆布を貢納するようになったのではないか。そして、古麻比留らの「先祖」は移住元の生活様式を維持していたものの、久慈周辺の在地集団と交流を重ねることによって、徐々に融合していき、それが独自の土器様式を保持しない（できない）程度

にまで進んだ段階になって、ようやく「郡家」の設置を申請したのであろう。上記の資料と開伊村の7世紀代の様相を以上のように考えて大過なければ、7世紀代における太平洋沿岸、少なくとも久慈周辺の評価を再検討する必要がある。

すなわち、これまで東北地方北部の太平洋沿岸の諸勢力と倭王権との関係は安定的なものでなかったと評価されるのが一般的だった（今泉1986など）。しかし、少なくとも6世紀後半以後琥珀を介して久慈周辺と倭王権の関係は安定したものだったし、7世紀中ごろに他地域から古麻比留らの先祖が移住して来ても、それは変わらなかったのである。つまり、8世紀中ごろ以前の太平洋沿岸は倭王権との関係という意味で社会的に安定していたと評価できよう。7世紀中ごろから8世紀前半にかけてはそれほど不安定な状況を呈していなかったものと思われるのである。

おわりに

2号住居から出土した土師器坏について検討を加えた。まず、馬淵川流域の土器編年研究について概観し、編年体系自体は変わらないものの、その実年代については遡る傾向にある事を確認した。ついで、久慈周辺の土器編年でほとんど唯一のものである羽柴の研究を概観した。そして、2号住居から出土した土師器坏は羽柴編年では最も古く位置づけられることを確認した。そして、馬淵川流域の土器の実年代が遡っていることに連動し、羽柴編年の実年代も遡らせ、2号住居出土土師器坏の実年代を6世紀後半と考えた。これは、やはり2号住居から出土した土師器甕の体部外面に付着した炭化物の炭素14年代測定によってえられた、西暦570±40年と合致することも確認した。また、羽柴が、久慈周辺の土器は東北北部型坏→「九戸型土器」→東北北部型坏という変遷をたどるとしたことに対して、「九戸型土器」と並存する東北北部型坏がわずかながら見られることから、久慈市周辺においても東北北部型坏は一貫して存在していたのではないかと羽柴編年の若干の修正を試みた。また、年代観についても最古段階だけでなく、その他の群についても馬淵川流域の土器編年と連動させて、それぞれ遡らせた。

こうした土器編年の修正は、単に土器の年代観が変化したということにとどまるものではない。すなわち、久慈周辺における新たな歴史的解釈に道を開くという点で地域史的意義があり、また琥珀を通じた久慈周辺と倭王権との交通関係を再確認させ、そのあり方を具体的に復元させるという点で列島史的意義も見出されるのである。

注

（1）（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1989に第39図80・81として掲載されているものである。その図によれば偏平な平底の坏2個体として表現されている。しかし、実見したところ、これらは接合し同一個体であることが判明したので、1個体として再実測して掲載した（第32図25）。

（2）平城京左京三条四坊十二坪ＳＫ33から出土した琥珀製装飾品の復元を担当した佐々木和久によれば、琥珀を整形するにあたっては「かなり切れ味のよい金属（鉄）製の平刃や切り出し刃など」が用いられたとし、「刃先の調整や手入れがよければ刀子でも整形可能である」としている（佐々木1987）。2号住居からは鉄製の刀子が出土しており、あるいは琥珀塊の粗整形に用いられていたのではなかろうか。なお、1号住居からはかなり使用された砥石が出土している（第26図7）。これは2号住居から出土した刀子などを研ぐために用いられていたと推測される。2つに折れた状態で出土していたが、これはかなり研磨され、砥石自体が割れて薄くなったところに力が加えられたため折れ、廃棄されたものと推測される。かなり使い込まれていたことから、鉄製品はかなり頻繁に研磨されていたのであろう。

（3）未だ理化学的に証明されていないけれども、筆者は中期古墳に副葬されている琥珀製玉類の多くも久慈産なのではないかとひそかに考えている。というのも、北上川中流域では珍しく古墳時代前期までに遡る集落

である岩手県水沢市中半入遺跡の古墳時代中期（5世紀中ごろから同第3四半期）の遺構から久慈産と鑑定された琥珀が出土しているからである（(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2002)。これについて、調査担当者は久慈周辺で同時期の様相が明らかにされていないため、「素材獲得の主体が現地の集団であったのか、本遺跡（中半入遺跡：引用者注）の集団による直接的な入手であったのかは不明である」としている（p370)。確かに5世紀に遡る資料は久慈周辺では得られていないことから、中半入遺跡で出土した琥珀の生産主体をどこに見るかは難しい。ただ、東北北部では土師器文化が受容されるのは6世紀中ごろで、それまでは続縄文文化が維持されていたとする仲田茂司の見解（仲田1997）を参考にすれば、5世紀代の久慈周辺においても、生活の痕跡を見出すのが困難な続縄文文化を担っていた人々が活動していたと推測される。よってここでは、直接琥珀の採掘に携わっていたのは久慈周辺の続縄文文化を担っていた人々と考えておく。ただし、製品に加工し、それを流通するにあたっては倭王権と関係を有していた中半入遺跡の集団の関与も考慮しておく必要があろう。したがって、ここでは5世紀代の久慈における琥珀の採掘は、中半入遺跡の集団とともに在地の人々が行っていたと考えておく。こうして得られた琥珀は中半入遺跡で加工された後、「南方へ」流通したと想定されおり（p376)、おそらく倭王権にもたらされたものと思われる。なお、中半入遺跡では古墳時代後期後半では琥珀の出土が確認されていないが、これは0群土器と並行する時期であり、その点で注意される。推測を重ねれば、久慈周辺の在地の人々が鉄製品を受容し、自ら採掘・加工するようになったため、中半入遺跡で加工が行われなくなったからではなかろうか。

（4）羽柴は「九戸型土器」を製作ないしはそれらを保持した集団を閇伊村としているわけではなく、「九戸型土器」が分布した範囲が閇伊村と重なり合うと考えているようである。

（5）今泉隆雄は閇村の「蝦夷」について、「中央政府との間に十分な支配・隷属関係が形成されていないものたち」だとする（今泉1986：p117)。今泉がそう主張する根拠は、その居住地が「奥地」にあるということである。しかし、どんな「奥地」にあろうと、朝貢を続けてきた古麻比留らおよび彼らの「先祖」をそのように理解するのは不適当であろう。なぜなら、今泉自身、「朝貢と饗給によって、天皇・国家と諸蕃・夷狄との支配と服属の関係が形成され、維持される」（p107）としているからである。古麻比留および彼らの「先祖」が倭王権に「昆布を貢納（たてまつ）」っている限り、「支配と服属の関係が形成され、維持される」のであるから、倭王権との物理的な距離は問題とすべきでなく、古麻比留らと倭王権との関係は朝貢が続けられている限り安定したものだったと評価すべきであろう。

（6）伊藤循は古麻比留らが申請した「郡家」は、「一般の郡とは性格の異なる朝貢のために設置された」、「行政的機能をもたない貢納のセンター」だとする（伊藤1996：p174)。

〈参考・引用文献〉

池上悟　1993「古墳出土の琥珀玉」『立正大学文学部論叢』97

伊藤循　1996「古代国家の蝦夷支配」鈴木靖民編『古代蝦夷の世界と交流』古代王権と交流1　名著出版

今泉隆雄　1986「蝦夷の朝貢と饗給」高橋富雄編『東北古代史の研究』吉川弘文館

宇部則保　1989「青森県における7・8世紀の土師器」『北海道考古学』25

　　2002「東北北部型土師器にみる地域性」市川金丸先生古稀を祝う会編『海と考古学とロマン』

利部修　1993「下藤根遺跡出土土師器の再検討」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』8

熊谷公男　1986「阿倍比羅夫北征記事に関する基礎的考察」高橋富雄編『東北古代史の研究』吉川弘文館

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

　　2002『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第380集

佐々木和久1987「平城京左京三条四坊十二坪出土の琥珀製品とその復元」

　　奈良県文化財調査報告書第52集『平城京左京三条四坊十二坪発掘調査報告』奈良県立橿原考古学研究所

寺村光晴　1982「アンバー・ルートを探る」久慈青年会議所講演要旨

仲田茂司　1997「東北・北海道における古墳時代中・後期土器様式の編年」『日本考古学』4

羽柴直人　1995「岩手県九戸地方のロクロ使用以前の土師器」『(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』15

室賀照子　1976「赤外吸収スペクトルによる琥珀の産地分析」『考古学と自然科学』9

　　1979「奈良県富雄丸山・於・慈恩寺脇本古墳出土の琥珀の科学的研究」『橿原考古学研究所論集』5　吉川弘文館

（追記）脱稿後、樋口知志「蝦夷と太平洋海上交通」（『日本史研究』511号2005年3月）に接した。「古代の蝦夷社会と国家側社会との交流の諸相に注目」（p1）したもので、本稿でも触れている須賀君古麻比留と閇伊村についても関説されているが、その成果を収めることはできなかった。

附編１　中田遺跡出土の火山灰分析

株式会社　京都フィッション・トラック

１　試　　料

分析試料は、平成16年度中田遺跡発掘調査（久慈市大川目町18地内）で検出された２点のテフラ試料である。このうちサンプル１は、ⅣBグリッド付近で採取され、この火山灰の直上面から縄文時代早期（白浜式）の土器片が出土した。一方サンプル２は、古代の２号住居跡から採取された。この火山灰は埋土の上～中位にかけて散発的に混入しているのが観察された。

２　試料の分析方法

以下に処理工程について説明を加える。

（１）前処理

まず半湿状態の生試料を適宜採取秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、２ℓビーカー中で数回水替えしながら水洗し、そののち超音波洗浄を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を濃度1～2%程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗浄水の交換を繰り返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、３段階の篩別(60,120,250mesh）を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120-250mesh（1/8-1/16mm）粒径試料を比重分別処理を加えることなく、封入剤（Nd=1.54）を用いて岩石薄片を作成した。

（２）全鉱物組成分析

前述の封入薄片を用い、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物・岩片・その他の５項目について、１薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数し含有粒子数の量比百分率を測定した。

（３）重鉱物分析

主要重鉱物であるカンラン石（Ol）・斜方輝石（Opx）・単斜輝石（Cpx）・褐色普通角閃石（BHb）・緑色普通角閃石（GHb）・不透明（鉄）鉱物（Opq）・カミングトン閃石（Cum）・ジルコン（Zr）・黒雲母（Bt）・アパタイト（Ap）を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有の少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理による重鉱物の濃集を行うことが多いが、特に火山ガラスに包埋された重鉱物はみかけ比重が減少するため重液処理過程で除外される危険性がある。さらに風化による比重変化や粒径の違いが分析結果に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

（４）火山ガラス形態分類

前処理で作成した検鏡用薄片中に含まれる火山ガラス形態を、吉川（1976）[*1]に準拠してH：扁平型（Ha, Hb）、C：中間型（Ca, Cb）、T：多孔質型（Ta, Tb）に分類した。またこれらの形態に属さないものを、It：不規則型として一括し示した。なお含有率を測定するため200個の粒子を測定した。その過程で着色したものやスコリア質のものおよび亀ノ甲型と呼ばれる特異な形態をもつ火山ガラスの有無もチェックした。さらに火山ガラスの水和現象を観察し、山下・檀原（1995）[*2]に基づき水和（hydration）やスーパーハイドレーション（super hydration）の程度についても可能な限り半定量的に記載した。

（５）火山ガラスの屈折率測定

前処理により調製された120-250mesh（1/8-1/16mm）粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置（RIMS）*3,4 を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として1試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラスの含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

温度変化型屈折率測定法*5 は火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた浸液温度と屈折率の換算温度から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法である。

具体的な測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ、以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名（Scrics およびSample Name）が表示され、次に測定者名、Materialは対象鉱物名、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。カッコ内の式は浸液温度tから浸液の屈折率を算出するのに用いたものである。

測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。count,min,max,rangc,mean,st.dev,skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。＊1つが1個の火山ガラス片の測定結果を示す。

（6）鉱物の屈折率測定

基本的には火山ガラスの屈折率と同様な操作を経て測定作業を行うが、鉱物の屈折率測定は光学的方位をチェックする必要がある点で大きく異なっている。今回の測定は、屈折率値の精度を高めるため30結晶の測定を目指しているが、含有結晶量が少ない場合にはそれ以下になる場合もある。対象鉱物は斜方輝石（Opx）で、鎌田・檀原（1994）*6 に準じ対象鉱物片の屈折率を測定した。

具体的な測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ、以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名（Series およびSample Name）が表示され、次に測定者名、Materialは対象鉱物名、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。カッコ内の式は浸液温度tから浸液の屈折率を算出するのに用いたものである。

測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。count,min,max,range,mean,st.dev,skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ鉱物片の個数が表現される。＊1つが1個の鉱物片の測定結果を示す。

3　測定結果

本試料の測定結果の詳細は、テフラ分析結果表に一括される。そのうち屈折率測定結果については巻末に顕微鏡写真とともに添付されており、詳しく検討される場合にご利用いただきたい。

さて今回行ったすべての測定結果から試料テフラの岩石記載的特長をまとめると、以下のようになる。

3－1　サンプル1

本試料は、火山ガラス・斜長石・不透明（鉄）鉱物・斜方輝石（Opx）・単斜輝石（Cpx）を含む結晶質軽石火山灰である。火山ガラスは透明な軽石質のもののみからなり、比較的高い屈折率n＝1.5135-1.5174（モード1.516）をもつ。斜方輝石の屈折率は γ＝1.706-1.712（モード1.709-1.710）である。

3－2　サンプル2

本試料は、主に軽石型の火山ガラスを主とするガラス質火山灰である。ただし火山ガラスは軽石型のみだけでなく、非常に薄いバブル・ウォール型のものやブロック状の不規則な形状をした黒曜石片も含まれる。それらの屈折率値の分布は複雑で、最頻値がn＝1.494、1.506、1.511、1.522の4つ存在することが明らかである。それに対し、斜方輝石の屈折率値はやや分散気味ながらγ＝1.706-1.707に最も大きなモードをもち、全体として比較的よいまとまりを示す。重鉱物組成は不透明（鉄）鉱物・斜方輝石・単斜輝石を主とし、少量の角閃石も含まれる。

4　考察（テフラ層の同定）

分析試料2点は互いに異なる岩石記載的特徴をもつテフラであり、その特徴から同定が可能と考えられる。

4－1　サンプル1

前述の岩石記載的特性のうち火山ガラスと斜方輝石の屈折率測定値は特徴があり、新編火山灰アトラス（町田・新井,2003）中の記載テフラを検討すると、十和田南部（To-Nb）テフラ（8.6Ka）が最もよく適合し、対比されるものと判断する。似たテフラとして十和田中掫（To-Cu,6Ka）もあるが、火山灰アトラス中の屈折率は火山ガラスn＝1.510-1.514（モード1.511-1.513）、斜方輝石がγ＝1.704-1.708（モード1.707）でともにTo-Nbの値より低く、識別が可能である。

4－2　サンプル2

火山ガラスの卓越する本試料の特徴は、火山ガラスの分析値に最もよく反映されている。前述のように火山ガラスの屈折率には4つのモードが明瞭に看取される。うち屈折率の小さい2つのモード・ピークn＝1.494、1.506は十和田a（To-a）によく対応する。また含有率は低いが屈折率値の高い2つのモード・ピークn＝1.511、1.522はきわめて特徴的であり、白頭山苫小牧（B-Tm）のみに対比される。本試料中の軽鉱物は主として斜長石（pl）だが、少量ながら新鮮なアルカリ長石（af）の含有が確認されており、少量のB-Tmテフラの混入は間違いないものと考える。

したがって本試料は十和田a（To-a）テフラ（AD915）と同定され、その中に少量の白頭山苫小牧（B-Tm）テフラ（10世紀）が混入するものと判断する。

以　上

（参考文献）

＊1　吉川周作（1976）：大阪府都中の火山灰層について。地質学雑誌,82（8）、479-515.

＊2　山下透・檀原徹（1995）：火山ガラスのhydrationとsuper hydration-日本の広域テフラについて-。　フィッション・トラックニュースレター第8号、41-46.

＊3　横山卓雄・檀原徹・山下透（1986）：温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定。　第四紀研究,25（1）、21-30.

＊4　Danhara T.,Yamashita T.,Iwano H. and Kasuya M.（1992）：An improved system formeasuring refractive index using the thermal immersion method.　Quaternary International,13/14,89-91.

＊5　檀原徹（1993）：温度変化型屈折率測定法.日本第四紀学会編,第四紀試料分析法2.研究対象別分析法.149-157.東京大学出版会.

＊6　鎌田清毅・檀原徹・林田明・星住英夫・山下透（1994）：中部九州の今市火砕流堆積物と類似火砕流堆積物の対比および噴出起源の推定.地質学雑誌,100（4）、279-291.

＊7　町田洋・新井房夫（2003）：新編火山灰アトラス.東京大学出版会.

なお温度変化型屈折率測定装置ＲＩＭＳ™と測定方法は、PAT.1803336.1888831で特許登録および商標登録されています。

3　測定結果

テ フ ラ 分 析 結 果 表

分析試料名：1、サンプル1、ⅣBグリッド付近

全 鉱 物 組 成

火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	岩片	その他	合計	備考
86	67	43	2	2	200	火山gl：珪長質pm型のみ。十和田南部（To-Nb）テフラ。 軽鉱物：plのみ。 重鉱物：Opq,Opx,Cpx主。Ap少量。 岩　片：gl質で火砕物起源。　　その他：風化粒子。
67.0	33.5	21.5	1.0	1.0	124.0	

bw：バブルウォール、pm：軽石、sco：スコリア、pl：斜長石、Qz：石英、Kf：カリ長石,chal：カルセドニー

重 鉱 物 分 析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
—	81	35	—	1	82	—	—	—	1	200	ほぼすべての鉱晶に火山glが付着。ただしGHbにはglは付着せず、風化も進んでいないため外来結晶と判断される。
0.0	40.5	17.5	0.0	0.5	41.0	0.0	0.0	0.0	0.5	100.0	

Ol：カンラン石、Opx,Cpx：斜方、単斜輝石、BHb,GHb：緑色・褐色角閃石、Opq：不透明鉱物、
Cum：カミングトン閃石、Zr：ジルコン、Bt：黒雲母、Ap：アパタイト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備考
—	—	4	—	182	14	—	200	—	珪長質pm型のみ
0.0	0.0	2.0	0.0	91.0	7.0	0.0	100		

H：扁平、C：中間型、T：多孔質、It：不規則型、incl：インクルージョン、devt：失透化、RI：屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range) 最小	屈折率範囲 (range) 最大	屈折率平均値 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
1.4979	1.4979	1.4979	1	—	鉱物に付着
1.5136	1.5174	1.5158	65	1.516	T,C,鉱物に付着

鉱物の屈折率測定

屈折率範囲 (range) 最小	屈折率範囲 (range) 最大	屈折率平均値 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	鉱物の種類 Opx
1.706	1.712	1.709	62	1.707—1.710	ハイパーシン

斜方輝石：劈開片上での最大屈折率n2≒γ、角閃石n2(β＜n2＜γ)。
斜長石：劈開片上での最小屈折率n1（α＜n1＜β）

テ フ ラ 分 析 結 果 表

分析試料名：2、サンプル2　2号住居跡

全 鉱 物 組 成

火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	岩片	その他	合計	備考
189	6	3	3	—	200	火山gl：珪長質pm>bw型,黒曜石片（It型）。十和田a（To-a）テフラ主。少量の白頭山苫小牧（B-Tm）テフラ混在。 軽鉱物：pl主。少量のアルカリ長石（af）含む。 重鉱物：Opq,Opx,Cpx。岩片：gl質で火砕物起源。その他：—。
67.0	3.0	1.5	1.5	0.0	73.0	

bw：バブルウォール、pm：軽石、sco.：スコリア、pl：斜長石、Qz：石英、Kf：カリ長石,chal：カルセドニー

重 鉱 物 分 析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
—	27	19	—	4	28	—	—	—	1	78	GHbはglが付着せず風化激しい。 →外来結晶の可能性大。
0.0	34.6	24.4	0.0	5.1	35.9	0.0	0.0	0.0	0.5	100.0	

Ol：カンラン石、Opx,Cpx：斜方、単斜輝石、BHb,GHb：緑色・褐色角閃石、Opq：不透明鉱物、
Cum：カミングトン閃石、Zr：ジルコン、Bt：黒雲母、Ap：アパタイト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備考
3	11	50	2	25	71	38	200	—	珪長質pm型主。他に黒曜石片からなるブロック状のIt型やpm型glと同時と判断されるbw型glも含む。
1.5	5.5	25.0	1.0	12.5	35.5	19.0	100		

H：扁平、C：中間型、T：多孔質、It：不規則型、incl：インクルージョン、devt：失透化、RI：屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range) 最小	屈折率範囲 (range) 最大	屈折率平均値 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
1.4925	1.4972	1.4943	29	1.494	T,It,C,H,　←To-a
1.5018	1.5082	1.5053	40	1.505	C,T,H,　←To-a
1.5095	1.5116	1.5106	6	1.511	C,H,T,　←B-Tm
1.5207	1.5229	1.5221	6	1.522	C,H,T,　←B-Tm

鉱物の屈折率測定

屈折率範囲 (range) 最小	屈折率範囲 (range) 最大	屈折率平均値 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	鉱物の種類 Opx
1.699	1.699	1.699	2	—	ブロンザイト
1.702	1.712	1.707	61	1.706-1.707	ハイパーシン　←To-a

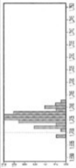
斜方輝石：劈開片上での最大屈折率n2≒γ、角閃石n2(β＜n2＜γ)。
斜長石：劈開片上での最小屈折率n1（α＜n1＜β）

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

テフラ分析2試料

DATE:2004-10-30

試料到着:2004-10-19　処理完了:2004-10-10　火山ガラス屈折率測定完了:2004-10-29　鉱物屈折率測定完了:2004-10-30

通番	試料名	屈折率頻度分布 火山ガラス（VG）n	屈折率頻度分布 斜方輝石（Opx）γ	含有・測定数・屈折率範囲 火山ガラス（VG）n min-max(mode)〈shards〉type	含有・測定数・屈折率範囲 斜方輝石（Opx）γ min-max(mode)〈shards〉type	類似テフラ	備考
1	中田遺跡 サンプル1			含有:C(43%);測定数:66 1.498<1>付着 1.514-1.517(1.516)<65>T,C,付着	含有:R(9)→75粒子;測定数:62 1.706-1.712(1.710)<62>hypersthene	To-Nb?	全鉱物:ガ,軽,重>他 重鉱物:Opq,Opx,Cpx>GHb,Ap 軽鉱物:Pl その他:岩片,風化粒 火山ガラス:Ta>Tb,Ca 水和層厚<1〜2μが主 斜方輝石:火山ガラス付着
2	中田遺跡 サンプル2			含有:VA(94%);測定数:81 1.493-1.497(1.494)<29>T,It,C,H 1.502-1.508(1.506)<40>C,T,H 1.510-1.512(1.511)<6>C,H,T 1.521-1.523(1.522)<6>C,H,T	含有:WR(0.5%)→35粒子;測定数:63 1.699<2>bronzite 1.702-1.712(1.706-1.707)<61>hypersthene	To-a が主 B-Tm 微量	全鉱物:ガ>軽,重,他 重鉱物:Opq,Opx,Cpx>GHb 軽鉱物:Pl>Af その他:岩片 火山ガラス:Tb,Ca,It,Ta>Hb,Ha,Cb 水和未了(淡褐色,内部に高屈折率部含む) と水和層厚3-5μmが主 斜方輝石:火山ガラス付着微量

保存用試料一覧表

No.	試料名	処理生試料乾燥重量（g）	篩別試料重量（g）			色調判定	備　考
			＞1/4mm	1/4-1/8mm	1/8-1/16mm		
1	サンプル1	8.95	1.75	0.51	0.30		
2	サンプル2	11.4	0.54	0.69	0.74		

注：※（1）表中の数字は保存試料の重量を示す。
（2）1/8-1/16段階の保存試料は、一部岩石薄片作成に使用したため実際よりわずかに少なくなっている。
（3）色調判定は、新版標準土色帳（農林水産省水産技術会議事務局監修、1970）による。

火山ガラスの屈折率判定結果一覧表

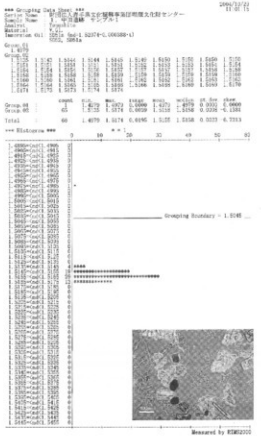
No.	試料名	屈折率範囲[1]		屈折率平均値[2]	測定個体数[3]	屈折率最頻値[4]	火山ガラス形態[5]	備　考[6]
		最小	最大					
1	中田遺跡 サンプル1	1.4979 1.5135	1.4979 1.5174	1.4979 1.5158	1 65	— 1.516	付着 T,C,付着	含有：C 水和層厚0.5～2μm 重鉱物： Op q、Opx、CpX>GHb、Ap Opxに火山ガラス付着
2	中田遺跡 サンプル2	1.4925 1.5018 1.5095 1.5207	1.4972 1.5082 1.5116 1.5229	1.4973 1.5053 1.5106 1.5221	29 40 6 6	1.494 1.506 1.511 1.522	T,It,C,H C,T,H C,H,T C,H,T	含有：VA 水和完了、但し内部不均一 水和層厚3-5μmが主 水和層厚1-2μm微量 重鉱物：Opq、Opx、Cpx、GHb

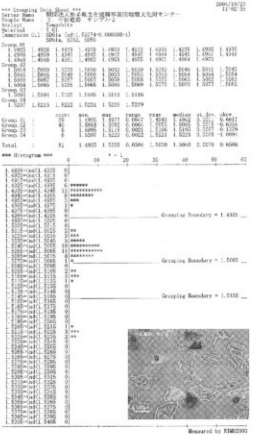
1）屈折率範囲：固体ごとの屈折率測定値を小数点第4位まで表示する。ヒストグラム上で完全に分離され、異なるグループとみなされるものは、グループごとに表示する。未水和部の測定値には下線を付す。
2）屈折率平均値：同一グループに属するとみなした場合の平均屈折率値。下線は未水和部の値。
3）測定個体数：測定対象とした個体数。
4）屈折率最頻値：ヒストグラム中で最頻値を判断し、四捨五入により小数点第3位で表示する。
（ex.1.500≦1.4995≦nd＜1.5005）
5）火山ガラス形態：吉川（1976）に準拠し、形態をH：羊羹型、C:中間型、T：多孔質型に分け、定性的に示す。いずれにも属さないものをIt：不規則型、鉱物表面に付くものを表示する。
6）備　　考：火山ガラス含有、水和の程度を定性的に示す。また、その試料固有の特徴について示す。
火山ガラス含有は、VA（≧90%）、A（≧50%）、C（≧10%）、R（≧5%）、VR（≧1%）、VVR（＜1%）、N（0%）の7段階に分類する。

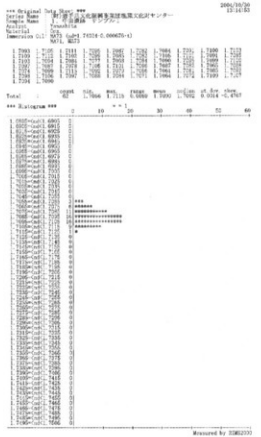
斜方輝石の屈折率測定結果一覧表

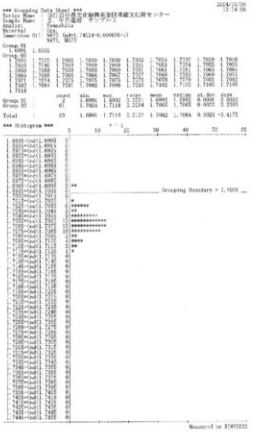
No.	試料名	屈折率範囲[1]		屈折率平均値[2]	測定個体数[3]	屈折率最頻値[4]	鉱物の種　類[5]	備　考[6]
		最小	最大					
1	中田遺跡 サンプル1 斜方輝石 （Opx）	1.706	1.712	1.709	62	1.709— 1.710	ハイパーシン	γ（＝n_2）
2	中田遺跡 サンプル2 斜方輝石 （Opx）	1.699 1.702	1.699 1.712	1.699 1.707	2 61	— 1.706— 1.707	プロントザイト ハイパーシン	γ（＝n_2）

1）屈折率範囲：個体ごとの屈折率測定値を四捨五入し、小数点第3位までで表示する。
その際グループが異なるとみなされるものは、グループごとに表示する。
2）屈折率平均値：同一グループに属するとみなした場合の個体ごとの平均屈折率値。小数点第3位まで表示。
3）測定個体数：測定対象とした個体数。
4）屈折率最頻値：ヒストグラム中で最頻値を判断し、四捨五入により小数点第3位で表示する。
（ex.1.500≦1.4995≦nd＜1.5005）
5）鉱物の種類：都城・久城（1972）に準拠し、斜方輝石はエンスタタイト、プロンザイト、ハイパーシン、フェロハイパーシン、ユーライト、フェロシライトの6種類に分類する。角閃石はホルンブレンド、カミングトナイト等に分類する。斜長石はアルバイト、オリゴクレイス、アンデシン、ラブラドライト、バイトウナイト、アノーサイトの6種類に分類する。
6）備　　考：測定対象とする屈折率を示す。例えば、斜方輝石はγ、角閃石はn_2、斜長石はn_1を対象とする。



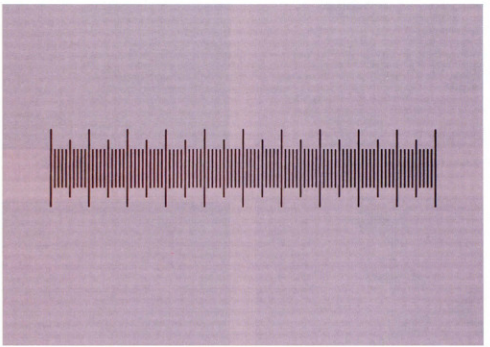






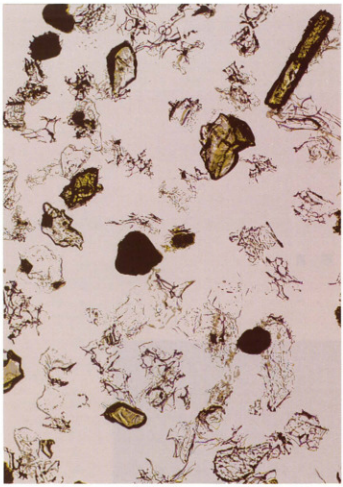
火山ガラス屈折率データシート（上）・鉱物片の屈折率測定データシート（下）

顕微鏡写真



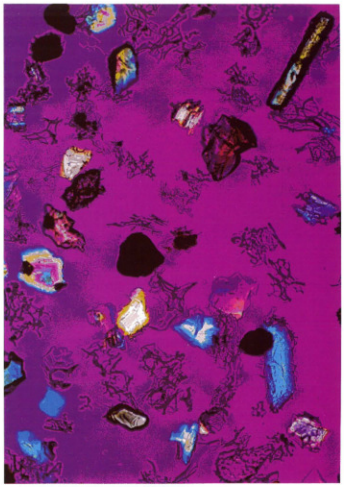
Scale　×100，最小目盛＝0.01㎜

Open ncol



サンプル1（ⅣBグリッド付近）

Sensitive color (Cross nicol+gypsum test plate)



同　左

サンプル2（2号住居跡）

同　左

附編２　中田遺跡出土の炭化材同定

株式会社　加速器分析研究所

岩手県久慈市中田遺跡の第２号竪穴住居より出土した土器片に付着した炭化物および住居床面から出土した炭化材の分析・鑑定を以下の手順に従い行った。

〔処理法〕

1　メス、ピンセットを用いて適量を採取した。この際、付着していた土をできるだけ除去した。木炭については、内部より採取した。

2　１Nの塩酸を用いて、80℃で数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈した。

3　0.001～１Nの水酸化ナトリウム水溶液を用いて数時間処理した。その後、超純水で中性になるまで希釈した。

4　１Nの塩酸を用いて、80℃で数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈した。

5　試料を80℃で乾燥させた。

6　試料を１ｇの酸化銅と共に、外径９㎜、長さ30cmの石英管に入れ、真空下で封じ切った。

7　６を500℃30分、850℃２時間で加熱し、試料中の炭素を二酸化炭素にした。

8　真空ライン中で冷媒を用いて、二酸化炭素を精製した。

9　精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイトにした。

10　得られたグラファイトを、内径１㎜のアルミニウム製の容器にハンドプレス機で詰め、ターゲットとした。

〔測定〕

1　測定機器は、134試料装填可能なイオン源が設置された、３MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。

2　AMS測定時には、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定では加速器により測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

3　付記した誤差は、標準偏差（１σ）に相当する年代で、次のように算出する。
複数回（通常は４回）の測定値についてχ^2検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差としている。

4　$\delta^{13}C$の値は通常、質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合、同時に測定される$\delta^{13}C$の値をもちいることもある。
δ13C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。
同位体比はいずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - ^{14}A_R)/^{14}A_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - ^{13}A_{PDB})/^{13}A_{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：（$^{14}C/^{12}C$）Sまたは（$^{14}C/^{13}C$）s
$^{14}A_S$：標準現代炭素の^{14}C濃度：（$^{14}C/^{12}C$）Sまたは（$^{14}C/^{13}C$）s
$\delta^{13}C$は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = ^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレ

ムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算する。

但し、IAAでは加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$も測定しているので、標準試料の測定値との比較から算出した$\delta^{13}C$を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、$\Delta^{14}C$は、試料炭素が$\delta^{13}C=-25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$14A_N$）に換算した上で計算した値である。（1）式の^{14}C濃度を、$\delta^{13}C$の測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_K=^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))$　2（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき）

または

$=^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))$（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき）

$\Delta^{14}C=[(^{14}A_K-^{14}A_R)/^{14}A_R]\times1000$（‰）

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、$\Delta^{14}C$との関係は次のようになります。

$\Delta^{14}C=(pMC/100-1)\times1000$（‰）

$pMC=\Delta^{14}C/10+100$（%）

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$T=-8033\times\ln[(\Delta^{14}C/1000)+1]$

$=-8033\times\ln(pMC/100)$

〔放射性炭素年代算出法〕

1　加速器を用いて微量炭素の同位体比分析を行う。

2　定量は^{14}C測定の標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）を用いている。

3　放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。

4　暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.1 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与え計算を行っている。

〔測定結果について〕

今回測定した2つの試料が同一遺構からのサンプルであるにもかかわらず、年代が異なるのはそれぞれの試料の炭素が大気中から固定された年代であり、その固定された年代が今回の測定結果になるためである。従って、試料自体が同一のものではないため、年代値に若干の誤差があるが、今回の測定結果では年代値に対する誤差及び$\delta^{13}C$値を考慮すると同一時代（時期）のものであると判断できる。

IAA Code No.	試　　料	BP年代および炭素の同位対比	
IAAA－40986 ＃654－1	試料採取場所：岩手県久慈市中田遺跡 試料形態：炭化物 試料名（番号）：1　土器付着炭化物	Lobby Age（yrBP）	：1,380±40
		$\delta_{13}C$（‰）、（加速器）	＝－26.47＋0.95
		$\Delta_{14}C$（‰）	＝－158.0±3.7
		pMC（%）	＝84.20±0.37
	（参考）$\delta_{13}C$の補正なし	$\delta_{14}C$（‰）	＝－160.5±3.4
		pMC（%）	＝83.95±0.34
		Age（yrBP）	：1,410±30
IAAA－40987 ＃654－1	試料採取場所：岩手県久慈市中田遺跡 試料形態：炭化物 試料名（番分）：2　土器付着炭化物	Libby Age（yrBP）	：1,440±30
		$\delta_{13}C$（‰）、（加速器）	＝－24.24±0.74
		$\Delta_{14}C$（‰）	＝－161.3±3.4
		pMC（%）	＝83.57±0.34
	（参考）$\delta_{13}C$の補正なし	$\delta_{14}C$（‰）	＝－163.0±3.1
		pMC（%）	＝83.70±0.31
		Age（yrBP）	：1,430±30

写真図版

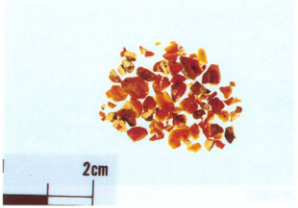
遺跡遠景（南側から撮影）

調査区全景（真上から撮影）

写真図版1　空中写真（1）

基本土層（B区南東壁）

縄文土器出土状況



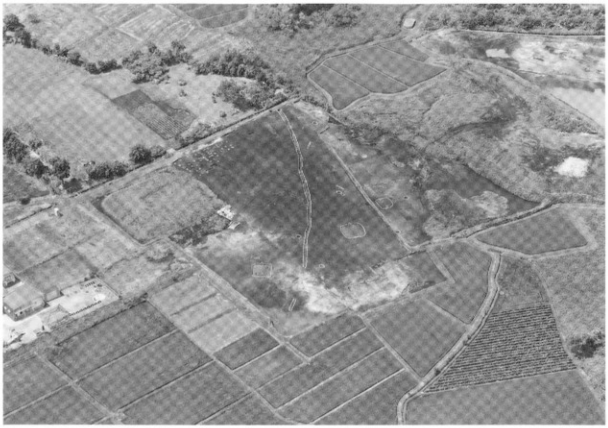
琥珀（A区2号溝検出面より出土）

琥珀（3号竪穴住居跡埋土より出土）

竪穴住居跡から出土した土器

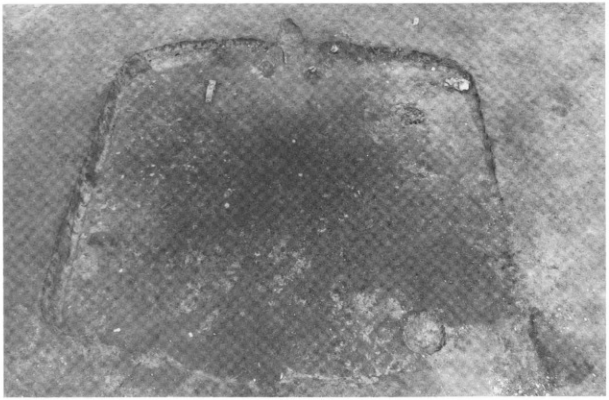
写真図版2　基本土層、縄文土器出土状況、出土遺物

遺跡遠景（A区、東側から撮影）

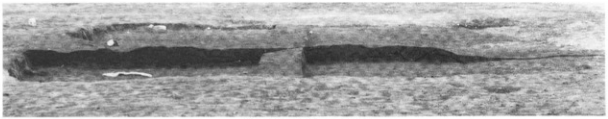


遺跡遠景（B区、南東側から撮影）

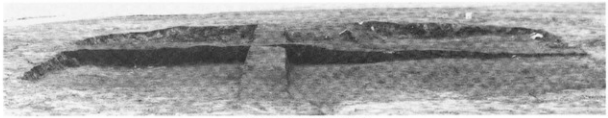
写真図版3　空中写真（2）



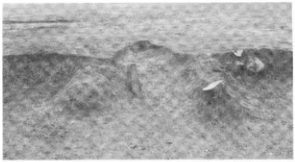
1号竪穴住居跡（平面）



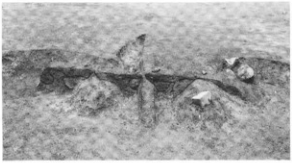
堤土断面（NW-SEベルト）



堤土断面（SW-NEベルト）



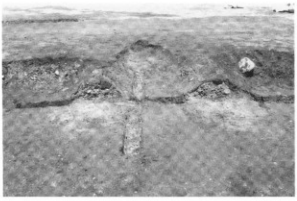
カマド（燃焼部側から斜方向で撮影）



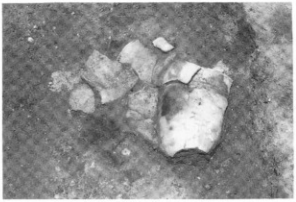
カマド断面（袖部・燃焼部）

写真図版4　1号竪穴住居跡（1）

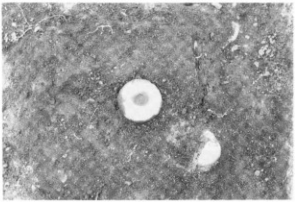
カマド断面（煙道部～燃焼部）



カマド断ち割り（袖部・燃焼部）



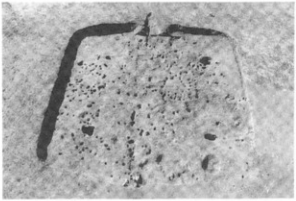
遺物出土状況①（No.4　甕）



遺物出土状況②（No.6　土製紡錘車）

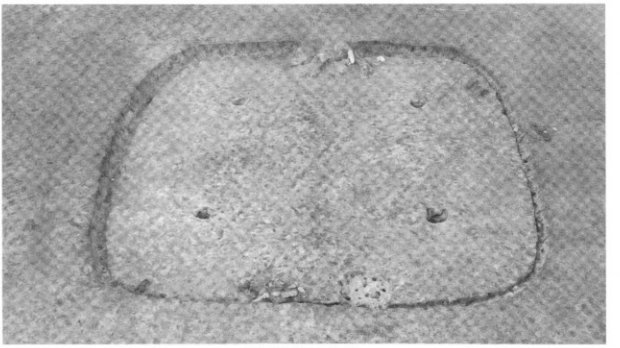
P1（断面）

P3（断面）

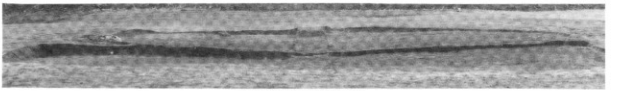


完掘

写真図版5　1号竪穴住居跡（2）



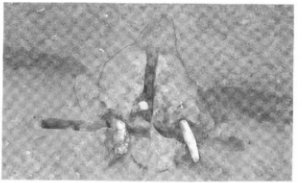
2号竪穴住居跡（平面）



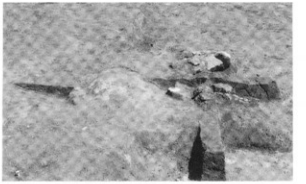
埋土断面（SW-NEベルト）

カマド検出状況①

カマド検出状況②

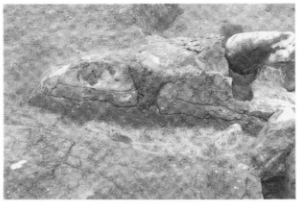


カマド検出状況③



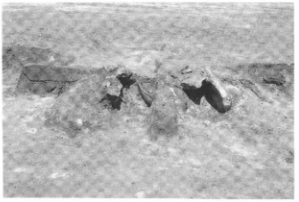
カマド煙道部～燃焼部（断面）

写真図版6　2号竪穴住居跡（1）



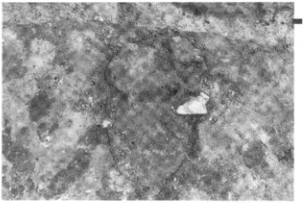
カマド燃焼部（断面）

カマド煙道部（断面）

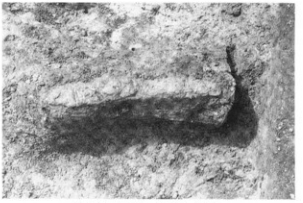


カマド袖部・燃焼部（断面）

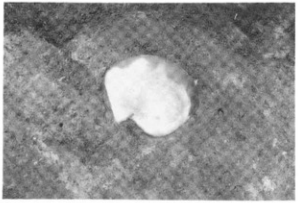
カマド袖部・燃焼部（断ち割り）



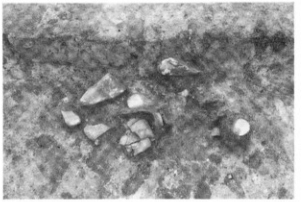
焼土（平面）



遺物出土状況①（No.16　刀子）

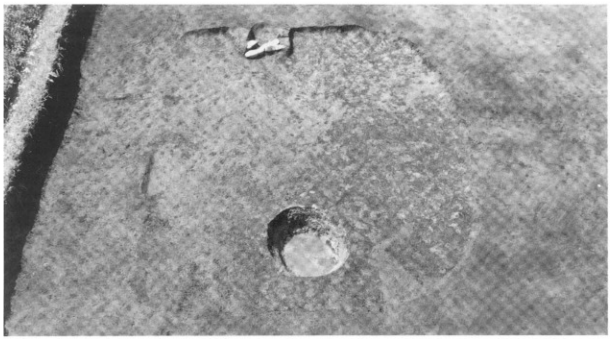


遺物出土状況②（No.10　坏）

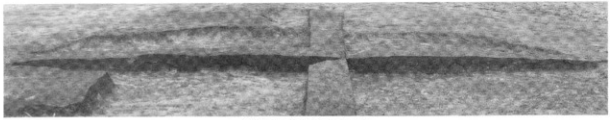


遺物出土状況③（土器・石器）

写真図版7　2号竪穴住居跡（2）

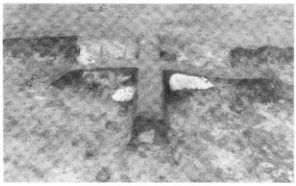


3号竪穴住居跡（平面）



壁土断面（SE-NWベルト）

カマド（平面）

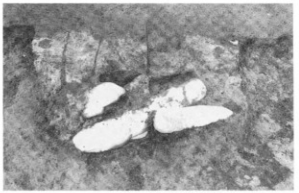


カマド断面（袖部・燃焼部）

カマド断面（燃焼部）

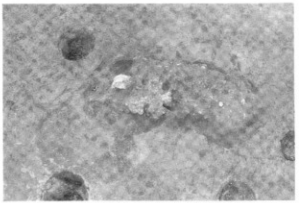
カマド燃焼部断ち割り

写真図版8　3号竪穴住居跡（1）

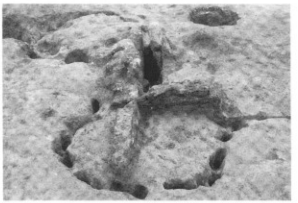


カマド袖部・燃焼部断ち割り

3号竪穴住居跡（完掘）



1号焼土（平面）

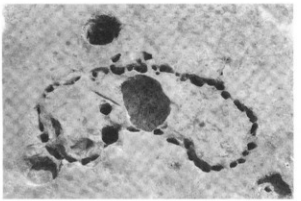


1号焼土（断面・E-Wベルト①）

1号焼土（断面・E-Wベルト②）

1号焼土（断面・N-Sベルト①）

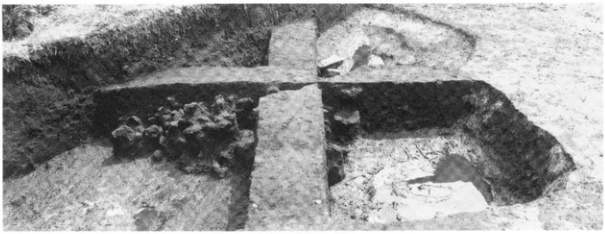
1号焼土（断面・N-Sベルト②）



1号焼土（完掘）

写真図版9　3号竪穴住居跡（2）、1号焼土

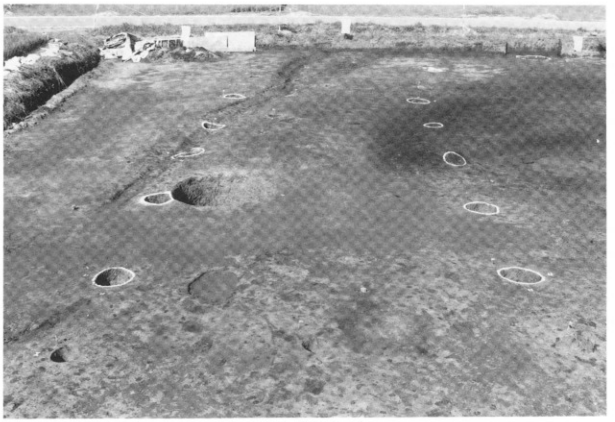
1号竪穴状遺構（平面）



断面（N-Sベルト）

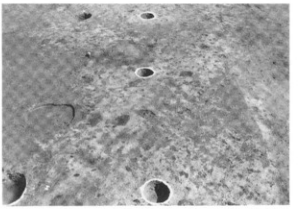
断面（W-Eベルト）

写真図版10　1号竪穴状遺構

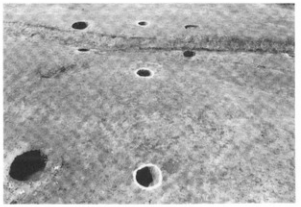


1号掘立柱建物跡（平面）

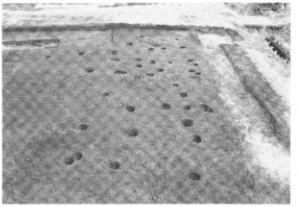
2号柱穴列（平面）



3号柱穴列（平面）



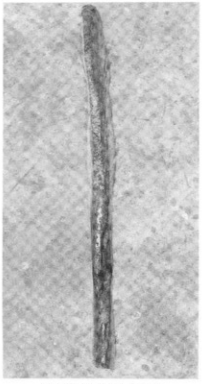
4号柱穴列（平面）

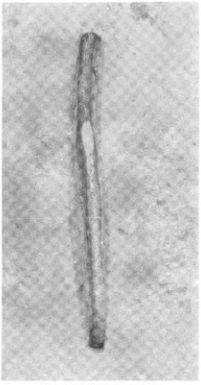


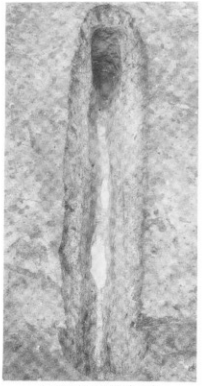
B区柱穴群

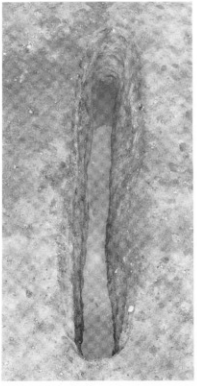
写真図版11　1号掘立柱建物跡、柱穴列

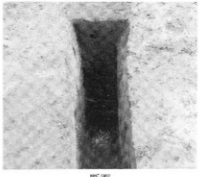
写真図版12　1号～4号陥し穴状遺構

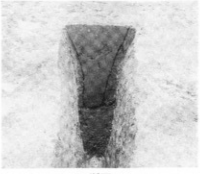

4号陥し穴状遺構（平面）

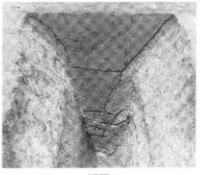

3号陥し穴状遺構（平面）

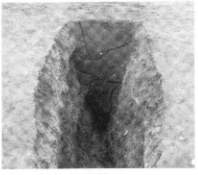

2号陥し穴状遺構（平面）

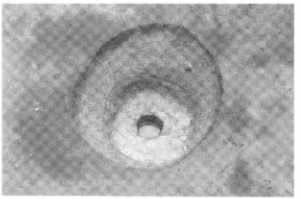

1号陥し穴状遺構（平面）


断面

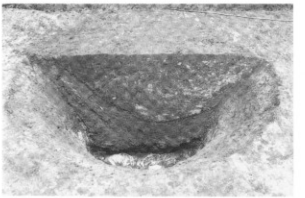

断面


断面

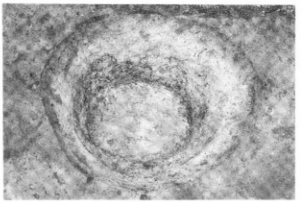

断面



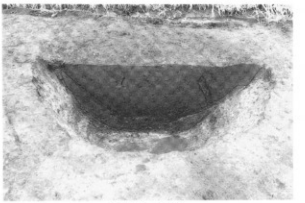
5号陥し穴状遺構（平面）



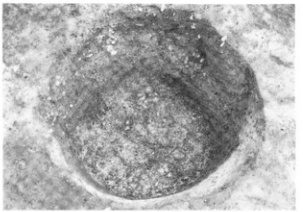
5号陥し穴状遺構（断面）



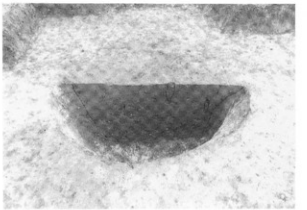
1号土坑（平面）



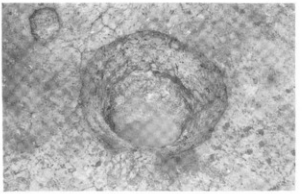
1号土坑（断面）



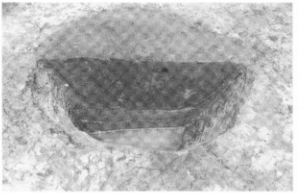
2号土坑（平面）



2号土坑（断面）

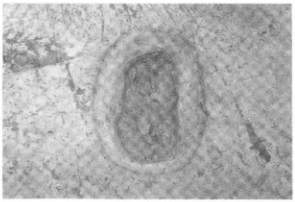


3号土坑（平面）

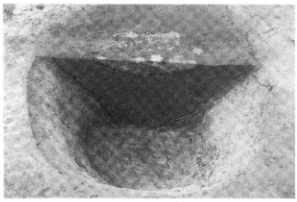


3号土坑（断面）

写真図版13　5号陥し穴状遺構、1号～3号土坑

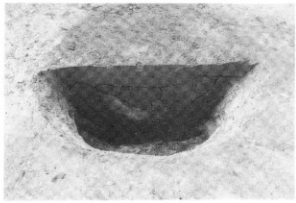


4号土坑（平面）

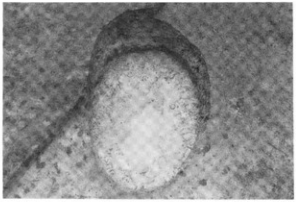


4号土坑（断面）

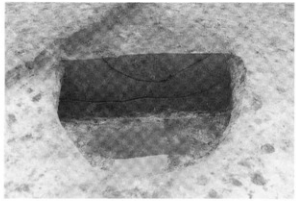
5号土坑（平面）



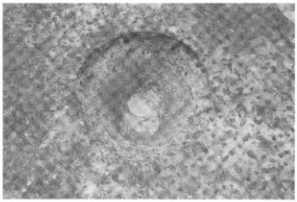
5号土坑（断面）



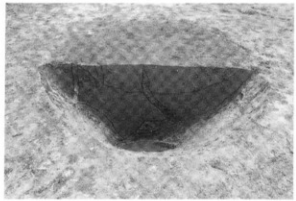
6号土坑（平面）



6号土坑（断面）

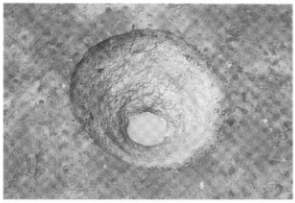


7号土坑（平面）

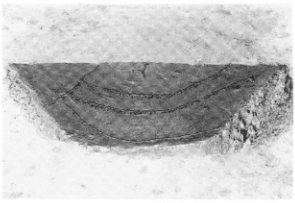


7号土坑（断面）

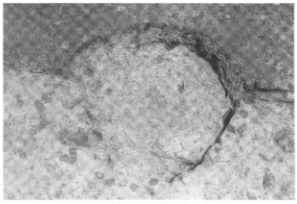
写真図版14　4号～7号土坑



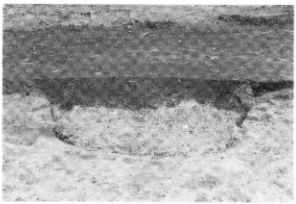
8号土坑（平面）



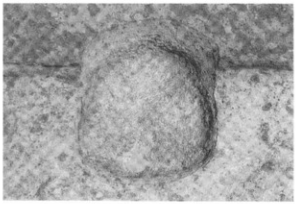
8号土坑（断面）



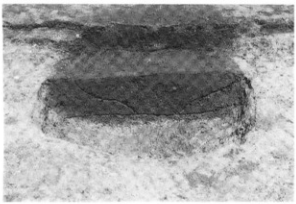
9号土坑（平面）



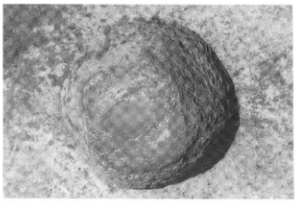
9号土坑（断面）



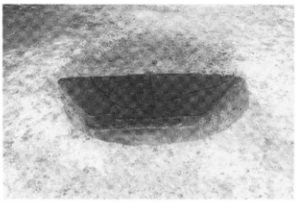
10号土坑（平面）



10号土坑（断面）

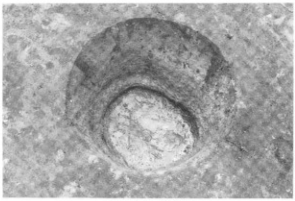


11号土坑（平面）

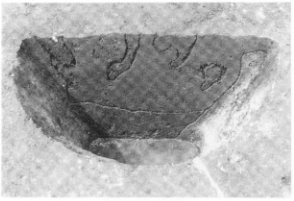


11号土坑（断面）

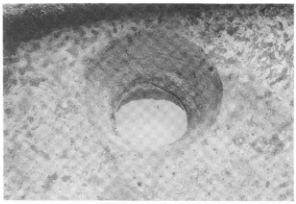
写真図版15　8号～11号土坑



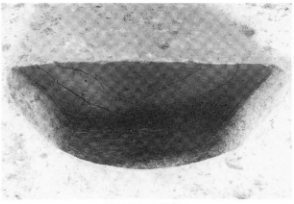
12号土坑（平面）



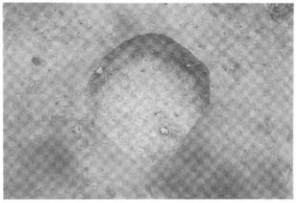
12号土坑（断面）



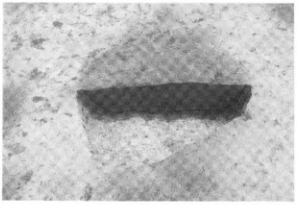
13号土坑（平面）



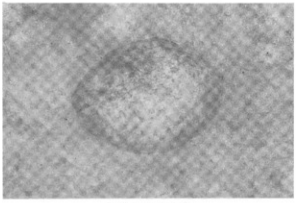
13号土坑（断面）



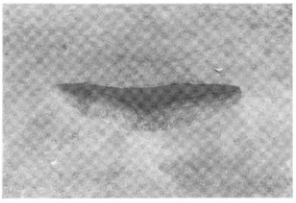
14号土坑（平面）



14号土坑（断面）

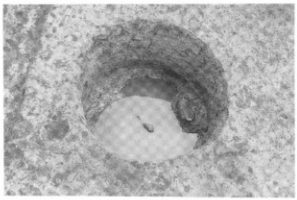


15号土坑（平面）

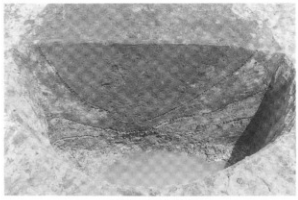


15号土坑（断面）

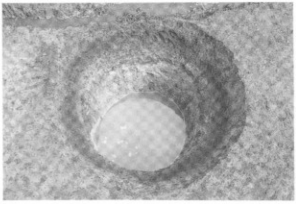
写真図版16　12号～15号土坑



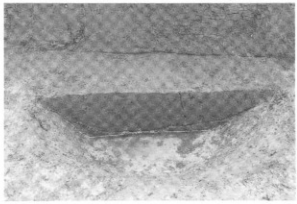
17号土坑（平面）



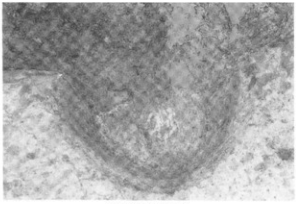
17号土坑（断面）



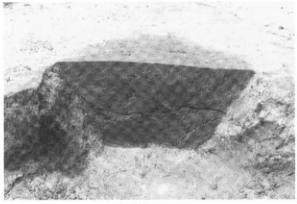
18号土坑（平面）



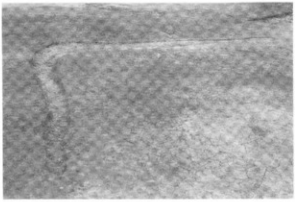
18号土坑（断面）



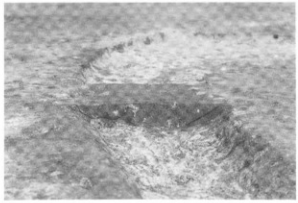
19号土坑（平面）



19号土坑（断面）

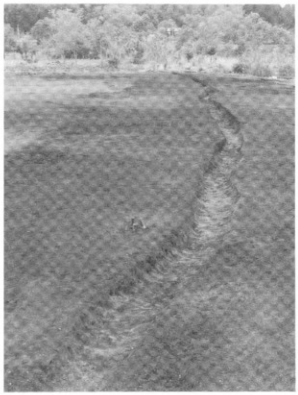


3号溝（平面）

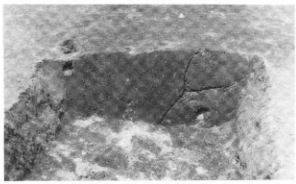


3号溝（断面）

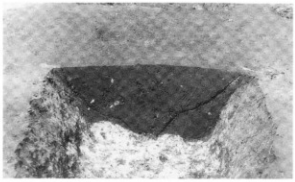
写真図版17　16号～19号土坑、3号溝



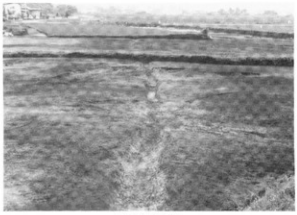
1号溝（平面）



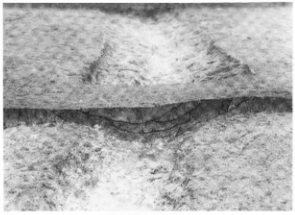
1号溝（断面①）



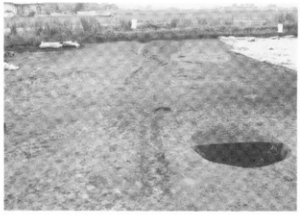
1号溝（断面②）



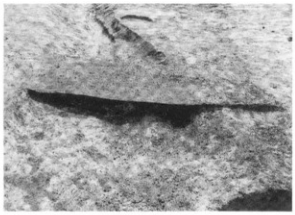
2号溝（平面）



2号溝（断面①）

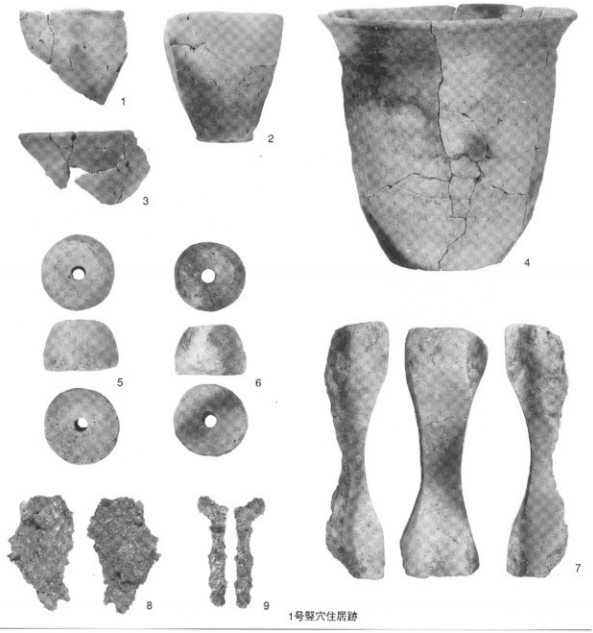


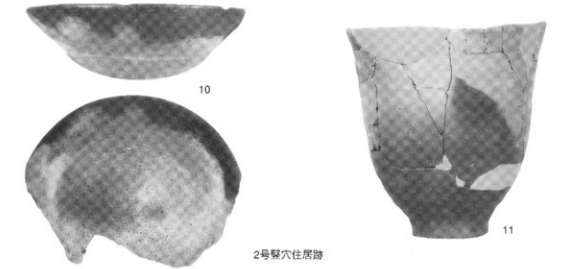
2号・4号溝（平面）



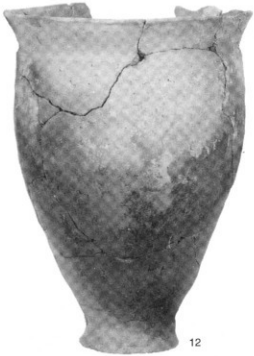
2号・4号溝（断面）

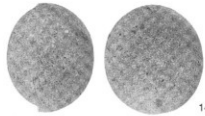
写真図版18　1号・2号・4号溝

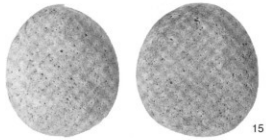


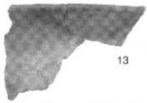


写真図版19　遺構内出土遺物（1）


12

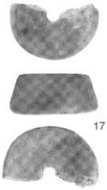

14


15

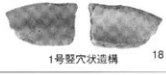

13

16

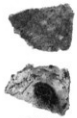
2号竪穴住居跡


17

3号竪穴住居跡


18

1号竪穴状遺構


19

1号焼土

23

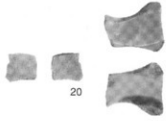
3号溝

24

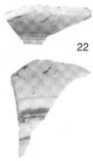
26

25

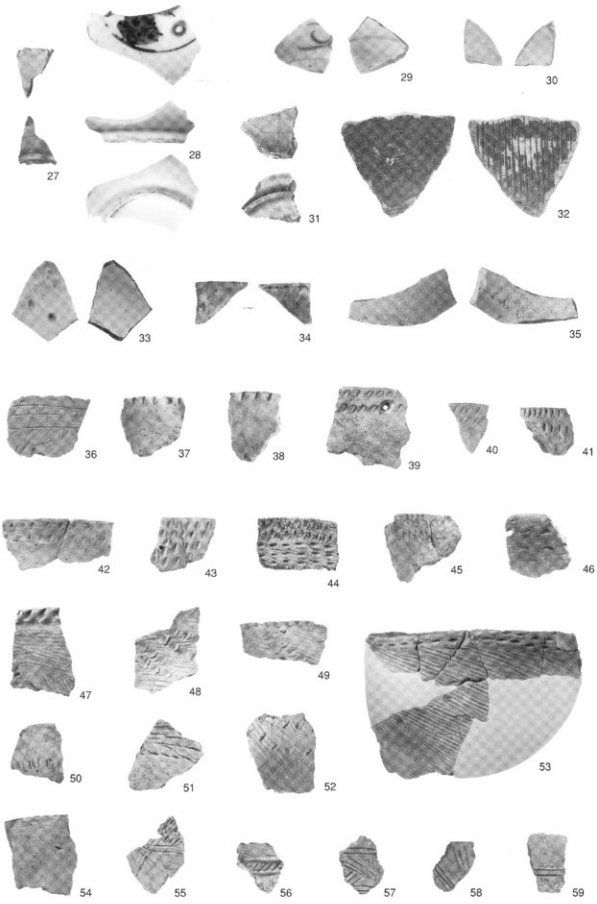
柱穴


20
21

1号溝


22

写真図版20　遺構内出土遺物（2）



写真図版21　遺構外出土遺物（1）

写真図版22　遺構外出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	なかたいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	中田遺跡発掘調査報告書
副書名	経営体育成基盤整備事業大川目地区関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第478集
編著者名	溜 浩二郎・石崎高臣
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638－9001
発行年月日	2006年1月20日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
中田遺跡	いわてけんくのへし 岩手県久慈市 おおかわめちょう 大川目町第23 じわり 地割25番地ほか	03207	JF28-2299	40度 11分 19秒	141度 42分 48秒	2004.04.14 ～ 2004.07.30	17,000㎡	経営体育成基盤整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中出遺跡	散布地	縄文時代	陥し穴状遺構 5基 土坑 16基	縄文土器（早期）1箱 土師器 8点	・縄文時代早期中葉（白浜式・小舟渡平式期）の土器が十和田南部（To-Nb）テフラ混入層から出土。 ・6世紀後半集落跡。
	集落跡	古代 中世 〜 近世	竪穴住居跡 3棟 掘立柱建物跡 1棟 竪穴状遺構 1基 焼土遺構 1基 土坑 3基 溝跡 4条 柱穴状土坑 77個	石器 6点 鉄製品 3点 鉄滓 7箱	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第478集

中田遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業大川目地区関連遺跡発掘調査

印刷　平成18年１月12日
発行　平成18年１月20日

発　行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話（019）638－9001
ＦＡＸ（019）638－8563

印　刷　㈲ジロー印刷企画
〒020-0066　岩手県盛岡市上田二丁目17番４号
電　話（019）651－6644
ＦＡＸ（019）652－2610

© ㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006